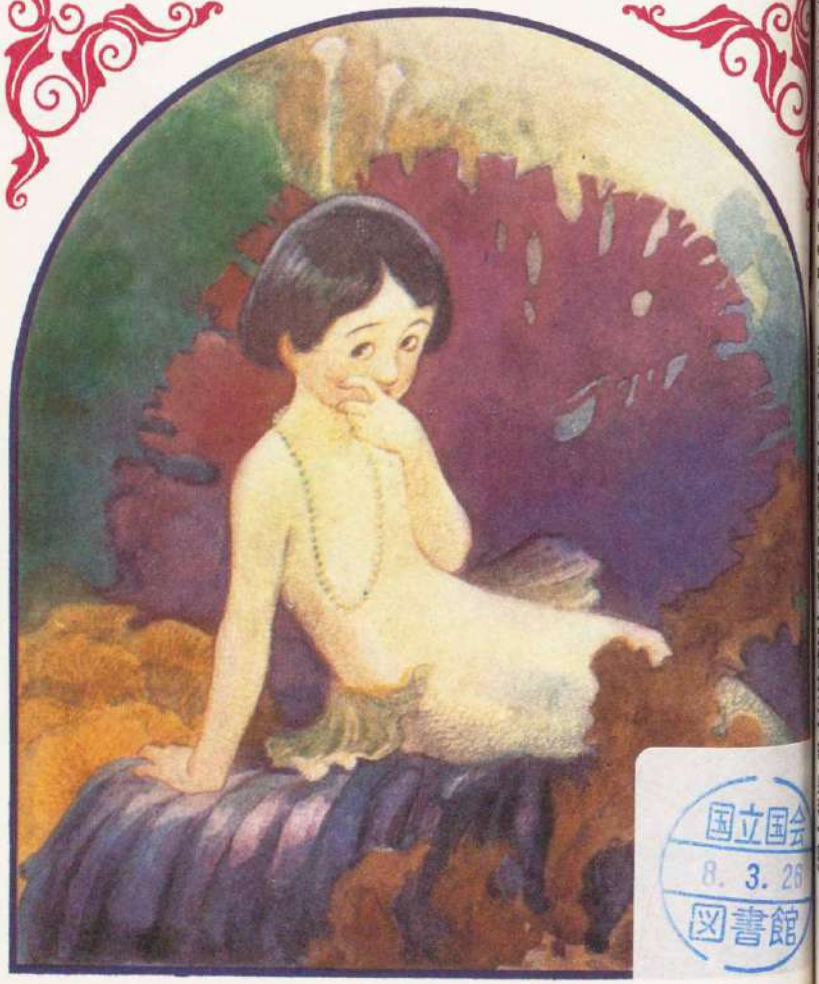
Z32-B88

大正十二年六月六日印刷納本　大正十二年七月一日發行

金の星

第五卷　七月号　第七号



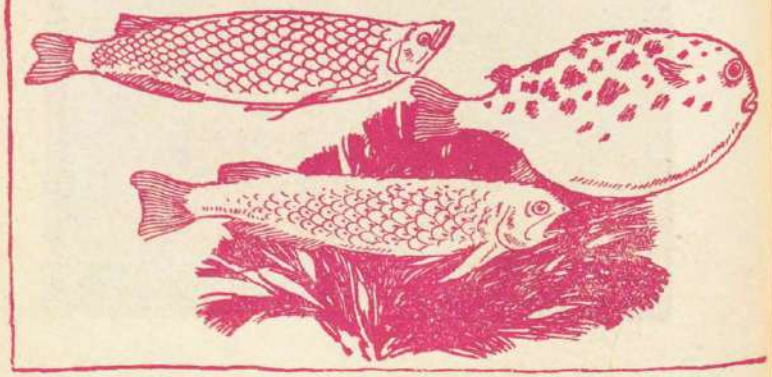
国立国会図書館
8. 3. 26

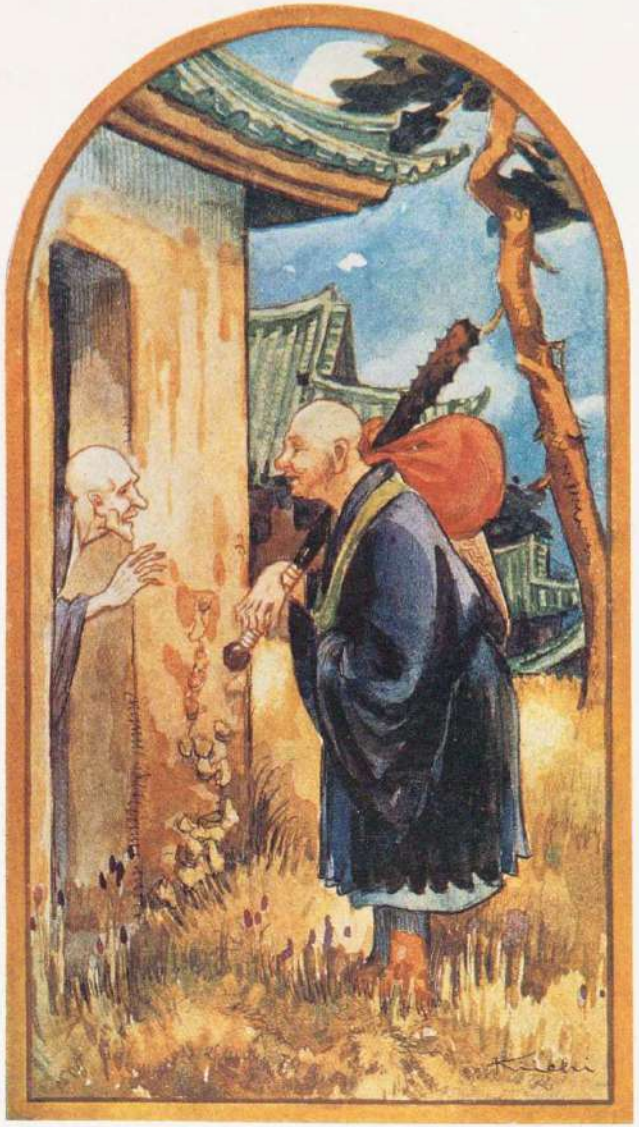
皆さんは是非お讀み下さい
それはそれは面白い本です
シベリヤの少女 野村藤惠子譯 定價一、〇〇
たから船 松本苦味編 定價二、三〇
おとぎ新日本 巖谷小波著 定價一、三〇
おとぎ花見車 巖谷小波著 定價一、九〇
おとぎ口演集 巖谷小波著 定價一、四〇
ろしあ民謡集 外曙夢譯 定價二、〇〇
ろしあ童話集 外曙夢譯
ろしあ傳說集 外曙夢譯
ろしあ伽集 外曙夢譯
定價各一、八〇
書留送料各十八錢
東京日本橋通一丁目角
大倉書店
振替東京二三八

カルピスは味のオーケストラ!!
一杯のむと
舌がダンスを始めます。
顧問 三宅驥一理學博士
販賣所・酒店・食料品店・藥店
滋強飲料
カルピス

目次

海の神祕（表紙・原色版）……岡本歸一
魯智深（口繪・三色版）
朝鮮飴屋（童話）……四……野口雨情
同作曲（作曲）……二……本居長世
ロビン・フッド（童話）……八……小島政二郎
三つの願（童話）……一八……安成二郎
牢破り（長篇童話）……二四……西條八十
阿新丸（史譚）……三〇……霜田史光
白い靴（童話）……三七……山野虎市
怠け者（童話）……四二……藤森淳三
水滸傳（長篇童話）……四九……宮島資夫
因幡踊りのお姫樣（傳說）……五八……藤澤衞彥
お化を賣つた話（童話）……六四……田中實
首無し倭人（童話）……六八……馬場孤蝶
ハンニバルの話（長篇）……七四……楠山正雄
向ふの磯に（童話）……八二……若山牧水
土佐より（講演部報告）……八四……沖野岩三郎
夜ふけの櫻（童話）……八五……野口雨情選
父さん待つ夜（幼年詩）……八八……若山牧水選
植木鉢（自由畫）……八九……山本鼎選
河に流した櫻（綴方）……八八……編輯部選
通信……九六
讀者だより……一〇二
（附錄）
長篇物語 鈍栗山（第六回）……一〇四……沖野岩三郎
挿畫……岡本歸一・水島爾保布





魯智深（口絵解説）

岡本歸一畫

荒れ果てたお堂の中に、老人の坊さんがゐました。顏色は土のやうに蒼ざめて、ぼろ／＼になつた着物を着て、ちつとうなだれてゐる姿は、まるで幽靈のやうな情けない有樣だつたので、魯智深はその譯をきゝました。

（「水滸傳」の頁をご覽下さい）

西條八十氏新著 **詩の味ひ方** 金壹圓六十錢 送料金十五錢

吉屋信子氏新著 **憧れ知る頃** 金壹圓四十錢 送料金十三錢

生田春月氏新著 小曲 **春の序曲** 定價金九十錢 料金十一錢

藤森秀夫氏新著 小曲 **若き日影** 定價金九十錢 送料金十一錢

野口雨情氏著 民謠集 **別後** 定價金九十錢 送料金十一錢

同著 **童謠作法問答** 定價金壹圓 送料金十三錢

●少女畫報主筆たる若く美しき下田氏の處女集

下田惟直氏著

胸よりにねむ

小曲詩集

●女學生間に多くの讀者を有してゐる著者の詩集が
●やつと出版されたので有るから、すばらしく愛讀
●さるゝことであらう。

▼極上優美箱入特裝定價一圓卅錢送料十三錢▲

交蘭社 東京市神田區猿楽町七十番 振替口座東京二〇四九七

米本書店の童謡書目

童謡教育の實際

雨情先生序　黑田正著

定價一圓二十錢　送料六錢

課外の可愛らしき讀み物童謡のお話と劇

説く處必ず實際と理論との、そつのない縫ひ合せであつて、省察に富んだ經驗的な陳述は、今日適所に迷つて居る多くの童謡教育當務者にとつて頗る必要な參考書であると共に、童謡研究家並に童謡教育の何たるかを知らんと欲する一般父兄の必ず一讀を要する好參考書である事を疑ひません敢て小學校教師と父兄に勸む。

正午社編

純童謡影繪のお國

定價一圓　送料六錢

雨情先生序　松波霞洋著

童謡と曲畫集

玉蟲と人形

定價一圓六錢　送料二十錢

雨情先生はこの書に序して子供の爲めになるよい本です、と。

本居、中山兩先生作曲八面初山、冬木兩氏挿畫十一葉

野口雨情、西條八十、北原白秋、三木露風、山村暮鳥、西川勉、藤森秀夫の諸先生の御寄稿を得て童の日本童謡會と「ほ」社の同人等が、若き同志を糾合して作つた敢て世に問ふ童謡集です。「童謡に面する心」「童謡私觀」の二論文と童謡に關する二百餘種の圖書總覽を入れてあります。

兒童童謡傑作撰集ゆきぼうし

定價七十錢　送料六錢

雨情先生序　童謡研究部編

可愛らしい子供さん達のほんたうの心から出た童謡の傑作集であります皆さんはきつと「ゆきぼうし」よりも御上手でせう、繪が澤山あります。

蕗谷虹兒先生の表紙繪

きれいな童謡の本で中には童謡の曲と色々な童謡畫が澤山あります。

若柳小學校童謡選集蝙蝠の唄

定價九十錢　送料十六錢

若柳校兒童は全國中で童謡が傑出して居るさうです

藤田新作　紫水著

童謡銀のつぼ

定價九十錢　送料十六錢

發行所　東京市神田錦町三ノ一　振替東京五二一三番　米本書店

兒童王國

フランス繪入童話　人魚の唄

松本苦味著

定價金五十錢　送費金四錢

◆人魚の唄・ある兵卒の話・失樂園・利口な泥坊・日曜日には働くな・笛の音◆

ひらがな童話　こいぬたち

金岡美衛著

定價金七十錢　送費金四錢

◆尋常一年から四年までの程度の童話であつて全部ひらがなである◆

フランス童話　雨の奥様と風の旦那

加藤愁譯

定價金一圓七十錢　送費金十錢

◆有名なミュセイの書いたもの　人情味の充分に發露されてゐる童話◆

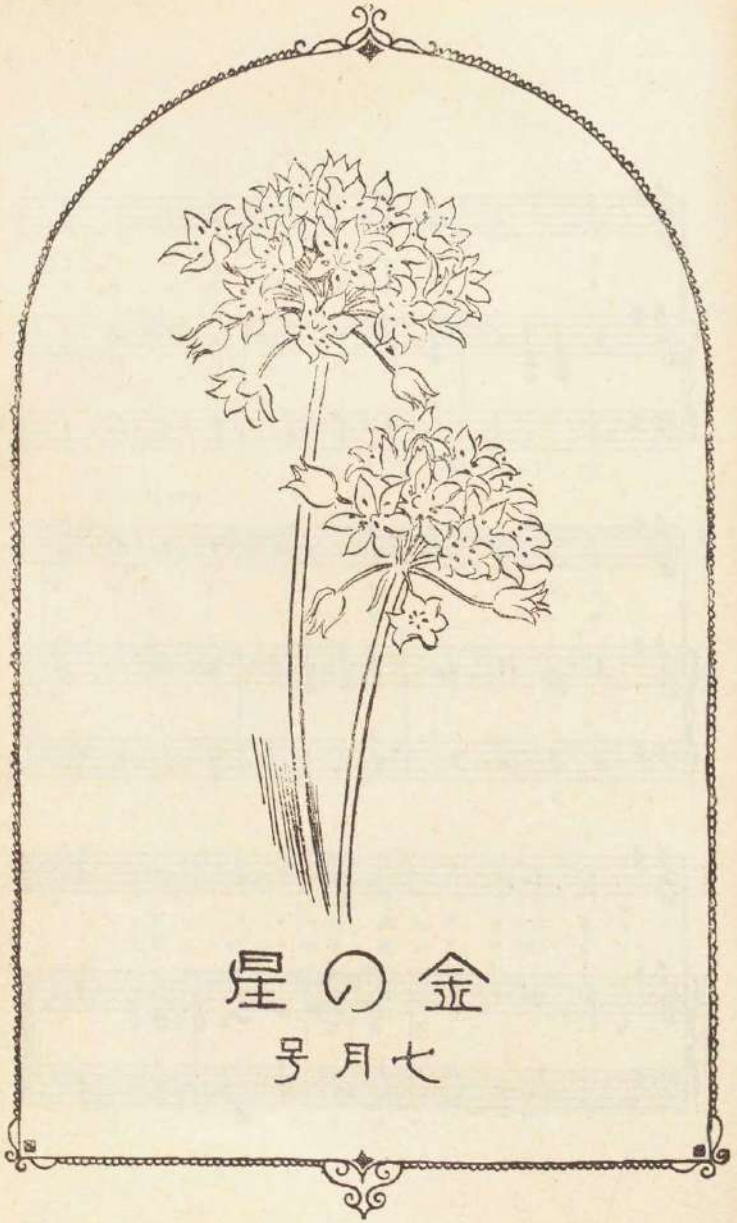
少年少女對話劇　夢の踊り子

永田衛吉著

定價金一圓二十錢　送費金六錢

◆文部省は、本書を一般兒童の好讀物として認定せり、眞價は、至上也◆

發行所　東京市京橋區北槇町十一番地　振替東京三三一六　紅玉堂書店



西條八十先生著

抒情小曲集

哀唱

加藤まさを先生裝幀挿畫
本居長世先生作曲
中山晋平先生作曲

優雅の情、絢爛の才を以て當代に鳴るこの天才詩人の近作數十篇を收む。若く美しき著者が、胸顫はせて歌へるこれらの詩篇は、月光の下の薔薇の如く薄紗の蔭の佳き瞳の如く讀者の心を魅了せずんばやまざるべし。裝幀は深紅色の繻子を用ひて華麗の極!!。内容は全部悉く新作。卷頭に著者の近影を添へたり。

最新刊

ポケット型三五判
定價金壹圓七十錢
送料金十二錢
紅繻子表裝函入

東京市日本橋區大傳馬町二丁目
内田老鶴圃刊行
振替東京壹壹四六壹壹貳電話堀留一三三五

童話アイアンの島廻り　西條八十先生著　定價金貳圓　送料金拾二錢

幼兒に聞かせるお話　日本幼稚園協會編　定價三圓八十錢　送料金拾六錢

新童話傑作選集　第一輯　讀賣新聞社編　定價貳圓五十錢　送料金拾貳錢

新童話傑作選集　第二輯　讀賣新聞社編　定價貳圓五十錢　送料金拾貳錢

加藤まさを先生著

童謡集合歡の搖籃　價貳圓平十錢　送料十二錢

童謡畫集人形の墓　價貳圓平十錢　送料十二錢

抒情詩畫集涙壺　價貳圓十錢　送料十二錢

朝鮮飴屋

本居長世作曲

M.M.♩=120

ちゃうーせん　あめーやは　あめトロ
トロートロ　さろーける　あめトロ

り　こざーもに　あめうって
り　こざーもが　あめかって

あめトロり　トーロり
あめトロり　トーロり

トーロり　あめートロり
トーロり　あめートロり

朝鮮飴や

野口雨情

朝鮮飴やは
飴トロリ
子供に飴賣つて
飴トロリ
トロリ　トロリ

飴トロリー
トロトロとろける
飴トロリ
子供が飴買つて
飴トロリ
トロリ　トロリ
飴トロリー

ロビン・フッド

小島政二郎

大昔は、英國は森林で掩はれてゐました。栗鼠などといふ獸は、木から木を渡つて、英國ぢうを旅して廻れたといふことです。今とは大へんな違ひです。しかし、その頃からさういふ大森林の間に、北から南へ、または東から西へと通ずる往還はちゃんとありました。さうして絶えず人通り・民から憎まれてゐました）が、大勢のお供をつれて悠々と馬に跨づて行く、商人が品物を持つてトボ〳〵と行く、と云つた風でした。

往還から脇へそれると、小徑があつて、その小徑を傳つて行くと、青々とした畑があつたり、お百姓家があつたり、炭燒が住んでゐたり、森の奥に立派なお城やお寺の屋根が見えたりしました。

その頃のことです。さう云つた大きな森の中を住まひとしりもありました。お百姓さんが行く、騎士（日本で云へば武士）が馬に乘つて行く、お坊さん（その頃は大した勢力があつて、政治には口を出す、お金は澤山持つてゐる、中には惡い奴がゐて、大層人

てゐる盗坊にロビン・フッドと云ふ大將がゐました。盗坊といふと、いかにもこはい感じがして、みんなからさぞ嫌はれてゐたらうとお思ひでせうが、このロビン・フッドに限つて、さうではありませんでした。あべこべに、みんなから神さまのやうに尊まれ、友達のやうに親しまれてゐました。と云ふのは、いつもこのロビン・フッドは弱い者、いゝ人間の味方でしたから……。その代り、惡い人間からは惡魔のやうに憎まれてゐました。さうでせう、あいつは惡い奴だ、いゝ人間をこんなに苦しめてゐるといふ噂を聞くと、どんな遠いところへでも出かけて行つて、きつと懲しめずにはおかなかつたのですから……。

最近ノッチンガム州の知事が、人民を苦しめてよくない行ひをするといふ噂を聞いたロビン・フッドは、手下に命じて、知事が通りかゝつたらとッつかまへてしまへと、大勢のものを方々に潜ませておきました。その中に、ロビン・フッドの一子分で、チビのジョンといふのがゐました。チビと云ふから小さい男かと思ふと、さうではなくて、身の丈が七尺五寸、腰のまはりが四尺もあらうといふ大男だからをかしいぢやアありませんか。それをなぜチビと云ふのか誰も知りませんでした。

そのチビのジョンが、或木の蔭に隱れながら、すぐ目の前を通つてゐる往還を、ノッチンガムの知事か、それでなければ惡い噂のある、誰か通らないかしらと思つて待ちかまへてゐましたが、その日に限つて、往還へは人の姿一つ馬の姿一つ見えずに、たゞ白い往還が一筋、太陽の光の中に東から西へ長々と横はつてゐるばかりでした。

『あァあ、今日は不漁だな。』と、チビのジョンが欠伸をした拍子に、チラと騎士の姿が目にはひりました。『おや、』と思つてよく見ると、これはまあどうしたことか、世の中にこれほど衰れな姿をした騎士があるだらうかと思はれる程しよんぼりと衰れな姿をしてゐました。首はうなだれ、手綱はゆるへ片足は鐙に乘つてゐます。けれど片足はダラリと馬の横腹のところにブラ下つて、馬は勝手にボカ〳〵歩いてゐるのでした。一目見ただけでも、『あゝこりやア何か大きな心配事があるんだな』とすぐ分るほどでした。

ジョンは、この騎士の悲しい樣子を見て、氣の毒に思ひま

した。『悲しめる者を慰さめよ』といふ自分の主人の言葉を思ひ出しました。で、前を通りかゝるのを待つて、

『わが騎士よ。私は私の主人の名で歓迎します。』と云つて迎へました。

『わが友よ。君の御主人はなんと云はれますか。』と相手も儀深くたづねました。

『ロビン・フッドと申します。』

『あゝロビン・フッド。私はこれまでに幾度も、ロビン・フッドのいゝ噂を聞きました。では、どうか御案内下さい。』

そこで二人は、往還をそれて、森の中の小徑を踏んで行きました。騎士は馬を進めながら、ハラ〳〵と涙をこぼしました。

二人がやがてロビン・フッドのゐるところへ着くと、フッドは

『やあ、よく來られました。しかも、ちやうどいゝところでした。私は今まで精進をしてゐましたが、それが終つたところです。』

かう云つて、まづ二人は傍を流れてゐる小流れで浴みをすませてから、パンと葡萄酒の並んでゐる食卓——と云つても森の中のことですから、野天の下の青芝の上に、無骨に出來た生木のテーブルを置いただけのものです。肉はみんな燒き肉で、種類は鹿、鵠、雉子などでした。

『さ、御遠慮なく召し上つて下さい。』

『御馳走になります。こんな御馳走には三週間ぶりで出逢ひます。この次ぎにお目にかゝる時には、私の方でかういふ御料理をさしあげたいものですな。』

二人は愉快げに食事をとりました。フッドは、いゝ加減の頃を見計つて

『失禮ですが、大體の模樣は、チビのジョンから聞きましたが、なぜあなたはあんなに悲しい樣子をしてゐられたのですか。もしお差支へなくば、話して聞かせて下さい。』

『いや、お尋ねにあづかつてお羞しうございます。實は、私の父は百年も昔から、やはりこの續きの森の中に、城を持つてゐる騎士の一人でした。その頃は幸福で、年に四百ポンドも使つて贅澤に暮してゐました。ところが、私の代になりまして、それもホンの二年かそこらのうちに不幸が續いて起つ

たために、私はじめ妻も子供も悲しみと心配とのために痩せてしまひました。』

『して、その御不幸と云ふのは、どうした譯ですか。』

『それも、もとは私が無暗に息子をかはいがり過ぎてからのことなのです。私の息子は氣が荒くて、騎士の子としては仕合せと武術に強い方でした。そこに悖むところがあるものですから、まだ二十にもならぬくせに、隣の國の騎士の一人と爭ひ事をでかした擧句に、その騎士と從者とを斬つて捨てました。ところが、向ふから父である私のところへきびしい掛け合ひが來ました。それを無事に治めるには、非常な大金を出さなければなりません。ところがその金が私の手許にない。しかし、どうでも用立てねばならぬので、私はいろ〳〵思案をした擧句、あなたも御存じでせう、あのセント・メリー寺院の富んだ僧院長に、私の領地を抵當にそれだけの金を借りました。』

『その金高はいくらですか。』

『四百ポンドです。ところが、その金をかへす約束の日が明日に迫つてゐるのに私には今十シルリングしかないのです。』

『もしあなたは領地を失はれたらどうするおつもりですか。』

『海へ身を投げて死ぬより外に道はありません。で、譯を話して僧院長にお金をかへす日を伸ばしてもらはうと思つて城を出て來たは來たものの、なか〳〵そんな、優しい坊さんでもなし、とても待つてはくれまい、あゝ、どうしたらよからう、と思ひ屈してやつて來るところを、あなたの御家來にお逢ひしたやうな譯です。』

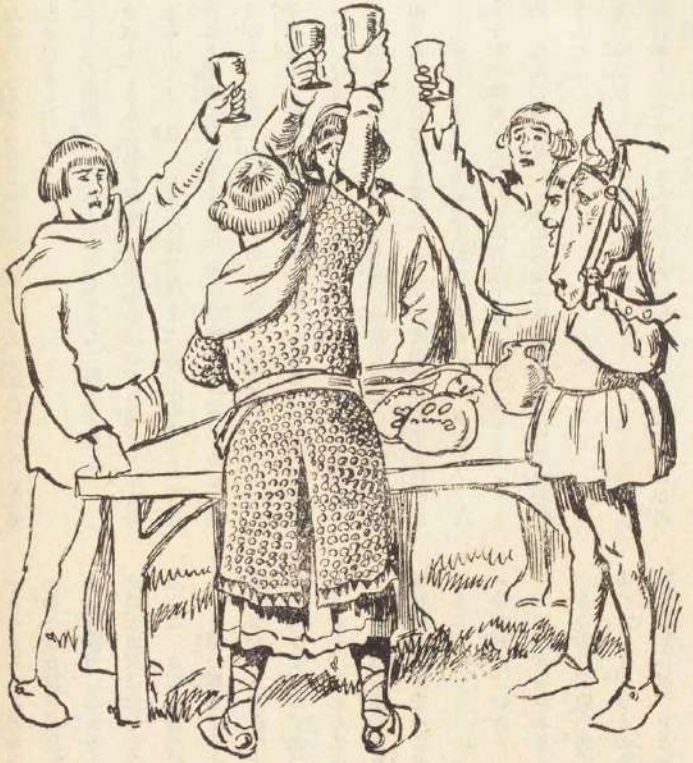
こゝまで語つて來て、騎士はハラ〳〵と涙をこぼしました。

『しかし、そんなことを一人でくよ〳〵考へてゐたところでどうにもなる譯でもありません。やつぱりこれから行つて、僧院長に賴んでみませう。』と、男らしくすつくと立ちあがりました。

『わが友よ。いろ〳〵御厄介になりました。また運があつたらお目にかゝりませう。左樣なら。』

かう云つて立ち去らうとする騎士の腕を、ロビン・フッドはしつかりと引きとめました。

『あなたには、さういふあなたの否運を救つてくれる友達はゐないのですか。』



『はい。友達はゐましたが、私が貧乏になると共に、みんな私を忘れ去つてしまひました。私が富んでゐる時分には、毎日のやうに城へ來てゐる者まで今では道で逢つても顔をそむけて通る始末です。』

かう云ふ話を聞いて、傍にゐたチビのジョンをはじめ大勢の豪傑達も、貰ひ泣きをして口惜しがりました。

ロビン・フッドは、家來を顧みて

『騎士のコップに、一ばんいゝ葡萄酒をもう一ぱいついであげてくれ。』と命じておいてから、チビのジョンに向つて、

『御苦勞だが、例の寶のしまつてあるところへ行つて、四百ポンド持つて來てくれ。』

チビのジョンは二つ返事で氣輕に立ち上つて出て行きましたが、間もなく大勢にお金をかつがせて戻つて來ました。それを受け取つて、ロビン・フッドが勘定を終るのを待つて、小さな聲で

『親分、騎士の服をごらんなさい。あんな薄着をしてゐて寒さうぢやァありませんか。あなたは寶笥の中に、イギリス中の衣裳屋の誰だつて叶はないくらゐ青や赤の着物を持つて居らつしやる。騎士のためにどれか一枚私が選んで來てもいゝでせう。』

『うん、よろしい。』

『その外に、馬も一匹おやんなさい。寺院へ乘り込んで行くのにふさはしいのを……。』

『よし、ぢやァ灰色のをあけろ。ついでに、新しい鞍をつけてあけろ。替へ馬と長靴も揃へておけ。それから騎士がお供なしでは見ッともないから、ついでのことに、ジョン、お前供をして行つてあけろ。』

思ひもかけぬ、見も知らぬロビン・フッドの親切に、騎士はどんなに喜んだでせう。目に一ぱい嬉し涙を溜めて、ぢつとフッドの顔を見入りながら

『親切なる友よ。いつ、どこへ、このお金をかへしに來たらいゝでせう。』とたづねました。

『さう。一年後の今日、さつきジョンとお逢ひになつたあの綠の大木の下でお待ちしてゐませう。』

幾度もく〳〵禮を述べたあとで、騎士は、チビのジョンをうしろに從へて、またもとの往還へ戻り、改めてセント・メリー寺院への道を進みました。ポク〳〵馬を歩ませながら、ロビン・フッドや手下の豪傑達のことを一人で思ひ出してゐました。さうしてみんなの自分に寄せてくれた心からの親切を感謝し、皆の上に幸福あれと祈りました。

やがて、ジョンに向つて

『明日までに、どうしてもセント・メリー寺院へ行きつかなければならないのですが、大丈夫ですかね。約束の時間に一分でも遲れれば、領地は取られて了ふ約束なのですが、それを思ふと心配でたまりません。』と云つて、馬を早めました。

二

話し變つて、セント・メリー寺院の方では、約束の日の午後になつても、騎士が姿を見ませんので、『今までやつて來ない

ところを見ると、四百ポンドの金が返せないのだな 締め〳〵あの廣い領地が、こつちの思はく通り、僅か四百ポンドでわしの物になるのだ』と喜んでゐました。

ちやうどその時、門番が

『開門。騎士のおいでございます。』と、聲高らかに叫ぶのが聞えました。

やがて、廊下に足音がして、騎士が姿をあらはしました。

『僧院長。御機嫌よろしう。お約束通り、今日まゐりました。』

來ないと思つてゐた騎士がやつて來たばかりでなく、落ち着き拂つてゐる樣子を見ると、僧院長は當がはづれたやうな氣がして、思はず

『貸たお金をお持ちかナ？』と不機嫌な音調で云ひました。

『いえ、一文も持つてまゐりませんでした。』わざと、かう云つたらどんなあしらひをするかしらと思つて云つてみました

すると、急にこはい顏付になつて

『一文も持たずに、何しにこゝへお出でだ？』と、嚙みつくやうにどなりつけました。

『もう暫く日を伸ばしていたゞかうと思つて、そのお願ひに來ました。』

『いや、日は極まつてゐる。のばす譯にはいきません。』

『さうでもありませうが、實は私の友人が、もう一月も待つてもらへれば、僕がその金を拂つてあげようと云つてくれたのです。それでお願ひに出ました。どうぞそれまで待つて下さい。』と、さも一生懸命のやうに賴みました。

その頃、裁判所は寺院の中にありました。裁判官は坊さんでした。その裁判官の坊さんがその席にゐましたが、

『騎士閣下。われ〳〵裁判官の目から見ても、僧院長の云はれる方が正しいと思ひますネ。』と口を挾みました。

騎士は、それでも

『僧院長、どうか私に同情して下さい。私が、お金を得て領地を買ひ戻すことが出來る時まで待つて下さい。』と、繰りかへして賴みました。

しかし、僧院長はどうしても聞き入れませんでした。

『今日は約束の日だ。金が返せなければ、領地はこつちへ取り上げる。』と同じことを云ひ張るばかりでした。

『勝手になさい。』と、たうとうしまひに、騎士はすつくり立ち上りながら、どなりつけました。『こつちの困つてゐるのにつけ込んで、親切らしく持ちかけて、その實僅かばかりの金で、父から私が讓られた大事な廣い領地をブン取らうとする 諜 が、それでよく分つた。』かう云ひながら、騎士は僧院長をぐッと睨みつけました。

僧院長はあわてゝ

『約束を守らぬ騎士よ。出て行け。』と、威勢を張つて叫びました。

しかし、騎士はビクともせずに、その儘そこに立ちはだか

つて

『詐欺師の僧院長よ。私は一度だつて約束を破つたことはない。』

二人の爭ひになつたのを見た裁判官の坊さんは、

『僧院長。もう二百ポンド騎士におやんなさい。さうして領地をあなたのものになさい。四百ポンドであんな廣い領地を取るのは少し穩かでないと思はれるから……。』と傍から智慧をつけました。

『いや、それには及ばない。』と、騎士が大聲で遮りました。

『千ポンド出したつて讓るものか。私の領地のあとつぎには、僧院長や裁判僧や坊さんなどは眞ッ平だ。』

騎士はキッパリ云ひ切るが早いか、ツカ〳〵と大股にテーブルに歩み寄つて、財布をさかさまにザラ〳〵と四百ポンドの金貨をあけ散らしました。

『僧院長よ。去年借りた金だ。受け取つてもらはう。もつと禮儀正しく受け取るなら、利息をつけて返すつもりだつたのに……。』

からかふやうにかう云つて、スタ〳〵廣間を出て行きました。僧院長をはじめ坊さん一同、そのうしろ姿を見送つたまま、しばしは唯ぼんやりとしてゐるばかりでした。

三

騎士は馬を飛ばして、やがて自分の城門まで歸つて來ました。迎へに出た奥方は

『夫よ。お歸り遊ばせ。たうとうわれ〳〵は領地を失つたのですか。』

と悲しさうに尋ねました。

『妻よ。喜んでおくれ。私は領地を買ひ戻すだよ。』

かう云つて、ロビン・フッドの親切について詳しく話して聞かせた後に、『さ、二人でロビン・フッドの幸福を祈らう。あの人がゐなかつたなら、私達は今頃は乞食になつてゐたかも知れない。』

と膝まづいて神に祈りました。

それから後の毎日を、騎士は一生懸命に自分の領地をめぐつて、いろ〳〵と世話をしました。その一方では、險約をしてお金を溜めることを心がけました。

そのお蔭で、一年たゝぬうちに、ロビン・フッドから借りた四百ポンドのお金が溜まりました。

やがて、約束の日が來ました。騎士は鎖が銀、それに孔雀の羽根のついた矢を百本・弓を百本こしらへ、自分は白と赤との服を着て悠々と馬に跨り、百人のお供を從へて、例の綠の大木の下に行きました。

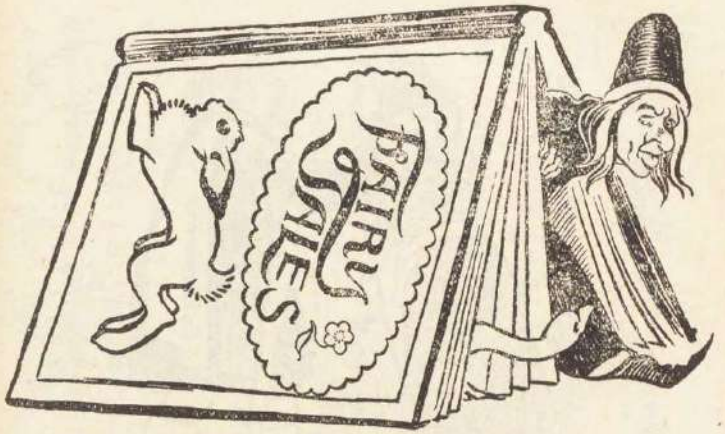
見ると、そこには、ちやんとロビン・フッドがチビのジョンをはじめ大勢の手下をつれて出迎へてゐました。

騎士が厚く禮を述べて、四百ポンドのお金をかへさうとすると、フッドは

『いや、それはいたゞきますまい。實はあなたに四百ポンドを用立てゝから、不思議なことが起りました。と云ふのは、聖母マリアが現れて、私にお金を返して下さつたのです。それなのに、またあなたから受け取れば、私は二重に受け取る譯です。そんな羞しいことは出來ません。』

かう云つて、どうしても受け取りませんでした。

しかし、騎士が心をこめた贈物であるところの弓と矢とだけは喜んで受けてくれました。



三つの願ひ

安成二郎

一

ベシーはお伽話を信じて、不思議な魔術を使ふ仙女といふものが本當にあるものと思つて居りました。『母さんは仙女を御覽になつたことがありますの？』ときとく、母さんは笑つて『いいえ』と頭を振りますが、それでもベシーは、仙女がどこかにゐるに違ひないと信じてゐました。

ある晩、ベシーは窓際に坐つて、膝に大きな本を廣げて讀んでゐました。それはお伽話の御本で、美しい繪が澤山にありました。仙女が靴の中にお金をどつさり入れて呉れることや、その外さま〴〵の不思議なお話が書いてありました。

日が落ちて、紫色の柔らかい靄が向ふの小山にかゝるとベシーは溜息をして、お伽話の本を閉ぢました。

お父さんとお母さんは餘所へお出かけで、ベシーがひとりお留守をしてゐるのでした。女中達は臺所の方で働いてゐて、話聲や皿を洗ふ音などが聞えてゐました。どこかでピアノが鳴つて、お庭の木立からは何かの花の匂ひがして、それは本當に靜かな晩でした。ベシーは、もし仙女が出て來るなら屹度こんな晩に違ひ無いと思つて、ぢつと窓の外を見て居りまし

した。そのうちに、すつかり暗くなりましたが、其の時、お庭の垣根の外で妙な光りが見えて、あつちへ行つたり、こつちへ行つたり動き初め、小藪の中に隱れたり、高々と空中に上つたりしました。

それを見ると、ベシーは今讀んだお伽話の仙女が、不思議な光りを持つて歩いてゐるやうに思はれて、その神祕を見定めて見たくて堪らなくなりました。たうとうベシーは庭に出て、女中のアンに氣付かれないやうに、ソッと芝生の上を歩いて門の外へ出ました。ベシーは『アンは大人だから、仙女達が見たら驚いて逃げるだらう』と心配してゐるのでした。

門の外へ出た時、どこにも先刻の光りが見えないので、もう仙女は居なくなつたのかとベシーは大變失望しましたが、間も無くまた向ふに明りが見えて、あちこちと動き初めました。ベシーは恥づかしいやうな、恐ろしいやうな氣がして身體が顫へましたが、それでも大膽に其の光りの方へ進んで行きました。光りの動いてゐるのは、人の通る道から少し離れた林の中でした。

ベシーは光りを目あてに、暗い林の中をソッと忍び足で入つて行きました。光りは木の間に光る星のやうに見えましたが、ベシーがその光りの間近かになつた時、暗の中からぢつとベシーの來るのを見てゐる目がありました。それはちつとも美しい目ではありませんでした。ベシーは急にお家が戀しくなつて林の中などへ來なければよかつたと思つて、引返さうとしましたが、すると其の時、不思議な光りは消えて、不意にベシーは大きな手で肩を掴まれました。そしてパッと明るい光りで顔を照らされたのです。

見ると、背の低いお婆さんで、手にはがんどう提灯を持ち頭には赤いハンケチを卷てゐて、片手には變な曲つた杖をついてゐました。

その不思議な杖を見ると、ベシーは直ぐにこれは魔術使ひの仙女だと思ひました。ベシーのお伽話の本には、さういふ杖を持つた仙女が書いてありました。で、ベシーは安心して極り惡さうに言ひました。

『あなたは仙女ですの？』

『え、何？』とお婆さんが訊き返しました。

『仙女のお婆さんですの？』とベシーは繰返しました。

『あゝ、さう〳〵、私は仙女ですよ。可愛い娘さん、お前が誰れにでも私を見たことを話したら、お前の家に惡いことがあるよ』

『御免なさい、どうぞ、決して誰れにも言ひませんから』とベシーは恐ろしさにすゝり泣いて言ひました。

『よし〳〵、もう泣かないで、人が聞くといけないから』と

仙女は言ひました。

ベシーはもう怖くはありませんでした。そして、仙女は誰れにでも三つの願ひを聽き容れて與れるものだといふことを思ひ出して言ひました。

『お婆さん、私の三つの願ひを許いて下さいね』

『三つの願ひだつて？お前が私の言ふことを守らなければ三つ叩いてやるよ』と魔術使ひのお婆さんが言ひました。

ベシーは、魔術使ひの仙女は、意地の惡いものだとお伽話の御本に書いてあるのを思ひ出して、別に驚きはしませんでした。

『三つの願ひを許いて下されば、お婆さんの言ふこと何でも守ります』とベシーは言ひました。

『けれど、お前は子供だから駄目だらう』

『いいえ、確かに守ります、何でも言つて御覽なさい』とベシーは言ひました。

『お前の家はどこなの？』とお婆さんは言ひました。

『直ぐそこですの、此の林の向ふの』

『どこにも家か無いぢやないか』と、お婆さんは審かるやう

に訊ねました。

『今夜はお父さんもお母さんもお留守ですから、お部屋にランプがついてゐないので、ここからは分らないのですの』とベシーは答へました。

『それではお前一人ゐるの？』

『いいえ、女中のアンとルシーが居るんですの』

『男の人はゐないの？』

『今は居りません、下男は母さんが連れて行きましたから。だけど直き歸つて來ます、お父さうも』

お婆さんの仙女は提灯を後ろに隱して、草の上に坐り、それからベシーの肩に手をかけて傍に引き寄せました。そして、

『お前は誰にも言はないと約束をしなさい』と言ひました。

『約束をします、決して言ひません、その代り私の三つの願ひを許いて下さるでせう？』

『何でも私の言ひつけることをしますか』

『え、きつと』とベシーは重々しくうなづきました。

『それでは、お前の三つの願ひを言つて見なさい』

『一番に私は、私とお父さんとお母さんと三人の靴にお金を一杯入れて頂きたいの。それから私に身體の見えなくなる帽子と、それから——』

『おや』と仙女は言ひました。『お前はもう四つ言つたぢやないか？』

『いいえ、二つですわ。お父さんとお母さんと私の靴にお金

を入れて下さるのが一つの願ひですもの」
『解つたよ、殘りの一つを言つて御覽』
『さうですね』とベシーは考へ込んで『も一つは、私が大きくなつて仕合せな人になることです。それで三つです』
『よし〳〵、皆んな承知した。お金と帽子と大きくなつて仕合せになる魔法の杖を、皆んなお前の枕元に置いて上げるから、私の言ひつけることを、よく聽いて、その通りにするんだよ』
『え、何でも』とベシーが言ひました。
『お前は今夜、皆んなが寢たあとで、ソッと起きて、入口の扉の鍵を外して置くのです。でないと、私の使ひにやる仙女が、お前の家に入ることが出來ないから』
『きつと鍵を外して置きます』とベシーは言ひました。そして、朝になつてお父さんとお母さんが、靴の中にお金が一杯入つてゐたら、どんなにお喜びになるだらうと思ひました。そして自分は、身體の見えなくなる帽子を冠つて、皆んなをびつくりさせてやら、と考へました。
『お前の家には犬がゐるか』とお婆さんがまた言ひました。

『ゐますが、大變好い犬で、惡い人にだけ嚙みつくのです。名前はジョンと言ふのです』
『鎖に繋いで置くのか？』
『夜は鎖から解いて、庭を歩かせて居るのです。盜人が來るといけませんから』
『さうか、それではお前、此のお菓子を犬に食べさせて呉れ。仙女は犬が大變に嫌ひだからね。此のお菓子を食べさせると犬は仙女を見ても吠えなくなるのだよ』さう言つて、仙女のお婆さんは、ベシーへ綺麗なお菓子を一つ渡しました。
『よく分りました。それではお父さんとお母さんと私の靴を揃へて置きますから。あなたのお使ひの仙女にお金を一杯入れさせてね、忘れないで』とベシーは言ひました。
『左樣なら』と仙女のお婆さんが言つて、直ぐにどこかへ見えなくなつて仕舞ひました。ベシーは大急ぎで家へ歸りました。そしてお庭でジョンを見つけると、犬の耳に口を寄せて小さい聲で『お上り、之は仙女のお菓子なのよ。そして今夜仙女が來ても吠えてはいけないよ』と言つて、お菓子をやりました。ジョンは嬉し氣に尾を振つて、お菓子を食べました。

ベシーは靜かにお家へ入りました。アンとルシーはまだ臺所にゐて、何か笑つて話し合つてゐました。ベシーが仙女に會つたことは誰れにも氣付かれないのでした。
ベシーは少し疲れたので、お部屋に坐つてぢつと今の仙女のことを考へてゐると、アンが來ました。
『アン、もう何時なの、母さんはお歸りがおそいのね』
『八時半でございます。もうお母さまもお歸り遊ばすでせう。お菓子を食べて待つてゐらつしやい』
ベシーはアンからお菓子を貰つて食べながら、お玄關へ行つて見たり、お部屋を歩いたりして、お母さんを待つてゐました。何だか妙に寂しくなつて來ました。
間もなくお父さんとお母さんがお歸りになりました。お母さんはベシーを見て、『どうかしたの、疲れたやうな寒さうな顏をしてゐるのね』と言つて、膝に抱きました。
ベシーはどんなに仙女の持つて來る仕合せを、お父さんやお母さんにして上げたかつたでせう。きつとお喜びになると思つたのですが、誰れにも言はない約束でしたから、たゞ、

『え、私眠いの、母さん』とだけ言ひました。
それで、お母さんはベシーを抱いて寢床に連れて行つて寢かせました。そして、
『母さんは晩の御飯がまだですから、食べたら直ぐ來て上げますよ。お目々をつぶつて早く眠りなさい』と言つて、あちらへ行きました。
ベシーは直ぐに眠りました。そして、今度目を覺ました時

は、お家の中はしんとして、誰れも皆な眠つてゐました。ベシーは傍に寝てゐるお母さんに氣付かれないやうに、ソッと起きて、隣りのお父さんの部屋へ行つて、寝臺に掛けてある鍵を持つて、玄關へ行つて扉の錠を外しました。そしてそこへ、お父さんとお母さんと自分の靴を並べて置いて、鍵を元の所に返し、靜かに自分の床に入つてゐました。

ベシーは暫らく耳を澄ましてゐましたが、玄關の扉の開く音は聞えませんでした。

『どうしたんでせう、仙女は來ないのかしら。私はちやんと言はれた通りしたのに』とベシーは考へながら、何時の間にか、また眠りかけました。すると其の時、何か物音がして、ベシーははつと思つて目がさめました。ベシーは仙女が來たのかも知れないと思つてソッと寝臺の上に立ち上り、窓から廊下を覗いて見ました。ベシーはどんなにびつくりしたでせう。二人の大きな男が廊下にゐたのです。一人は林の中の仙女のやうに、がんどう提灯を持つてゐて、あちこちと動かしたり、上げたり下げたり、そこらを照してゐるのでした。

何をするのでせう？ベシーは息を殺して見てゐました。

一人の男は肩に袋を擔いでゐました。二人は廊下に立つて方々見廻してゐましたが、やがて、臺所の前の戸棚へ行つてそれを明け、中から銀の皿や匙をとり出して、その袋に入れ初めました。ベシーはほんの子供で、仙女のお伽話をも信じてゐる位ゐですが、二人の男のしてゐることは好いことでないと考へました。で、ベシーは急いで隣りの部屋へ行つて、お父さんを呼び起しました。

『お父さん、お父さん、大きな男の人が二人入つて來て銀の皿を持つて行くところです、早く追ひ出して下さい』

お父さんは跳び起きました。そして兩方の手にピストルを持つて驅け出しました。ベシーもあとについて行きました。

廊下へ出ると、二人の男はびつくりして振返りましたが、お父さんがピストルを二つも持つてゐるのを見ると、あわてて袋を投げ捨てたまゝ、戸口の方へ逃げ出しました。そしてお父さんは、そのあとを追つて行きました。

騷がしい音で目を覺ましたお母さんは、何事が起つたかと來て見ると、ベシーが廊下の隅で泣いてゐるので、急いで抱き上げました。直ぐにお父さんは歸つて來ました、大變むづかしい顔をしてゐました。二人の男は逃げてしまつて、犬のジョンは玄關の前に死んでゐたのでした。

女中のアンやルシーも起きて來て、皆んなで皿や匙を元の所に仕舞つてゐるうちに、もう夜が明けました。それで、もう仙女はあの騷ぎで來られなかつたのだと、ベシーは思ひました。そしてお母さんの膝にもたれて、シク〳〵泣き出しました。お母さんは不思議に思つて、

『ベシーや、何が悲しいの、どうしてさう泣くのですか』と優しくお訊きになりました。

ベシーは、お母さんに林の中の不思議なお婆さんの話をして、靴のことや、犬のことや、玄關の扉の鍵のこともお話しました。

お母さんは、それを聞いて、いぢらしさうにベシーを抱きかゝへて、何度も頭を撫でてやりました。そして、それから長い間、夕方になると、お母さんはベシーの傍を離れずにつゐてゐるのでした。それでベシーは二度と不思議なお婆さんに會ひに行くことが出來ませんでした。（なほり）

チエラール中尉の冒險談

長篇

牢破り

西條八十

一　ダートムーアの牢獄

『諸君！僕――佛國騎兵中尉エティエンヌ・チエラールが、西班牙の山賊どもの罠にかかつて危く生命を奪はれようとしたところを、英國の士官に助けられた顛末は、先夜話した通りだ。ところで今夜これから話さうとするのは、英國軍に俘虜となつてからの僕の身上だ。』（と、老大佐はまたもや若い頃の功名談の續きを始めました。）

ラッセル中尉と賭勝負をして、うまく相手を負かしたので『もうこれ　自由の身になれた。』と大喜びで馬に一鞭、一目散に傍の坂路を駆けのぼると、思ひきや眼の前には黒山のや

うな英國軍、――わけも無くそのまゝ僕は敵の捕虜とされてしまつた。

ところで、自分から云ふのもをかしいが、その頃「鬼」と呼ばれたチエラール中尉の名は英國の陣中にもかなり響いてゐたので、僕はおなじ捕虜仲間でも特別に鄭重な取扱ひをうけた。が、いよいよ「宣誓」と云ふ段になると、僕は斷乎としてはねつけてしまつたので、それからはほんたうの囚人としてダートムーアの牢獄へと送られることになつた。

諸君はご承知あるまいが、この「宣誓」といふのは、神に向つて「もう二度と私は戰をしません。」「武器を持つて戰場へは出ません。」といふ誓ひをするのだ。その誓ひをさへ立てれば僕等は直ぐにも許されて本國へ歸れるのだつた。

で、何故僕がその宣誓をしなかつたかと云ふと、それには二つの理由があつた。一つは僕の故郷の家は家柄こそ立派だが、もと〳〵貧乏なので、僕が軍人をやめたらほかに何一つ食ふ途が無かつた。從つて、これからさき老つた母親をどうして養つて行けばいいか、僕にはまるで見當がつかなかつたからだ。

それからもう一つの理由は、僕にはたしかに牢を逃げ出せると云ふ自信があつたからだつた。たかが英國政府の建てた牢獄ぐらゐ、敲き壞しても出て見せるといふ氣が僕にはあつた。そんなこんなで、僕は大して悲しまず、また惡びれず千八百十年の八月十日、船に乘せられ、遙々英國のダートムーア牢獄へと送られることになつた。

その月の末、目的地へ着いて見ると、いやはやそれは奇妙な場處だつた。淋しい人氣無い荒野が涯もなく續いた眞只中に、一個の巨きな牢獄が建てられて、その中に僕同樣の佛蘭西兵の捕虜が八千人から收容されてゐるのだつた。二重の石塀と、深い濠が牢獄をとりまいてゐた。さうして大勢の看守や英國兵が見張りをしてゐた。

ところで諸君！どう手を盡しても人間を兎のやうにをとなしく檻詰めにして置くわけには行かんものぢやて！そのきびしい監視の眼を掠めては二人、十人、または五人位、毎日のやうに捕虜が逃出すのだ。さうすると忽ち知らせの大砲が響きわたる、捜索隊が大慌てで飛び出すのだ。その時、殘つた

われ〳〵佛蘭西兵たちはどうするかと云ふと、逃げた連中の應援でもするかのやう、わざと番卒どもに聞えよがしに大聲をあげて笑ひ、手を叩き、足踏み鳴らして、一齊に「佛蘭西帝國萬歳！」と呶鳴るのだ。すると番卒連は怒るまいことか眞紅になつて僕等を制しようとする。それを見ると僕等はなほ面白がつて、もう一倍大聲で「佛蘭西帝國萬歳！」を繰返す。しまひには英國兵の番卒め、血迷つて小銃の口をわれわれに向けると云ふ始末だ。今でも想ひだすが、辛い牢獄生活も、この時ばかりは實に面白かつたよ！

だがそんな風にして捕虜連が逃げ出しても、あたりは今云つたやうな荒野で人家は無し、大低はぢき見つかつてもとの牢獄へと逆戻りするのだつた。そのうちに英國政府でも段々と番卒の數を增して行つたので、僕が行つてから間も無く牢を脫け出ると云ふことは到底不可能なことになつてしまつた

さて、僕等將校連の捕虜は普通の兵士たちとは別な建物の中に收容されてゐた。帶劍はもちろん夙に取上げられたが、軍服はそのまま着用を許されてゐた。さうして一室に二人づつ割り當てられてゐた。

もと〳〵最初から逃出すつもりで、この牢獄へやつて來た僕は、來るなり匆々その準備に眼を光らせたが、なによりも自分と相室の男を見てひどくがつかりしてしまつた。かれは砲兵少尉で名前をボーモントと云ひ、背のづぬけて高い、無口な男だつた。なんでもアストルガの戰で、英國騎兵のために捕虜にされたとかいふ話だつた。

諸君もご承知の通り、僕はどんな人間とでも直ぐに友達になれる肌合の男だ。ところがこの砲兵少尉殿だけは別物だつた。この先生一種變てこな人物で、僕が冗談を云つてもニコリともするぢや無し、また胸の悲しみを打明けても同情した顏付ひとつするぢや無く、ただその鈍いどろんとした目付でぢいつと僕を見つめるだけだつた。で、僕はひよつとするとこの男は二年間の牢獄生活で頭が少々變になつたんぢやないかしらと度々想つたほどだつた。さうして『あゝこんな時にこの木偶のやうな男の代りに舊友達のブーベでも居て呉れたら。』と、いつも返らぬことを思ふのだつた。

けれども今更愚痴をこぼしたところで仕方がない。さし當つて相棒と云つてはこの男よりほか居無いのだから、出來るだけうまくこの男を利用するよりほか途は無い。どうせこの男に知れずに自分だけコツソリ逃げ出すと云ふことは出來ないのだから、どつちにしても仲間に引入れて置かなけりやならない、とかう僕は決心した。

そこでまづ最初は遠廻しにソロ〳〵、それから段々とはつきり、僕の企畫をかれにうち明けた。するとこのだんまりやの砲兵少尉殿も、どうやら神經が通じたと見え、次第に納得して、僕の計畫に贊成したやうな氣振りを見せるやうになつた。

二、のつぽのボーモント

そこで僕はまづ牢獄の壁を檢べて見た。それから床を、次には天井をと云ふ風に、どこかに脆いところが有りやしまいかと一々驗してみた。が、何處もかも厚く丈夫で到底歯が立ちさうにも無かつた。牢屋の扉は鐵で出來て居り、おもてから鎖が下されてゐた。扉の上の方には小さな格子が付いてゐて、そこから一晩に二回、牢番のいかめしい顏が覗くのだつた。室に在るものとては寢臺が二つ、腰掛が二つ、洗面臺が二つ、——それぎりである。勿論十二年間戰場生活を送つてきた僕には、これだけの品さへあれば少しも平常の生活には事缺さないのであるが、さてこれだけの物でどう工夫したらこの牢が破れようて。

そんなこんなを想つて、毎晩僕は眠られず、何度も苦しい寢返りをうつた。眠つたとおもふと、ぢきに怖ろしい夢を見た。部下の五百人の兵士が靴もなく跣足で顚へながら野原を駈けてゐるところや、軍馬が青い雜草を喰べ過ぎてみんな浮腫んでしまつた姿、または自分の全大隊が泥沼に陷込んで、皇帝の面前で全滅する光景などを夢に見た。さうして總身に冷たい汗をかいては慌てて起き直ると、また思ひ出したやうに、枕もとの壁をコツ〳〵叩いて見るのだつた。

併し、さう云ふ中でも僕は決して勇氣と希望とを失はなかつた。皇帝陛下が常に仰せられた「不可能といふ文字は朕が持つ辭書には無いぞ」と云ふ言葉を、僕はいつも心の中でおもひだしてゐた。

ところで僕等の房にはただ一つ窓が明いてゐる。それは子供も入れぬやうな小さな窓だつた。それにおまけに中央のと

ころに太い鐵の棒が縱にわたしてあつた。どう見たところでとても逃げ出せさうな口では無かつた。だがいろ〳〵詮衡の結果、僕はどうしてもこの窓を攻撃の目標としなければならないと決心した。ところで、なほ一層都合の惡いことは、この窓はわれわれ囚人の運動場に向いてゐるのだつた。その運動場は二重の高い石塀でかこまれてゐるのだ。だからよしうまくこの窓から拔け出たところでそれから先は、とても大きな困難が横はつてゐるのであつた。

けれども僕は十分に見込があるやうに云つて、木偶のやうな相棒のボーモントをはげまし、自分は寢臺の接目から小さな釘を外して、それを道具にコツ〳〵と窓の鐵棒の嵌つた上下の漆喰をくづし始めた。夜中の三時間、僕は根氣よくその仕事を續けた。すると夜廻りの看守の靴音が聞えるので、

慌てて寢床に飛び込むのだつた。看守の靴音が聞えなくなると、又もや僕は寢床を出て、あともう三時間それを續けた。

最初は相棒のボーモントと交代でこの仕事をやる豫定だつたが、させて見ると、かれはいかにも薄野呂で不器用なのでしまひには僕も呆れかへり、かれをあてにせず、自分だけで仕事を進めることにした。

眠いのを耐へて、夢現でコツ〳〵やつてゐると、何だか僕には壁一重外に、もう部下の兵士どもがズラリと隊伍を整へて待つてゐるやうな氣がした。軍旗を風に飜へし、豹の皮の鞍被ひをした元氣のいい彼等の話聲が、耳もとで聞えるやうな氣がした。さう想ふと僕はなほさら狂人のやうになつてはげしく手の釘を働かした。しまひには指さきが破れて、釘が錆びてでもゐるやうに赭黑く血に染るのだつた。

毎晩飽きずにさうやつてゐるうちに、或夜たうとう窓の鐵棒はポツキリ僕の手に捩ぎとれた。それを見て僕は『いよいよ逃出す第一歩は成功だぞ。』とニヤリとした。

さてこれで僕には二つの大切な道具が手に入つたことになつた。一つは今までにも大分役に立つた釘である。鐵棒はと

れたといふものの、何にしろ窓は子供でさへぬけかねる狹さだから、以後はこの釘でコツ〳〵そのまはりの煉瓦をとり崩して行かねばならぬ。それから鐵棒の方は、いざ牢を脫け出した時の護身用としてこれまた無くてはならぬ品だ。

そこで僕は今度は窓緣の煉瓦のとり崩しにかかつた。漆喰が固いので三晩も掛つてやつと一つ取れるか取れぬ位だつたもちろん取崩した煉瓦は、晝間のうちほもと通りの場處へチヤンと嵌め込んで置いた。だから番卒が時々房の檢査に來ても、決してそれと感づかれるやうなことが無かつた。

かれこれ二週間もすると、どうやら窓はやつと大人の身體が通れるぐらゐの廣さになつた。今まで三つ四つしきや見えなかつた星の數が、十個もそこから見られた。

『さあ出來上つたぞ。』と思ふと、僕は躍り出したいほどうれしくなつた。けれども、ぢつと自分をおさへて、肝心なところで發見されぬよう、まづ漆喰のこぼれをのこらず寢臺の藁の中にかくし、拔いた煉瓦はもと通り組合せて、隙間へは襤褸肩などを詰め込んで置いた。

さうして、いよ〳〵牢を脫け出すのに好都合な機會の來るのを、今か今かと待ちうけてゐた。（つゞく）

阿新丸（つゞき）

霜田史光

一

阿新丸は遠い道を出來るだけ急いで、途中いろ〳〵な困難に遭ひながらも、大膳坊の働きによつてやつと切り抜けて、泊りに泊りを重ね、加賀を通り能登を抜けて海岸に出ますと遙か向ふに薄く島影が見えました。

『おゝ、阿新殿、御覽なさいませ。あれが佐渡ヶ島でございます。』

さう云つて大膳坊の指さす方を見ると、遠く波の上は夕日に輝いて、金粉を撒いたやうな海の彼方に、薄黒く見える佐渡ヶ島を眺めて、阿新丸はもう父親に逢つたやうな嬉しさが胸に波打ちました。

二人はやがて親不知子不知の難所も越えて、新潟へ着きました。すると、もう佐渡はぢき眼の前に見えます。

阿新丸は心の裡に、『何卒自分の行くまでお父さんが無事でゐますやうに。』と神に祈りながら、船に乘つて目指す佐渡ヶ島に渡りました。それは元弘二年の春でした。

阿新丸と大膳坊とは、早速本間山城入道の館の前に參りました。けれどもさうひよつくり門の中へ這入る譯にも行きませんので、何かよい工夫はあるまいかと思案してゐました時折よく門の中から一人の坊さんが出て來ました。

阿新丸はわざと眼につくやうに立つてゐますと、その坊さんは見なれぬ立派な阿新丸の姿を見て、怪しみながら近づいて訊ねました。

『あなたはいづれの方で、また何の御用で其處に立つてお出なのですか。』

阿新丸は問はれて隱さず申しました。

『私は中納言日野資朝の子で、阿新丸と申す者でございます。

お父さんに今生のお暇乞ひをしたく、はる〳〵京師から參つたものでございます。どうぞ遭はせて下さいませ。』

それを聞いて坊さんは、驚いて家の中へ駈け入り山城入道に知らせました。入道はつく〴〵と阿新丸の少年に似合しからぬ健氣さと孝心の厚いのに感心して、

『さほどまでの思ひをして、はる〳〵訪ねて來たものなら會はせてやらう。』と一度は思ひましたが、

『待て〳〵、會せることはよいが、もしもこの事が鎌倉殿（高時）に知られた時は、自分はどんな咎めを蒙らぬとも限らぬ。さうだ、これはどうしても會はすことは出來ない。』と始めの考を飜へしてしまひました。

『しかし、折角長い道中を苦勞をして訪ねて來たものを、このまゝ追ひ返すも餘りに不憫である。』と思つて家家に命令けて、阿新丸達を別な館に招き入れ、御馳走などをして、丁寧に歡待しました。

阿新丸は入道の丁寧な扱ひを見て、

『入道といふ人は情のある人で、自分を父に會してくれるものに相違ない。』と思つて居りましたが、翌日になつてもその

やうな話しはありませんでした。それで阿新丸は本間の家來が來る度に、一時も早く父親に會はせて下さるやうにと言傳を頼みましたが、入道からの挨拶はたゞ『暫らく待つやうに』とばかりでした。

二

阿新丸の父資頼は山城入道の家に囚はれて不自由な身を毎日窓から海を眺めて暮してゐました。朝夕に變る海の色や雲の樣々な形を見て、空しく悲しい身をせめてもの慰めとしてゐました。或日廊下を通る二人の若侍が密々聲で話してゐるのを聞くと、それは我子の阿新丸が自分に會ひにはる〴〵京師から來たと云ふことでした。それを聞いてさすがに強い資頼も、阿新丸の心に感じて嬉し涙が流れました。然し、入道は自分に會はせてくれぬらしい樣子を知つては、身も千切れる程口惜しさがつのるのでした。

或夜入道の家來は、資頼の部屋に這入つて來て申しました。『久しくお體もお洗ひにならなくて、さぞ御氣分が惡いことでせう。幸ひ今夜は風呂の用意もいたしましたから、これからどうぞお這入り下さい。』

資頼はそれを聞いて怪しみました。そしてすぐに、『はゝア、これは自分を殺す氣なのだな。』と早くも覺つてしまひました。けれども身に一本の刀も持たないでは、どうすることも出來ません。

『我子の阿新丸がはる〴〵訪ねて來たといふに、自分に會はせてくれぬと云ふは、入道といふ奴はよく〳〵武士の情けを知らぬ奴だ。』とつく〴〵入道を怨みました。然し、勇士の死際は立派にしたいものと髪も繕ひ、身代も調へてから風呂に入りました。

資頼が察した通り、入道は風呂に入れて資頼を殺さうとしたのです。と云ふのは資頼は名高い勇士でしたから、普通の時では五人や六人掛つても到底殺すことは出來ないと思つたからでした。

入道の子本間三郎は槍をもつて、風呂場の外から羽目板を通して突き貫しました。そして資頼を美事に殺してしまつたのでありました。

資頼は殺されながらもその卑怯な仕方や、無情な扱ひ方をどんなに憎んだことでせう。

三

その翌日、本間の館からは寂しい葬式が出ました。その時、阿新丸は父に會へない焦れつたさに散歩してゐた時でしたが、其葬式の列に會つて蟲の知らせか妙な胸騒ぎがいたしました。

『これは誰方のお葬式ですか。』と訊ねて見ても、それを送つてゆく本間の家來達は何んとも答へて呉れませんでした。阿新丸はそれでも何んとなく心惹かれるまゝ、隨いて行くと、眞野村の妙宜寺といふ寺にその棺を埋めました。

送つて來た本間の家來達が歸つた後、阿新丸はその寺の坊さんに訪ねると、

『あれは中納言日野資賴卿の亡骸です。』と敎へてくれました。

それを聞いた阿新丸の驚きと悲しみはどんなだつたでせう。思はずどつとその場へ打ち倒れました。坊さんは驚いて、『あゝ、若し〳〵どうしたのでございます。』と云つて親切に介抱してくれましたので、一時氣を失つた阿新丸もやつと氣がついて坊さんにお禮をいひ、泣きながらにお父さんのお墓に野の花を採り集めて捧げました。

紫雲英の一束をお墓に捧ける阿新丸の手は、ぶる〳〵と顫へてゐました。はる〳〵京師から苦心に苦心を重ねて來て、お父さんの生きて居られる間に來

て、冷たいお墓に逢ふなんて、阿新丸はなんと云ふ可哀さうなことなのでせう。

「それにしてもお父さんは御病氣でお亡くなりになつたのか知ら。」と考へましたけれども、阿新丸にはどうしても本間がお父さんを殺したとしか思へなかつたのであります。

家へ歸つて阿新丸は、大膳坊にその事を話して共々手をとり合つて嘆きました。そして、父を殺したのは本間親子であると云ふことが知れましたので、阿新丸はキッと決心して、『よし、かうなつた上からは本間山城入道を討ち取つて父の恨みを晴さう。』と心に思ひ定めて、その事を大膳坊に相談しました。そして大膳坊はその日の中に歸つたやうに見せかけて村の百姓家に隱れてゐました。

一人になつた阿新丸は病氣と偽つて晝間は布團を被つて、わざと呻つて寢てゐましたが、夜になるとそつと起き出て本間の館の方へ行つて、その樣子を見てゐました。

或日晝間から強い風が吹いて、雨はどしや降りに降りました。窓から見ると海は荒れて、白馬の荒れ狂ふやうな浪は小山のやうに後から後からと續いて來るのでした。

阿新丸は物凄い嵐の呻り聲を聞きながら今夜こそ父の敵を討つによい時だと考へたのでした。そして、夜になるのを待ち兼ねてすつかり身支度を調へ、入道の館に忍び込みました。

阿新丸は入道の寢所は何處かとあちらこちらと探しましたけれどもさつぱり判りません。これは入道がこんなことがあるといけないと思つて一寸人に知られない隱れた部屋に寢てゐたからです。阿新丸は折角苦心して忍び込んだものを、討つことの出來ないのを大層殘念に思ひ仕方なしに引返さうとしまして、とある部屋の前を通りますと、中に燈火が點いてゐて、人の高鼾が聞えます。そつと覗くと、それは入道の子

本間三郎でした。

「うむ、此奴は父を殺した者だ。入道が討てなければ此奴を討つて父の恨みを晴さう。」と思つて部屋の中へ這入らうとしましたが、中があまりに明るいので目を覺まされては困ると一寸の間思案して立つてゐました。すると所よくも、鼠の爲めに追れた澤山の蛾が郎下に群つてゐましたので、阿新丸は一つの計略を思ひついて手の指に唾をつけて音のせぬやうに障子に穴を明けました。すると澤山の蛾は火を目掛けて部屋の中へ順々に這入り、暫らくは燈火の周圍を廻つてゐましたが、たうとう飛びついて火を消してしまひました。

阿新丸はこゝぞとばかりに部屋に這入つて、手探りに見覺えのある刀掛から刀を取つて拔き放ち、三郎の寢てゐる上に馬乘りになつて、突き差さうとしてふと考へました。

『寢てゐるものを殺すのは、まるで死人を突き差すも同じことだ。それは餘りに卑怯だ。』と思ひましたので、足を上げて三郎の枕を蹴りました。三郎は驚いて起き上りましたが、早

くも阿新丸の刀は三郎の胸から背中に突き通つたのでした。

阿新丸は三郎の息が絶えたのを見すまして、急いで外に出ました。外はもう嵐も止んで、いつの間にか銀のやうな星が空一面に輝いてゐました。それはまるで阿新丸の成功を喜んでゐるやうでした。そのうちに館の中は急に騒がしくなりました。大勢の侍が庭に飛び出して自分を探しに來るらしいので、阿新丸は館の裏の竹藪の中へ隠れました。然し、その向ふは二丈もある壕だつたので、越えることも出來ません。

『仕方がない、運の盡きだ。敵に捕へられて殺されるより自分から死なう。』と考へて阿新丸は、刀を咽喉に當てゝ突き立てやうとしました。その時、ふと心に浮んだのは、母が別れの時に心をこめて云つた言葉でした。

『どんなことがあつても、早まつてはなりませぬぞ。』と云つた母の聲が、まだ耳近くに聽えるやうな氣がしたのです。

『さうだ、早まつてはならない。』と思つた阿新丸は刀を鞘に納めて、ふと氣がついて見ると、大きな竹が濠の縁に立ち並んでゐます。此時天の與へた智慧か、阿新丸の頭には實によい考へが浮びました。阿新丸は急ぎその一本の竹に攀ぢ登りました。だん〳〵竹の上の方に登つて行つた時、竹は自然と曲つて恰度よく濠の向ふに阿新丸の體を運んでくれました。

阿新丸は神の助けと喜び勇んで、足の續く限り逃げて、夜が明けた頃、松の木へ登つて暫らく隠れてゐました。

山城入道は阿新丸に三郎の討たれたことを知つて大いに怒つて、家來の者に命令けて島中を探させました。

阿新丸が隠れてゐた松の木の下を幾人もの侍が通りましたけれども、阿新丸には氣がつかずに過ぎてしまひました。

夜になつてから、阿新丸はそつとその松の木を降りて海岸に出ました。大勝坊は始めから阿新丸と約束してゐましたので、その海岸に船を仕立てゝ待つてゐました。二人はその無事と、首尾よく敵を討つたことを喜び合ひながら、早速船に乘つて、越後の海岸指して漕ぎ出ました。

阿新丸は無事に京師に歸り着いてお母さんにそつ事を話しました。そして共々嬉し涙にくれました。

その後阿新丸は名を邦光と改め、お父さんの志を繼いで天子樣に忠義を盡し、北條高時の亡ぼされた後は お父さんの位を繼いで中納言になりました。（をはり）

白い靴

山野虎市

（一）

昔、或る遠い國に一人の王樣がありました。その王樣にたつた一人のお姫樣がありましたが、その國の人民が、一目そのお姫樣の顏を見ると、その日一日中、お姫樣の噂ばかりしてゐるといふ程、お姫樣は美くしい方でした。

お姫樣のお母さんが亡くなつた後、王樣は、かけがへのない寶物のやうに、お姫樣を可愛がつて、隣の國の王樣達から、お姫樣をお嫁さんに欲しいと、うるさく申し込んで來ましても、王樣は頭を横に振るばかりでした。

まて、王樣が、お姫樣の次ぎに、愛して居ることは山へ獣物を獵しに行くことでした

王樣は毎週が〻さず、お城から餘り遠くない山へ獣を獵しに行きました。

或日、王樣は家來を澤山つれて、いつものやうに、山へ獵に行きましたが、鹿を追つてゐる最中、大きな穴に落ち込みました。王樣は、その日、獵する時に用ゐる固い靴を穿かないで、歩くに便利な、柔の靴を穿いてゐましたから、穴の中に生えてゐる茨の刺で、ひどく足を傷つけました。

お城へ歸つた後、王樣の足の傷はだん〳〵痛んで、高い熱さへも出ました。王樣のお附さの醫者が、非常に注意深く傷を洗つて、藥か塗り、繃帶をしましたが、少しも効がなく王樣の足は痛むばかりで、だん〳〵と腫れて行きました。

王樣は國中の醫者を宮殿に呼んで、足の治療をさせましたが、どんな名高い醫者も、王樣の足の痛みを、止めることが出來ませんでした。

ところが、王樣の都から遠く〳〵隔つた町に、どんなむづかしい病氣でも療すエライ醫者が住んでゐると云ひ噂が都に傳りました。そこで王樣は使者を遣はして、その醫者を召びにやりました。

（二）

王樣に召ばれたその名高い醫者は馬に乘つて、長い旅をして、王樣のお城へ參りました。王樣の面前に參りました醫者は、王樣の足を注意して診療した後、

『陛下、お氣の毒ですが、これは人の力ではお癒し申すことの出來ない傷で御座います。併し、或る方法で、お痛みにならずに、お歩きが出來るやうにすることが出來ます。』と申しました。痛みの爲めに顏を顰めてゐた王樣は、喜んで叫びました

『お前がこの痛みを止めてくれるか！　どうしてこの痛みを止めると云ふのだ！』

『陛下、靴屋に御命令下つて、羊の皮の柔かいので靴を造らせて下さいませ。その靴が出來上るまでに、私だけが知つてゐる祕密の藥を造りますから。』

かう云つて醫者は、頭を低く下げて、王樣の前から退きました。

王樣はその靴と祕密の藥が出來るのを毎日、いら〳〵して待つてゐましたが、八日目にかの醫者が王樣の前に現はれました。醫者は持つて來た一つの箱から羊の皮の靴を出して、祕密の藥を靴の內と外に、丁寧に塗りますと、靴は雪のやうに白く光りかがやきました。藥を塗り終つた醫者は、

『この靴を穿きますと、傷ほ少しも痛みません。又、この藥を塗りますと、王樣の御一生の間、二度と塗る必要がないので御座います。』

と云つて王樣の足にそれを穿かせました。すると忽ち、足の痛みが忘れたやうに急に無くなりました。王樣は輕くなつた足で立ちあがり、

『不思議な醫者！　私の恩人、どうかこの城に止まつて、私と一緒にゐてくれ。私はお前に望みの物を何でも與へる。』と云つて醫者の手を固く握つて、幾度も〳〵振りました。

併し醫者は家には澤山の病人が待つてゐるから、と云つて、王樣の郷を出て、遠い〳〵自分の町へ歸りました。歸る時王樣は澤山の寶物を馬に積ませて自分でお城の門まで見送りました。

（三）

それから二年の間、何事もなく、王樣と、お姫樣の上に幸福な日が續きました。

さて、王樣の誕生日が來ました。その日は青い六月の空が美くしく晴れた日でしたが、お姫樣はつれから、河遊びが好きだと云ふので、お城の近くに流れてゐる大きな河に澤山の船を浮べて、遊びを致しました。その日郷中の人が集まり、かがやいたお姫樣の顏や、船から打ちあげる烟火を見て、夕陽が西の山へ沈む頃、王樣とお姫樣の萬歲をとなへて歸つて行きました。さて王樣とお姫樣とが乘つてゐる船が岸に近づいた時、どうしたはずみか王樣はつまづいて、轉げました。其とたんに夜も盡も、穿いてゐた靴が王樣の足から脫げて、河の中へ落ちたのです！

『アッ』といふ間もなく、靴は河下に流れて行つて、遂に見えなくなりました。と同時に、王樣の傷がひどく痛み出しました。王樣は、

『靴だ！　靴だ！』と叫びましたが、うろたへた餘り、船からどぶんと河に落ちました。お姫樣は驚きの餘りその場に氣絕して、あやうく河に落ちるところでした。お附きの人々や、歸りかけた人民が急いで、大騷ぎをして、王樣を河から引き上げ、氣絕したお姫樣と一しよに馬車に乘せて、お城に歸りました。

氣絕したお姫樣はすぐに正氣になりましたが、王樣の足は前よりも、ひどく痛み出しました。餘り痛むので、王樣は「いたい〳〵」と小供のやうにお泣きになりました。そして一時も早く、河に流れた白い靴を拾ひ上げるように命令しました。

そこで、國中の水泳の達人たちが、河の底に潜り込んで靴を探しましたが、少しも見つかりません。

そのうち、王樣の傷はます〳〵痛むばかりでした。そこで王樣は白い靴を造つたあの醫者の所へ使者を遣はしました。少しも早く、白い靴を造つて貰つて、歸れとの命令を受けた使者は、馬に鞭うつて、飲まず、食はずで、醫者の町へと急ぎました。

しかし、使者がガッカリして、靴を持たないで歸りました。かの醫者は王樣が靴を失くした一週間前に、病氣で死んでしまつたのでした。そして、靴を塗つた祕密の藥の製法を誰れにも傳へずに死んだのです。

これを聞いた王樣は、もうガッカリとして、何故あの白い靴を幾足も造らせて置かなかつたかと悔い悲しみました。そこで王樣は、

『靴を河から拾ひ上げた者は、誰でも姫の婿にする』と云ふ宣言を出しました。お姫樣は驚きましたが、一番愛してゐる父上の足の痛みを思ひまして默つてゐました。

王樣のお宣言に應じて、少しでも水泳ぎのできる者が、幾萬となく河に集まりました。そして毎日々々朝から夕方まで河の底に潜り込んで靴をさがしましたが、呼々、白い石や、場のかけらを拾ひ上げる外、誰れも白い靴を見つけることが出來ませんでした。

その水潜りを見るために國中から、澤山の人がお御當を持つて見物に來ましたから、河の堤は黑山のやうでした。しかし幾日經つても、白い靴は影も現はしませんでしたから、日暮には皆悲しさうに頭を垂れて家に歸りました。

（四）

さて、或日王樣が傷の痛みのために、唸りながら、床の中でもがいておいでになる時、門の方で何か人が罵り合ふやうな騷がしい聲を聞いたので、床の側にある金のベルを押し家來を呼びました。そして何のために門前が騷がしいのかと御問ひになりました。

『陛下、只今門前に一人の若者が現はれまして、「私は靴屋だが、王樣の失なつた白い靴の代りを造つてあげたいから、王樣の足の寸法を計りたい」と申すのです。そこで我々はこの無禮者をひどく疵りつけて追ひ出した所なので御庭います。』と家來はうや〳〵しく、しかし手柄顏に申し上げましたが、王樣はこれを聞いて、

『それはいけない。その若者が靴を作ることが出來るのかも知れない。早く呼び入れよ。』

と痛む足を押へて申しました。

お城から餘り遠く行かなかつた若者は、直ぐ家來に連れられて、王樣の前に現れました。若者は靴屋だといふが、丈の高い立派な男であつたので、王樣は信用して、

『近くよつて、早く足を見てくれ。』と云ひました。若者はうや〳〵しく近づきまして、王樣の足を丁寧に見て、

『陛下、御安心遊ばせ、大丈夫です。私が万なおつくしいたします。』と大膽に、落ち付いて申しました。

『お前があのエライ醫者が作つたのと同じ白い靴を造くれるといふのか。そして何時出來る？』と王樣は床からのり出して、若者を詰あました。

『二週間お待ちください。二週間目に私はここに歸つて來ます。其代りに私によく走る馬を一匹下さい。』と若者は靜かに答へました。

から王様は家來に命じて、一番よい馬を廐出して來させ、その若者に與へました。

馬を貰つた若者は、お城の門からひらりとひまその馬に乘つて何所もなく行つてしました。

この噂が都中に擴がりました。人々は王様の弱味につけ込んで、若者がうま〳〵と王様りまから馬を欺いて取つたのだと、口々に罵したら。

ザテ、皆さん！　この若者は一體何者でせう？　若者が馬に乘つて、何所かへ行つて來る間に、この若者の話をいたしませう。

（五）

この若者は六つの時に兩親を失つて、叔父の家に預られましたが、他の子供等と違つて、本を讀むのが大好きで、殊に藥の本を讀むのが好きで、毎日家の中にねて、本ばかり讀んでゐました。そしてこの勉强好きな子供はだん〳〵大きくなつて、かしこい立派な若者となりましたが、或日かの噂の高い王様のお姫様が、若者が書物を讀んでゐる二階の下をお通りになりました。人が騒ぐので一寸窓を開けて下を見ますと、それは何とも云ひやうのない程美くしいお姫様でした。其時から若者はお姫様の御婿様になりたいと考へ出しました。しかしそれは夢のやうな望みですから、若者は相變らず、一心不亂に書物を讀んでゐました。

さうしてゐる間に、前にお話した、王様が何に白い靴を落した事件が起つたのです。王様が、靴を拾ひ上げた者をお姫様の婿にするとのお宣言を出した時に、この若者は書物を捨て、飛び一りました。

『よし時が來た！　靴を拾つて、お姫様の婿になる！』

若者はかう叫びまして、河へ行きました。

そして、他の競爭者と一しよに、河に潜り込んで靴を探しました。しかし靴が出て來なかつた事は先きにお話した通りです。がつかりしましたが、利口な若者は『もう多分靴はいくら捜しても、河にはないのだらう』と考へまして、叔父の倉の中から、虫の食つた古い藥のことを書いた本を澤山取り出して、讀み始めました。或日一册の古本を手にして熟心に讀んで居つた若者は、急に手を打つて、『有つた〳〵』と叫びました。

この古い本の中に、どんな傷でも癒みる藥のあることが書かれてあつたのです。その藥はこゝから遠い〳〵國のある森の中に生える木の葉から搾る油である、と詳しくこの本に書かれてゐました。

そこで若者は、有頂天になつて喜びましたが、尙ほよくその本を見ると、この藥を塗つても、或る一つ二つの傷だけは癒らない、と書いてありましたから、王様の傷が若しかその癒らない傷ではないかと心配しました。そして色々考へた末、靴屋と偽つて、王様にお目にかゝり、足の傷を、檢査したのです。そして傷を調べた末、王様の傷は癒ほる傷であつたので、先きにお話したやうに、馬を貰つて森へ出懸けたのです。

（六）

王様の都を出た若者は馬に鞭をあてて、本に詳しく書いてあつた道を、急ぎまして、六日目の朝、やつと目的の森に着きました。若者は森を驅け廻ぐつて、本に書いてある通りの木を探がしましたが、なか〳〵見付かりません。しかし、若者は屈せず、森を奥へ〳〵と探がし歩きました結果、其日の夕方、たうとうその木を見付げました。若者は貪ほるやうに、その木の葉をむしつては、用意の袋につめ込み、一刻も早くと、馬に乘つて、歸つて來ました。

家に着いた時は　都を出てから十三日目の晩でした。若者は、ぐた〳〵に疲れてゐましたが、家に入ると直ぐ竈に火をこしらへて釜をかけ、釜の中に、袋の中の葉を入れました。そして三時間ばかり煮ました時に、釜の蓋をとつて見ると、木の葉が無くなつて、本に書いてある通りの黄色の油が湯氣を立ててゐました。

若者はその油を壺に詰めて、夜の引き明けにお城へと急ぎました。お城では痛みのために疲せ衰へた王様は今日こそ若者の來る日だと、もう背から眠むらないで待つてゐました。

――尤も痛みのために王様は毎晩眠らなかつたのですが――

夜が明けて間もなく、家來が王様の床の側に來て、かの若者が來たことを告げました。若者は入つて來ましたが、若者の手に靴が無かつたので、王様はがつかりして、こんな若い靴屋を信用した事を悔いました。

然し若者は靜かに壺から藥を出して、投げ出してゐる王様の足の傷口へゆつくりと擂の先きで塗り込みました。

何といふ意ろくべき妙藥でせう！　今まで激しく痛んでゐた王様の足の痛みが、夢のやうに無くなつた許りでなく、紫色にふくれてゐた腫れも瞬く間になくなりました。それ許りでなく、傷痕さへもすつかり無くなり、王様の足は元の通りの丈夫な足となつたのです。

王様は餘り不思議なので、足を振つて見たり、叩いて見たり、元の傷のところを抓つて見たりしましたが、少しも痛みませんので、うれしさの餘り、お泣きになりました。そしてその次には床の上に躍り上つて、大聲で叫びました。

若者はお姫様のお婿さんになりました。

結婚の夜、花婿はビロードに金の刺繍のした衣服を着てゐました。

お姫様は藥を取つて來たのが、白髮の老人でなく、立派な若者であつたのを喜びました。

式の後で、お城の大廣間でお祝ひの舞踊會がありました。何千といふ人が一晩踊り明かしましたが、其うち一番澤山踊り、一番褒れたのは王様でした。

――をはり――

怠け者

藤森淳三

一

京城と云へば、朝鮮第一の都でありますが、そこの片隅に、一人の貧しい若者が住んでをりました。貧しい、と一口には云つても、これはとり分け貧乏なのです。どうかすると、日に一度の御飯さへ食べないことがあるくらゐでした。しかも、それほど貧乏な上に、また怠け者である點ででも、度外れてゐました。ですから、働いてお金儲けをすることなんか、この男には思ひもよりませんでした。

朝はすつかり太陽が上つてから、漸つと目を醒します。が、目を醒しても起きようともしなければ、もちろん顔を洗つたことなぞ一度だつてありません。布團の中から顔だけ出して、別に考へごとをするのでもなく、ぼんやり天井を眺めたまゝ、いつまでも〳〵ぢつとさうしてゐるのです。そのうちに、お午過にもなつて、よく〳〵寢てゐるのが退屈になるか、それともお腹でも空いて來ると、若者は、はじめてのろ〳〵と布團から抜けて出ます。そして、退屈なときにはぶら〳〵と街を歩くか、お腹が空いてゐるときには、誰れか知りあひを思ひ出してはそこで何か食べものに有りつく、といふ風でありました。

しかし、それも長くは續きませんでした。そろ〳〵知りあひの人達も、この怠け者に愛想をつかして相手にしなくなると、今は若者もつくづく困りました。

『どうしたら飯が食べられるだらう。』

或る日のこと、若者は目を醒すとすぐ、さう考へました。

『ケチな奴らばかりだ。一日にたつた一度ぢやないか。食べさせて吳れたつてよささうなものだ。』

が、お午も過ぎた頃になると、怠け者もいよ〳〵お腹が空いて來ました。

『食べたいなあ、何でもいゝから誰か

臭れないかなあ。』

若者はしきりに識のいゝことを考へてゐましたが、ふと、

『さうだ、それがいゝ。』と、一人で合點すると、何時になく元氣よく起き上りました。

そして、すぐ外へ出ました。往來では、人が皆めい〳〵忙がしさうに歩いてゐました。若者も同じやうに、何か用事でもありさうに活潑にずん〳〵歩いて行きました。

間もなく、賑かな街へ出ました。すると、若者は急に或る果物屋の前へ立止つて、店の中を見廻しました。店には柿やら、林檎やら、或ひは遠く南の國で穫れる龍眼肉やら、倍度秋の時節でしたから、いろんな果物が山のやうに刻んでゐました。その上、あま酸つぱい臭ひさへ往來に漂つて、如何にも美味しさうでありました。

しばらく店を見廻してゐた若者は、そのとき柏の實を指して、

『それあ何ちうものだい。』と、わざと田舍言葉で飫ねました。

果物屋の主人は、てつきり若者を田舍者だと思ひ込んだのでせう。

『これですか、チャシですよ。』

チャシといふのは、朝鮮語で柏の實のことです。

すると、どうでせう。いきなり、若者は手を延ばして柏の實をつかむが早いか、むしや〳〵と食べはじめました。一つかみ、二つかみ、三つかみ……若者は、いくらでも食べるではありませんか。忽ちのうちに、さつきまで山のやうに積み上げてあつたのが大方なくなると、

『どうも御馳走様でした。お蔭ですつかりお腹がいつぱいになりました。』と云ひながら、出て行かうとするのです。

主人は驚くまいことか、

『もし〳〵、お代をどうぞ。』と、追馳けるやうに叫びました。

若者は怪訝さうな顔付で、

『お代て、何のお代だい。』と空呆けました。

『何のつて、冗談ぢやありませんぜ。柏の實のお金ですさ。』

『莫迦云ふもんでねえよ。柏の實の金つてか。お前さんがチャショと云ふたで、わしは食べただ。チャショと云ふて金を出せなんて、わしら田舍者ぢや

が、少し話が違やせんかえ。』

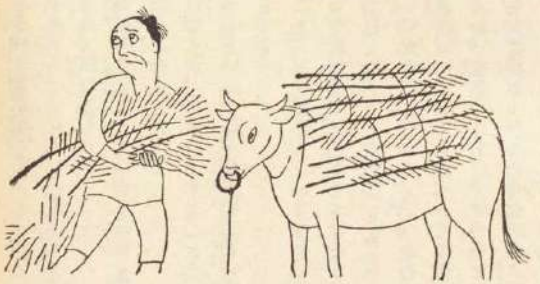
さう云つたなり、若者は、呆氣にとられてゐる主人を後ろにして、どんどん行つてしまひました。若者は全く狡いことを考へついたものでした。チャショといふのは、朝鮮語で「召し上つて下さい」といふことなのです。若者は、果物屋の主人がチャシ（柏の實）と答へたのを、チャショと聞き違へたふりをして、うまく主人を一本參らしたのでした。

二

こんな具合に若者は、困つたときには悪いことをしては糊口をしてゐましたが、さてそのうちに冬になると、いくら無法者でも、時候の寒いのばかりは何とも閉口せずにはゐられませんでした。

或る日のことでした。若者は、薪を買はうにもお金がなく、さうかと云つてきびしい寒さに、もう我慢がならなくなつて來ました。どうしたものだらうと、またいつもの通り布團の中で考へてゐましたが、やがて、

『さうだ、それに限る。』と獨り語を云ひながら、飛び起きました。



それからしばらくの後に、若者の姿は街の方々をうろついてをりました。あちらへ行つたり、こちらへ來たり、若者はしきりと街の中をあるき廻りました。と云ふのは、松葉を牛に附けて賣りあるく、田舍商人を探してゐるのでした。もつとも、松葉賣は幾人となく見かけたのですが、なぜか若者はそれが氣に入らぬと見えて、まだあるいてゐました。

さうして、さんざんあるき廻つて、日ももう西に傾きかけた頃でした。若者は、とりわけ大把の松葉を附けてゐる牛を見ると、その方へ近寄つて行つて、

『おい〳〵、これは幾らだね。』と、聲をかけました。

松葉賣の男は、

『へえ、百文ぢやが、七十文に負けとくべえよ。』

『七十文、よし〳〵。ちやあ、家へ引いて來て呉れ。』

若者はさう云つて、そこで松葉賣と一緒に家へ歸つて來ました。

家へ來ると、松葉賣は牛から松葉を卸しましたが、何分にも若者の家の門がひどく低くて狹いものですから、男は大困りです。うん〳〵云ひながら、大把の松葉を入れようとするのですが、なか〳〵入りません。あまり無理耶理に通したので、松葉はバラ〳〵と、あたり一面に散らばりました。

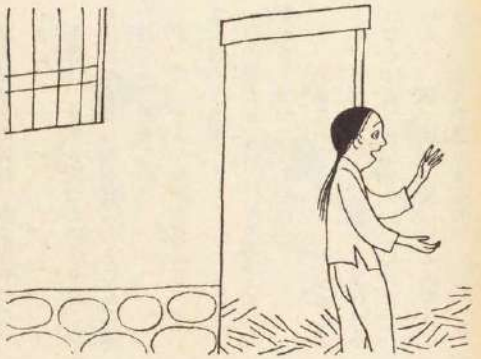
そして漸つとのことで其處を通ると、男はもう息をはづませて、ずしんと投げ卸しました。で、また其處へも、松葉がいつぱいに落ちました。

『やあ、御苦勞、御苦勞。代は幾らだつたかねえ。』

若者は、氣さくらしく、さう云ひました。

『へえ、七十文だつさ。』

『七十文、それは高いねえ。二十文に負けとくさ。』



若者はわざとそんな亂暴なことを云ひはじめました。

『いんや、負かりやせん。あんた、さつき七十文でえゝつて云ふたぢやねえか。』

いつこくな田舍商人は、まさかそれが若者の手だとは知りませんから、すぐに怒り出しました。

『さうかえ。そんなこと僕は覺えてないよ。兎に角七十文は高いよ、二十文ぐらゐのものだな。』と、ます〳〵落着いた調子で若者は云ひました。

『高いつか。高いなら、やめて貰ふべえ。』

たうとう松葉賣は、ぷん〳〵腹を立てゝしまひました。『因業めが！　ほんとにひどい奴めが！』

と、ぶつ〳〵罵りながら、また、よいしよと松葉の把を抱へ上げました。が、何しろ今度は怒つてゐるものですから、前よりも一層どたん〳〵と、そこらぢうに打ちあてゝ出て行きましたので、松葉はまた、たくさんそのあたりにこぼれました。

松葉賣が歸つてしまふと、若者は早速、松葉を掃きよせました。

『こいつあ、有難い。』

成程、見ると、松葉はなか〳〵たくさんありました。小さな把の一把ばかりは十分に出來るほどでした。

『これだけありやあ、まあ四五日は大丈夫と云ふものさ。』

無法な若者は、一人ほく〳〵と喜びながら、すぐ爐を焚きはじめました。

三

折柄、夕暮近くでしたから、

『えゝ、鯛、鯛！　鯛はいらんかえ。』

と大聲に叫びながら、外を通る魚屋の聲が聞えました。

咄嗟に若者は、また何か思案が浮んだのでせう。急いで家ぢうを探すと、やうやくお金が十文出て來ましたから、すぐ魚屋を呼びとめました。

『へえ。十文ですかね、まあこれくらるのものですねえ。』

魚屋は十文と聞いて、中で一番小さな鯛を呉れました。若者もそれで我慢しました。

すると、間もなくでした。

『えゝ、鯛、鯛！　鯛はいらんかえ。』

またさう云つゝ、他の魚屋が通りかゝりました。

『魚屋さん、魚屋さん。』

何と思つたのか、若者はまた魚屋を呼びとめて、

『鯛を見せてお呉れ、小さなやつでいいよ。』

若者は、さつき買つたのよりは、少しばかり大きなのを買ふことにして家へ持つて入りました。

が、持つて入つたかと思ふと、すぐまた持つて出て、

『氣の毒だが、今日はいらぬさうだよ。妻がさう云つてるのでね。』

と、何氣ない容子で、それを返しました。魚屋は、まさか鯛をすり代へられたとは氣が付きませんでした。

『えゝ、鯛、鯛！　鯛はいらんかえ。』

また、魚屋が通りました。

若者は三度それを呼びとめました。そして、さつきしたやうにして、また二度目のより少し大きなのと取り代へました。

四度、五度……と、ほんのしばらくの間に六度まですり代へて、六度目には、はじめ買つた鯛の二倍からもある大きなのになつてるました。

そのため若者は、其晩は久し振に御馳走を鱈腹食べることが出來ました。

四

それからと云ふものは、この無法者はますゝ〳〵惡いことばかりするやうになりました。

へまに泥棒こそしませんが、隨分人の迷惑になることでもずんずん平氣でしました。そしてそのほかは、たゞぼんやりと怠けて暮してるました。

が、そんなことが長續きのしやう筈がありません。やがて役所の方へ知れると、すぐに若者は捉まつてしまひました。

『不埒な奴ぢや。さあ來い、役所へ來い。』

役人は口を尖らせて叱りつけながら、若者を引ッ張つて行きました。しかし、何しろ朝鮮のことですから、役人も非常に暢氣なものです。

肩を怒らして若者を連れて行くのはよろしいが、街を通りながら、ぷかッぷかッとあの長い煙管で煙草を喫みはじめました。

そのうちに賑かな街へ出ました。すると、あちらからも、こちらからも、たくさんの乞食が出て來ました。そのまた乞食が暢氣で、罪人を連れてゐる役人の前へ來て、物乞ひをするのでした。

『どうぞ一文やつと呉れ、どうぞ一文やつと呉れ。』

右からも左からも、大勢の乞食が役人の方へ手を差出しました。

『こら、こらッ。其處を退け、其處を退け。』

それでも流石に役人であります。乞食を叱りつけて、長い煙管を左右に振つて、追ひ拂ふやうにしました。

が、その時であります。先程から隙をうかがつてゐた若者は、いま役人が前の方の乞食に氣をとられてゐる暇に、そッと後ろの乞食達の方を振向くが早いか。

『おい〳〵、お前ら！　俺の後から蹤けて來て、お父樣と泣きながら云つて呉れ。さうしたら、後に褒美をやるから。』と囁きながら、目顔でそれと知らせました。

すると、どうでせう。今の今まで物乞ひをしてゐた乞食達は、忽ち合唱でもするやうに、

『お父樣やあ、お父樣やあ……』と、節までつけて叫びはじめました。

役人は何が何だかさつぱり理由がわ

かりませんでした。

しかし乞食達は、追ッ拂つても追ッ拂つても、恰度御飯の上の蠅のやうに、そろ〳〵と後ろから踉けて來るのでした。

『お父樣やあ、お父樣やあ……』

かうして、いよ〳〵役所へ着くとすぐ、若者は泥棒をまつかへる大將の前へ引き出されましたが、さて、取調べをしやうにも困ることは、踉けて來た乞食達であります。

乞食達は役所の中まで入つて來て、どうしても若者の傍にくッついたまゝ離れないのでした。何分大勢のことですから、役人もそれを止めることが出來ないばかりか、その上乞食達は聲を揃へて、

『お父樣やあ、お父樣やあ……』

と、まるでお題目でも唱へるやうに、ます〳〵大聲で叫ぶではありませんか。

太い八字髯の、嚴めしい顏をした大將は、しきりと苦々しさうに舌打ちばかりしてゐましたが、しかしどうにもしやうがありません。たうとう堪へられなくなつたのか、

『あゝ喧しい、喧しい。』と呟いて、頭を抱へ込みました。そして、如何にも弱々しい聲で、

『こら〳〵、この乞食どもは、みな貴樣の子供なのか。』

さう云はれると若者は、俄かに泣きべそを搔きながら、

『はい、左樣でございます。何も私は惡いことをしたくはないのですが、何しろ御覽の通り大勢の子供なものですから、いくら働いても追ッつくことぢやございません。ですから、つい……』

と、如何にも神妙らしい顏をして見せました。

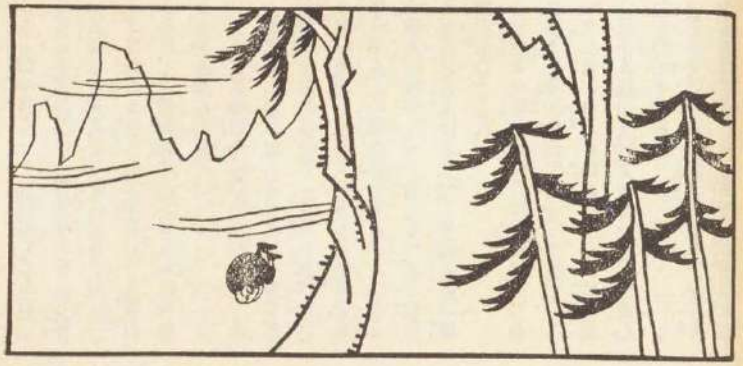
役人達はもういゝ加減面倒臭くなつてゐましたので、

『さうか。成程こんなに子供があつては食つて行くのも大變だらう。よし、これからは氣を附けて、惡いことはしてはならんぞ。よし、よし、今度だけは許してやるから行け、行け、早く行かないか。』

ぢれつたさうに、さう叫びました。

暢氣な役人もあつたものです。——無法者の若者は、さう云ひ聞かせられただけで、そのまゝ放免になつたといふことであります。

（をはり）



水滸傳（第七回）

魯智深の話

宮島資夫

魯智深はもと、渭州といふ所の都で役人をしてゐて、その頃は魯達といふ名前でした。

ある時この町にさまよつて來た憐れな老人と娘を助けるために、鎭關西郡大官人といふ男を一拳の下に打殺して渭州の都を逃げ出してしまひました。それから半月ほどの間は、國々を廻り廻つて歩いてゐましたが、遂に五臺山といふ山に登つて頭をそつて坊さんとなり、魯智深といふ名にかへてしまひました。

頭の形は丸くなり、身には袈裟衣をつけても魯智深の氣持は昔と少しも變りませんでした。毎日お酒を飲んでは暴れ廻つて、もし人が、これをとめると、六十二斤もある鐵の棒で、お堂でも仁王樣でも片端から壞してしまふので、五臺山の長老の智眞といふ人も堪らなくなつて、手紙を持たせて、東京大相國寺の智清禪師といふ人の所へやる事となりました。魯智深はつまり五臺山を追つ拂はれたのですが、そんな事は氣にもかけないで、六十　斤の鐵の棒をついて、段々と旅を續けて來ました。

その途中のある村でも、桃花山といふ所に住んでゐる山賊のために苦んでゐる人を助けましたら、その賊の中に李忠といふ知つてゐる人がゐて、しばらく桃花山にも足を留めてゐました。けれども、その山の頭領達のする事が何もかもけち臭いので、魯智深はいやになつて、

『私は東京へ行かなければならないか

らもう山を降る』といひ出しました。するとその頭領は、魯智深のやうな強い人になる貰ふと大變氣が強いので、『どうかもう暫くゐて下さい』と留めましたが、魯智深はどうしてもいふ事をききませんでした。

『そんなにお歸りになりたければ、もう無理にお留めはしませんが、あなたが旅立をなさるのなら餞別を上げたいと思ひます。それだからもし今日でも明日でもこの麓を通る旅人があつたらその人の持つてゐる物をとつて、皆なあなたに差上げます』と周通といふ頭領が云ひました。

恰度その時、麓の方に見張に出てゐた手下の者が急いで歸つて來て、

『今二臺の車に一抔荷を積んだ旅人が二三十人通つて行きます』と、注進したものですから、

『それでは急いで奪つて來ますから待つてゐて下さい』と周通は仲間の李忠や多勢の手下をつれて山を下つて行つてしまひました。魯智深は周通の話を聞き、する事を見てゐて、『何といふけちな奴だらう』と思ひました『この山にはふだんから貯へてある金銀や寶の類が澤山あるのに、これを與れようとはしないで、人の物を取つて餞にするなんて、これは決して誠の志ではない。それがためまた多くの人を苦めたものなんか貰ふ事は俺はいやだ』

さう思ふと、魯智深は二人の頭領のゐない中に、何か惡戯がしたくなりました。

『よし〳〵、彼奴等のゐない中に、此處に隱してある寶をみんな奪つて一つ驚かしてやらう』と心を決めると、そばにゐた二人の小賊を蹴倒して、柱に縛りつけてしまつて、庫の中にあつためぼしい物は皆な大きな風呂敷に包み刀を差し、鐵の棒を持つて、山の後の方に行つて見ますと、何處も彼も切立つたやうな險阻の所ばかりなので、魯智深も弱つてしまひました。けれども本道から行けば見つかるに違ひないと思ふと、

『よし、それなら一番こゝから轉がり落ちてやれ』と風呂敷と鐵の棒と刀を一緒に結いて、山の下に投げ落して、自分はその後から頭を抱へてごろ〳〵と轉がり落ちて行きました。鐵のやうに出來た魯智深の身體は、岩に打つかつても不思議に怪我もしないで、山の下に達しました。

魯智深は起き上ると、『これでよかつた』といつて、包や鐵の棒を取り上げて、肩に擔いで、急いで東京を差して逃げ出してしまひました。

周通や李忠は、旅人を追拂つて荷物を奪つて山の上へ歸つて來ると、二人の手下が座敷の柱に縛りつけられてゐるので、急いで繩をといて話を聞くと驚きました。裏山は險阻ですから逃げる事は出來ないから、まだそこらでまごまごしてゐるかも知れないと思つて多勢の手下を連れて探しに來ると、崖の所から轉がり落ちたあとがあるので、二人は更に驚いて、『こんな亂暴な事をする人間を、追かけたつて、とても捉へる事は出來やしない。』といつて諦めてしまひました。

魯智深はそれから險しい山を越え、林を過ぎてどん〳〵歩いて行きますとやがて路の傍に大きな古寺があるのを振り仰いで見ると、朱塗の額に瓦鑪寺と金で書いてありました。魯智深はお腹が減つてたまらないので、誰かゐたら御飯を貰つて食べようと思つて、石橋を渡つて山門の中に入つて行きました。やがて坊さんのゐる部屋を尋ねましたが、そこには人の影すらなく、壁は落ち床は腐つて草ばかり生ひ茂りまるで荒野のやうな光景です。お堂の方へ廻つて見ると、燕の糞と木の葉ばかりが落ちてゐて、あたりは蜘蛛の巣だらけになつて、そこも人はゐませんでした。

『誰もゐないのかな、弱つたな』と思ひながらどん〳〵裏庭の方へ廻つて來ますと、一軒の小さな小舍があつて、その中には老人の坊さんが五六人、向ひ合つて默つて坐つてゐました。

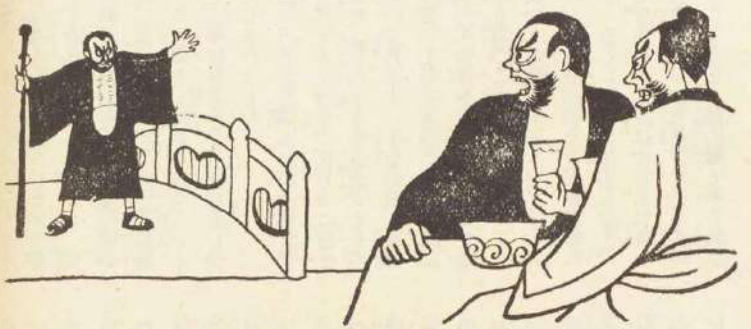
魯智深は戸口によつて中の樣子をよく見ると、その坊さん達は顏色は土のやうに蒼ざめて、ほろ〳〵になつた着物を着て、ぢつと首垂れてゐる姿がまるで幽靈のやうに情けない有樣だつたのです。魯智深は一層不思議に思ひながら、

『私は五臺山から來たものですが、御飯を一ぱい御馳走して頂きたいと思ふのですが』と聲をかけますと、老僧の一人が進み出て、

『五臺山のやうな立派な所からおいでになつたのなら、御飯を上げたいのは山々ですが、私達もかうして三日も食べずにゐる位ですから、一粒のお米もないのです』と、虫のやうな聲で云ひました。

『こんな大きなお寺で、どうしてゞす』と魯智深は怪訝さうな顏をして尋ねました。

『このお寺も昔は隨分盛んに參詣人もあるし、坊さんも澤山ゐたのですが、少時前に一人の雲水の坊主が來て、それがまた一人の道士を連れて來ましたさうして刀を拔いて脅して、山中の僧侶を皆な追出してしまつてから、寺にあつた寶物は賣り拂つて、みんなお酒を飲んだり何かしてしまつたのです。私達も逃げたいと思つても、何しろこんなに年を取つてゐては、どうする事も出來ないで、こゝにゐましたが、たうとう食べる物もなくなつて、今はもう餓死を待つばかりになりました』といつて聲を上げて泣き出しました。魯



智深はそれを聞くと大に怒つて『その惡僧はいまどこにゐる』と尋ねました。

『はい、いつでもお堂の後の方の座敷にゐます』と老僧が答へたのを聞くと、魯智深はすぐに鐵の棒を提げて、走つて行きました。

見るとお堂の後ろの楓の樹の下で、人相の惡い和尙と、道士の服を着た男が、若い女に酌をさせて、酒を飲んでゐました。魯智深は大きな眼を向いて、

『汝惡僧、多くの人を惱して、酒や女に耽るとは何だ』と呶鳴りつけますと、惡僧も、

『貴樣はどこの馬鹿だ。それほど命がいらないのなら殺してやる』と叫びながら刀を拔いて斬つてかゝつて來ました。

魯智深はすぐに鐵の棒を振つて向ひましたが、しばらく戰ふと惡僧はだん〳〵太刀先が亂れて來たので、道士も刀を拔いて加勢に出て來ました。魯智深はふだんならばこんな奴の二人や三人を相手としても驚く人ではありませんが、何しろ御飯も食べずに歩き通して來たあとなので、お腹がすいてゐるために、氣力がだん〳〵續かなくなつて、たうとう逃げ初めました。

惡僧と道士の二人は、山門のそとまで魯智深を追つかけて來ましたが、そとで魯智深は取つて返して再び戰ひましたが、お腹がぺこ〳〵なので、どうしても敵はないで、棒を振廻しながら、石橋の所まで來ると、二人はもう追掛けて來なくなつたので、鐵棒をかついでどん〳〵逃げて行きました。やがてかなり遠くまで來た時考へて見ると、桃花山から奪つて來たお金の入つてゐる大切な包みを忘れて來た事を思ひ出したので、

『これは大變なことをした』と魯智深は思ひました。自分が、空腹でさへなかつたらば、あんな奴位なんでもなかつたのだが。よしこの上はどこか人家を尋ねて食事をして、再び彼奴等と戰つて包みを取り返して來なければならない。』と思つてまたどん〳〵馳け出して行きました。この時はもう日が暮れてゐましたが、魯智深が走つて行く道傍の木蔭から一人の男が不意に飛出して來て、薄闇をすかして魯智深の樣子を見ると、

『ちえッ』といつてまた引込んでしまひました。魯智深はこれはきつと追剝だらうと思つたので、此奴をつかまへて反對に何か取つてやれと思つて、その木のそばへ行くと、

『こら追剝出て來い。この有難い鐵の棒で引導を渡して後生を樂にしてやるから』と呶鳴りますと、

『貴樣は何にもないやうだから許してやつたのに、却つて俺の物を欲がるのか』といひながら、その男は刀を揮つて飛び出して來ました。魯智深はすぐと鐵棒を振廻して向つて行くと、

『和尙少し待つて下さい』とその男がいひました。魯智深も何だか聞いた事のある聲だと思つて手を休めて近寄つて見ると、それはかねて仲のよかつた九紋龍史進だつたので、

『何だ九紋龍だつたか』といつて二人は大いに笑ひました。そこで二人は今までの自分達のことを簡單に話し合ひました。魯智深は、また今自分が瓦鏘寺で惡僧と戰つて空腹のためにて負けて來たことを話しますと、九紋龍は自分の包みから、辨當を出してやつたので、魯智深はすぐにむしや〳〵と食べてしまつて、

『これで助つた』と云ひました。

『それではこれから私も一緒に行つてその惡坊主と道士を退治してしまはう』と九紋龍がいつたので、お腹のふくれた魯智深は勇氣益々百倍して、二人は瓦鏘寺を指してかけて行きました。

瓦鏘寺の門の前まで來ると、さつきの二人はまだ石橋の所に立つて、四邊を警戒してゐました。

魯智深はまづ九紋龍を林の中に隱しておいて、

『先刻は餓と疲れてゐたために汝等に負けたが、もう腹をつくつて勇氣を取り回へして來たから出て來て勝負をしろ』と石橋の前へ來て罵りました。

『何だ一度逃げ出した弱虫が、それほど命が惜くないのか』と惡僧は先の刀を揮つて斬てかゝつて來ました。けれども、もう勇氣のついた魯智深の敵ではありませんでした。二太刀三太刀、刀を合せたと思ふと、惡僧の太刀先は亂れてすぐと危くなつて來ました。

道士はこれを見ると、また刀を拔いて斬りかゝりましたが、林の中に隱れ

てゐた九紋龍が飛び出て相手となりましたので、魯智深は鐵棒を振つて惡僧を橋から下へ擲り飛ばしてしまひました。道士はこの光景に勇氣を失つて逃げ出さうとするところを、九紋龍が追打に右の腕を斬り落し、刀を回して首をはねてしまひました。魯智深はすぐと寺の中へ入つて行つて、老僧達を尋ねましたが、老僧は先刻魯智深が負けて逃げたのを見て、すつかり失望したと見えて、皆な並んで頸を縊つて死んでゐました。お堂の後ろの方へ行つて見ると、そこにも女が死んでゐたのです。

『私がお腹がすいてゐたために可哀想な事をした』といつて、九紋龍と二人で、その人達を懇ろに葬つてやりました。それから二人は寺の中を探して、惡者共が貯へておいた金を取り出して魯智深は風呂敷包みを取り返して、寺を出ようとしましたが、

『こんな人氣のない寺をこのまゝにしておくと、また惡者が來て住んで、往來の人を惱せるといけないから』といつて、魯智深は火をつけて古寺を燒いてしまひました。その晩は二人ともに月の光を賴りに夜通し馳け通して、翌朝になると、魯智深は東京へ、九紋龍は小華山の方へ行くので、また逢ふ事を約束して分れ分れになりました。

九紋龍に別れてからの魯智深は、旅費も澤山あるし、恐い者もないのですから、悠々と歩いて、半月程たつてから漸く東京城外の大相國寺に着きました。來て見ると、それは話に聞いたより立派なお寺で、立派な山門が前に聳え、お堂は奥深く廣々と連つてゐました。魯智深は中に入つて、取次の坊さんに、智眞和尙からの手紙を渡したので、客間へ通されて休んでゐました。

大相國寺の智清禪師といふ人は、自分の兄弟子の智眞和尙からの手紙といふので喜んで封を切つて讀んで見ますと魯智深が五臺山で今までにした事がすつかり書いてありました。さうして、——こんな亂暴な人をお願ひして濟まないが、どうか少時そちらに留めておいて下さい。この人は後になつて、きつと立派な人になるからと添書がしてありました。

智清禪師は大勢の坊さん達を集めて『今魯智深といふ人が尋ねて來たが、これはもと人を打殺して出家なすつて五臺山に住んでゐたが酒に醉つて、二度も大騒動を起したさうだ。今日智眞大師から私にしばらく世話をしろといつて來なすつたが、寺に留めておけば大騒動を起すだらうし、追ひ歸せば兄弟子に申譯がなし、私は大變困つてゐるのだが、どうしたら好いだらう』と皆に尋ねました。皆はそれを聞いてすつかり困つたやうな顔をしてゐました

が、その時一人の坊さんが進み出て、

『和尙樣それには丁度好い事があります。それはその魯智深といふ人を、野菜畑の番人とするのです。といふのは近頃あの野菜畑には、近所の亂暴者共が園ひを越えて入つて來て犬を追ひ廻したり喧嘩をしたりして、その騒々しいことつたらありません。それに今あすこの番をしてゐるのはもう老人だものですから、取締ることもなにも出來ないで困つてゐます。この魯智深といふ人なら、強いから、きつと好いでせう』と云ひました。智清禪師はそれを聞くと大變に喜んで、すぐに魯智深をよんで、

『お前は今日から、あの酸棗門のそとにある野菜畑の番をしてゐてくれ』と云ひました。

魯智深は、最初自分はそんな事をするのはいやだと云ひましたが、智清禪師に吳々言ひ伏せられて、たうとうそこへ行く事となりました。

その翌日から魯智深は、今までの老僧と代つて太い鐵の棒を引きずつて、野菜畑の中をぶら〳〵と歩いてゐました。

するとこの菜園には、いつも近所の無賴者が二三十人集つて來て、棒の稽古をしたり、犬を追ひ廻したり、蛭根の中に潜り込んで野菜を盜んだりしてゐましたが、魯智深がやつて來たのを見ると、皆な集つて相談を始めました。

『今度あんな大きな坊主がやつて來たが、新米の中にうまく脅しておかないと、俺達の邪魔になるが、一體どうしたらいいだらう』と一人が、いひますと、

『さうだとも、今の中にあの坊主をおびき出して皆してぶん擲つておかないと　自分達のいふことを肯かなくなるからいけないが、それにしても彼奴は强さうだぞ』と他の者が云ひました。

『好いさ好いさ、こつちにも甘い計があるよ。誰か彼奴のところへ行つて新しく來たのを御祝ひするといつて、欺してあすこの大溝のところまで連れて來るのだ。そこで油斷を見すまして、溝の中へ突き落して、皆してぶん擲ればわけはないぢやないか』とまた他の者が云つたので、

『それが好い、それが好い』と皆なは賛成してしまひました。

魯智深はそんな惡企みをしてゐる人間が、そこいらにゐるとは知らないものですから、菜園の中を歩いて來ますと、五六人の男が魯智深の前に來て、しきりとお辭儀をし、

『あなたが今度この菜園の監督におなりになつたさうで、誠にお目出度く思ひます。ついてはお祝ひのお酒を一杯さし上げたいと思ひますから、あすこの籔の所までどうかおいで下さい』と、云ひました。

『私が菜園の見廻りとなつたつて、どうしてそんなに御馳走をしてくれるのですか』と魯智深は不思議に思つて尋ねますと、

『私達はこの近所に住む者で、いつもこの中を往つたり來たりさせて頂くので、それで、おちかづきになりたいと思つて來たのです』と、その人達が云つたので、あとについて行きました。

やがて皆なは例の溝の傍までやつて來ましたが、此時魯智深の左右にゐた二人の者は、いきなり魯智深の足にかぢりつかうとしましたが、魯智深の方にそんな油斷はありませんでした。

大丈夫と思つて二人が飛びついて來るとこを、右と左に蹴飛したので、二人の方が却つて溝の中にざぶんと落ち込んでしまひました。つゞいて三五人の者が、飛びかゝつて來ましたが、蹴毬でもするやうに、他愛なく溝の中に投げ込まれてしまひました。これを見てゐた他の者はもうその勢ひに恐れて近づいて來ようともしませんでした。

すると魯智深は、雷のやうな聲を張り上げて、

『貴樣等の中一人でも逃げたら踏み殺すぞ』と呶鳴りつけましたので、多くの者は色を失つてへたゝ〳〵となつてしまひました。魯智深はそれを見て、貴樣達は何のために、私にこんな無體な眞似をし向けたのか』と尋ねました。

一同の者はもう何と答へる事も出來ず地面に坐つてたゞ『大人どうぞ特別の思召をもつてお許し下さい』と謝罪るばかりでした。

最初に溝の中に投り込まれた二人の者は、漸々起き上つてどうにかして這ひ上らうとするのでしたが、溝が深いためにどうしても上れないので、泥水だらけの顏をして、

『和尙さん、どうか助けて下さい、助けて下さい』と泣聲を上げました。魯智深は笑ひながら、

『皆して彼奴等を引上げてやれ。それから私は事情をゆつくり聞いてみるから』と、いひましたので、一同の者は集つて、溝の中に落てゐる、七人の者を皆な救ひ上げました。どれもこれも溝泥だらけになつてゐて、その臭い事と云つたら堪らない位でした。魯智深はます〳〵大な聲でけら〳〵笑つて、

『貴樣達は早々池の水で身體を洗つて來い。それからいつて聞かせる事があるから』といつたので、七人の者は大急ぎで、池の水で身體を洗つて、魯智深の前に來て平伏しました。

魯智深はそこにゐた一同の者を引連れて、自分の部屋へ歸つて來ると、皆なをそこに坐らせて、自分は眞中の一段高い臺の上に腰を下しました。そして、

『一體貴樣達はどういふわけで、私に對してあんな惡い事をしたんだ』と尋ねました。

『實は私共はこの近所に住んでゐる者ですが、いつもこの菜園の野菜を盜んで賣り飛しては酒を飲んでゐたのですけれども私達の勢ひが強いので、この寺の坊さん達もどうする事も出來ないでゐたのですが、今日といふ今日は、あなたのやうな強い方に會つて、本當に驚いてしまひました。あなたのやうな強い方は、今までこの寺に見た事がありませんが、一體どこからお出でになつたのです』と怯へながら一同は變る變るに云つて『どうぞ私共の罪はお赦し下さい』と謝罪まりました。

すると魯智深はまた大いに笑つて、『お前達のやうな赤ん坊みたいな者がこの私にそんな事をしようとしたつてそれは無駄だ。私はもと魯達といふものだが、人を殺したために五臺山に上つて出家して、今は魯智深といふ豪傑だ。千軍萬馬の中でも人なき所を行くやうに進んで行く私に、お前達が向つて來て何になる。嘘と思つたら明日來て見ろ、私の武藝を見せてやるから』

と云つたので、一同の者は、

『それでは明日伺ひます』

と云つて、こそ〳〵と歸つて行きました。

（つゞく）

因幡踊のお姫様

藤澤衛彦

花園に圍まれたお館の奥深くに、この國の殿様のお姫様はお住ひでした。妹達は、皆、町のお城の方に晴やかに住つてでしたが、お館のお姫様は、お亡なりなされた前の奥方様のお姫様でしたので、それで、わけへだてられて、こんな淋しい花園の中のお館にお住ひなのでした。

もと、このお館は、國主の花作りが代々住つてゐたところを修繕したお館でしたので、いつも種々の花が咲いてをりました。冬になると、梅林の白梅の花が美事に咲きました。その高い薫は、里の方にまで漂つて行きました。里の人達は、その匂ひに引きつけられて、お館の方にやつて來、お館の垣に寄つて、梅園の方をすかし見るのでありました。ちやうど、そこを通りかゝつた旅人も、思はず足を停めて、梅園の方を眺めるのでした。何とも言はれないいゝ匂ひが、旅人の鼻をうちますと、思ひ出したやうに、その旅人は、

『どなたのお屋敷ですか。』と、里の人に尋ねました。

『この國の殿様の第一の姫のお館です。』と里の人が答へました。

『なんといふ清いところにお住ひでせう。そのお姫様つてどんな方ですか。』

と、また旅の人が聞きました。

『綺麗な、清らかな、ちやうど、あの梅のやうにお美しいお姫様です。』と、里の人が答へました。

『私ほ、お聲を聞いたことがありますが、それは〳〵お美しい聲でした。』

と、他の里の人が言ひました。さう言つてゐる時、どこかで、鶯が啼きました。

『あ、あの鶯よりもお美しいお聲でした。』と、思ひ出したやうに、里の人は言ひ足しました。

けれども、お姫様は、めつたには、里の人達の眼には觸れませんでした。或夏の日のこと、一人の樵夫は、山の歸り途に、ふとお姫様を拜みました。その時お館の花園には、百合の花が一杯咲いてゐて、お姫様は、その中に、花の精のやうに立つてをられたといふことでした。樵夫は、いつも、この話をしては、その日の事を思ひ出し、

『嘸と、それは、まはり合せのよい人間に生れて來たことか。いつ、どんな時でも、お姫様を拜んだ日の事を思ふと、身内が、ぞく〳〵と嬉しくなつてこの世にいき甲斐のあつた事を、神様にお禮申し上げる心になれる。』と言ひ言ひしました。

或秋のうらゝかな日に、三人連の村の少女が、山狩に行く途に、そつとお館を透見して、お姫様を拜んだ事がありました。その時、お姫様は、表寄りの公孫樹によりかゝつて、空を見上げてゐたと語り傳へられてをります。空は高く、鳶が一羽、ピーヒョロヒョロと、圓を畫いて舞つてゐるのを、何時までも何時までも、お姫様は見上げて居られたといふ事でした。公孫樹の葉は、黄金色に照り輝いて、その下にお姫様は、照り榮えて、生身の天女様のやうに、氣高くおはしたといふ事でした。公孫樹がハラ〳〵と散つて、お姫様は始めてわれにかへられると、つと、垣の方を見られ、そこに少女達を見つけ出されて、につこりお笑ひあそばされたといふことでした。

『そのお美しさ。ほんとに忘れられませんわ。』と、その三人の少女達は、何かの機會には言ひ出でて、まだ見ぬ人達に自慢にして聞かすのでした。それを羨む他の少女達は、きつと、この三人の少女達は、お姫様を拜んだといふ誇だけで、お嫁にでも行かれる氣でゐるのだよ。』と、悪口言ふほど、三人の少女達は、お館のお姫様を拜んだ事を光榮に思ふのでした。

けれども、お館の中のお姫様は、ちつとも、さうした噂さを知りませんでした。そして、何時でも、里の少女達が、自由に山狩が出來、勝手に一人歩きの許されてゐることを却つて、羨ましく思ふのでありました。鶯を見れば鶯に、鳶を見れば鳶に、その思ひを言ひかけて、鳥の自由を羨ふのでありました。

『もしか、わたしが鳥であつたら、どんなにか嬉しい事であらう。廣い世界を自由氣儘に飛びまはつて、旁れたら、梅の樹へでも、公孫樹へでも、勝手なところへ羽を休める。鳥は、何といふ幸福ものだらう。』と、お姫様は思はれました。

それで、このことを、おつきの者に話されて、夏の軒の燕や、冬の池の鴨のやうに、思ふところに來たり行つたりする身になりたいと話されますと、おつきの者は、びつくりして、『けつして、けつして。』と、それを制して、お姫様の考へあやまりだといふことを、くど〳〵と述べるのでありました。

『とんでもないお考へ間違ひでございます。姫君、たとへ世界中を探しまはりましても、こんな靜かな、清らかなよいところは、何處へ行つたとてある

ものでござりません。このお館の外に、一人で、一歩でもふみ出されてごらん遊ばしませ。そこには、苦しみやら、憎しみやら、悲しみやらが、待伏してゐて、もう〳〵安心することは出來ませんです。こゝよりいゝところが他にありますものか。』と、おつきの者は、きつぱりと申すのでありました。

けれども、お姫樣は、さうした、外の苦しみといふこと、悲しみといふことを味はつてこそ、樂しい、嬉しい、面白い事が、ほんとに味はゝれるものだらうと考へましたので、何と言はれても、やつぱり、一度は、是非、お館の外に出て、自由に世の中といふものを見たいと思はれておいでゝした。

さうかうするうちに、再び、若草の芽をふく春はめぐつて來て、窓の柳の葉も芽ぐむ、その枝垂のよ〳〵と、お姫樣をお庭の方に手招き寄せる時節となりました。ついうか〳〵さそはれて、お姫樣が庭に出て見ますと、もうそこここゝに、春の花が、咲き匂ふてゐるのでありました。名も知らないかはいい羽蟲やら、蜂やらが、いろ〳〵の花の周圍に集つて、羽を鳴らして歌をうたひますと、綺麗な蝶が舞をまつてをります。ほんたうに、よい日和で柔かい春風が、お姫樣のお髪を撫でて行きます。お姫樣は、おつきの者もつれず、

花園を一廻りして、だん〳〵裏手の方にまはられました。花園の裏口には、門番小屋があつて、そこには門番がゐるのですが、うつらうつらと居眠りをしてをりました。

お姫樣は、そつと、裏口の扉を開けて外に出て見ました。そこは少しばかりの崖になつてゐて、崖の下から、里の方に道が開かれてゐるので、そこからは、一目で、遠くの方まで見渡されました。

外は、眼もさめるやうな春の景色、うつとりと、お姫樣が見とれてをられる崖の下の方に、ふと、近づいてくる賑やかな調子のおもしろさうな歌聲。お姫樣は、浮き立つやうに、その歌聲に聞き入るのでありました。

彌生になれば　心浮き立つ
川のむかうは　今花盛り。
鐘がなりそろ　花が散りそろ
リツチャリツ　リリリツリツノ
ハラハラハラ
花に行きたし　橋はなし
柳にわが身を　ゆりかけて
濃らしよよの　しんとろ〳〵と濃らしよ。
わたる君樣　京鹿子
小袖京小袖　色もよや
紋柄もよや　著よや。
あら都戀しや　都のしてたち戀し
やわれは因幡の者なるが……。

うたふて來かゝる人を見ると、揃姿の少女二人、後に箱持と、今一人の男と、四人で、この頃此國ではやる因幡踊興行の一群でしたが、お館のお姫樣は、それを知りませんので、『何といふ樂しさうな人達であらう。』と、崖の上から、羨やましさうに、それを見てゐるのでありました。

ちやうど、崖の下に來かゝりました時、因幡踊の踊子の一人の少女は、眼ばやく崖の上のお姫樣を見つけて、『まあ、綺麗だこと、ほんとのお姫樣でしよ。』と、たまげるやうに叫びましたので、一行の人達は、みんな崖の上を見ました。それでお姫樣が恥かしさうにしてゐられますと、踊子の少女は馴々しく、下から聲をかけました。

『お姫樣、ごきげんよう　何といふあなたはお美しい方でゐらせられます。』

一人がかう言ひますと、又一人の少女は、お姫樣には、おともの者もおつれなさらず、どうして、そこにお立ち遊ばしますか。』と、ふしぎさうにおたづねするのでした。そこで、お姫樣は、『そつとぬけて出て、今、ちつとばかし保養をしてをります。』とお返事なさいました。すると、興行團の二人の男は、妙な眼づかひをしあつて、あたりを見廻してから、

『お姫樣には、どうして、ご自由に表においでアそばされぬのですか。』と、その一人が尋ねました。

『召使の者達が、お館のそとには、辛いこと、厭なことが待伏せしてゐるから、出てはいけぬと止めるからです。』

と、お姫様は、正直に答へられました。すると、因幡踊の男は『へゝへゝへゝ』と笑つて、『何で〳〵、お館の外の世の中は、そんないやなところではございませぬ。論より證據、私達一行は、かうして、樂しく踊りうたひながら、おもしろをかしく世の中を渡り歩いてゐるものでございますよ。へゝへゝへゝ。』と言つて、ずるさうな眼で、お姫様をぢつとみつめました。

『方々歩くうちには、隨分と珍らしいことを見たり聞いたりするだらうね。』とお姫様は、なつかしさうに聞かれました。

『それはもう、町や、海や、港や、山や、わけてこれからまゐります都の賑やかさ、どんなにか樂しいだらけでございませう。』と、うそをついて、お姫様をだますのでした。

『まあ、おもしろさうだこと、私も行つて見たいが、一緒に連れていつてはくれまいか。』

『へえ、ですが、そのお身なりでは。』

『では着かへて來ようかね。』

『いえ、……さう〳〵、因幡踊の揃ひの衣裳が、まだ一着あつたつけ。ではこれを着て行かれませ。』

そこ〳〵に着かへさして、髪も結ひ直さして、因幡踊の一行は、新しい踊子姿のお姫様を加へて、遙か峠の方を指して行つてしまひました。

都が、どんな遠いところであるかも知らないお姫様は、お館で、大騒ぎをしてゐることも氣にはなるが、おもしろさうな踊子の生活にあこがれまして、たゞうか〳〵と、その人達と旅を續けて行きました。

夜になつた時に、お姫様は、みんなと一緒に、貧しけな一軒の宿屋に泊ることになりました。夜の褥も調度も、きたならしいものではありましたが、何時も一人で寢なれた者が、自分と同

じやうに若い踊子と一緒に、ごた〳〵と床に這入つて、寢ながら、まだ聞いたこともないおもしろい世間の話や、不思議な物語を聞かされることは、たまらなく嬉しい事で、夜を更かすのでありました。翌日の旅はつらうございましたが、行く先々の里々で、踊子の踊りや男達の囃子方のおもしろさにまぎれて日を暮しました。

かうして、その翌日も、その又翌日も、お姫様は、珍らしい花の咲く野原や、海の見える並木道や、若草の萠える小山の麓などをめぐりめぐつて、遠まはりに都の方へ〳〵と旅を續けるのでありました。因幡踊の男達も、だまして連れだした人買の群の者であつたに似あはず、お姫様だけにはつらくあたらず、それに、不思議なほどに美しいお姫様の姿は、道行く人の眼を惹き興行の囲にもなつて、大變興行のいゝもよかつたので、人々は、大切な看板踊子様々と、傾々踊りもせぬのに、いろ〳〵親切にいたはつてくれましたので、お姫様は、その人達を、惡漢とも知らずに、日頃世の中を見たいと心がけてゐた願ひをかなへてくれた嬉しい人達として心置きなくつきあひました。まことは人買の因幡踊の男も、さうした邪氣ないお姫様の美しい純なお心を見てゐるにつけて、自分達の心が清められるやうに思つて、これまでの行ひを恥かしい事にも思ふのでした。

かうして、旅を重ねて、一行は、幾日かの後、美しい湖の國に辿り着きました。それはちやうどお晝時分でありましたので、とある茶屋に腰かけて、一行が晝食をしてをりました時、これも、街道をお下りになるお大名の行列がありました。それで、因幡踊の一行は、土下座して、そのお通りを迎へましたが、お姫様ばかりはさうすることを知りませんので、顔をもたげて、ぢつと殿様のお駕籠を見てをりました。

お行列の徒士の侍が、それを見咎めて、因幡踊のお姫様を叱りつけました。お姫様が、驚いて、その侍を見ますと、それは、國のお城の老臣で、お館へも度々見えられた侍でしたので、

『お前、爺ではないか。』と、思はず口をすべらせました。爺が、いぶかしげに踊子を見ますと、それは、まぎれもないお姫様でしたので『あつ』とばかりに驚いて、殿様に申し上げました。殿様は、お駕籠を止めて、そこで、珍らしい親子の對面を遊ばされました。

一部始終を聞かれ殿様は、お姫様の不心得を戒められ、人買の因幡踊を、重い罪にするといはれしたが、お熱悲深いお姫様の熱心なお願ひで、その罪いゆるされ、更めて、一行は、お姫様のお相手の共として、お國に連れ戻られました。それから、因幡踊は、諸國に大層ひろまりました。（をはり）

お化を賣つた話

田中實

ある暗い晩、宋定伯といふ男が市場へ出懸けて行く道で、足無しでフワリフワリ歩いてゐる人に出逢ひました。定伯はドキッとして立ち止りましたが、その男の方でも定伯を睨みつけて、

『お前は誰だ？……おれはお化だが……』と云ひました。

定伯はハッとして顏色を變へましたが、ぢき平氣になつて、

『よし〳〵、この間抜けのお化め、なんとか惡戯をしてやらう。』と思ひました。で、

『わしもお化だ！』と答へますと、お化は、

『何處へ行くのか？』と訊れました。

『市場まで行く。』と定伯が答へますと、

『おれも其處へ行くから一緒に行かう。』と云つて、先きになつてフワリフワリ歩き出しました。

定伯は後からついて歩きましたが、お化があんまり早いので、どうしても遲れがちになります。お化ばぢれつたくなつて、

『おい、どうもお前の歩き方はのろくて駄目だ。だから今度は代り番こに背負つて行かうぢやないか。』と云ひました。

『うん、よかちう。』

定伯も賛成しました。

そこで先づお化が定伯を背負つて歩きました。しばらく行くとお化はハアハア息をきらして、

『なか〳〵重たいぢやないか、お前はお化ぢやないのだらう？』と云ひました。

すると定伯は、失敗つたと思ひましたが、

『わしはこないだお化になつたばかしだよ。』とごまかしました。お化は『さうか』と云つたまゝ、べつに疑ひもしませんでした。

こんどは定伯が背負ふ番になりました。お化を背負つてみますと一寸も重くありません。

『なるほど、へんに思はれるのは無理はない……。わしは魂ばかりではないんだもの……』

定伯はさう思ひながらニヤリと笑ひました。そして、どういふ具合に惡戯をしてやらうと考へて見ました。

二三度代り合つて行くうちに、定伯はふとお化に向つて、『わしはお化の仲間入りをしたばかりで何もわからないのだが、いつたいわれ〳〵には何が一番惡しいものなのだらう。』と訊いて見ました。お化はすぐ、

『そりやあれ、人間の唾ほど恐ろしいものはないよ。それに氣をつけてゐれば、後は何だつて、びくともすることはない。』と敎へてくれました。定伯は『うまい！』と心のうちで喜びました。

しばらく行くと川ばたに出ました。お化は水音もたてずしづかに渡つて行きます。定伯は後からつゞいて渡りますと、ポチャポチャ水音がたちました。

『お前はなぜそんなに水音をたてるのだ。しづかに歩いたらいゝぢやないか。』とお化が見かねて注意しますと、定伯は、

『だつて渡り方をしらないんだもの、死んで間もないんだからね。』といひました。

岸に上ると、二人はまた代り番こに背負つて行きました。だいぶん行つて、もう向ふに市場が見えるやうになつた時、定伯が代つてお化を背負ひました。すると定伯は何を思つたか、お化をグッとひどく押へつけましたので、お化は苦しさうに喘りながら、

『おい、そんなに押へつけちやくるしいよ。もうたくさんだ、下しておくれ。……なにを冗談をするんだ。』と云ひました。

でも定伯は、知らん顏してます〳〵しめつけました。そして一目散に駈けて行つて、市場へくると、やつとお化を地面へ引づり下しました。そしてやつぱり押へつけたまゝで、何かに化けるか、それとも、もとの姿でゐるか見てゐますと、間もなく一匹の羊に化けてしまひました。定伯は思ふつぼにはまつたので、心のうちでホク〳〵ゆびました。

『こいつあ、うまくいつたわい。早速こいつをどこかへ賣つてお金を儲けてやらう。』と云つて、羊を引ぱつて市場を歩いてゐますと、獸肉屋の前を通りかゝりました。定伯はにこにこしながら獸肉店へ入つて行つて、

『此羊を買つてくれませんか。』と云ひました。

すると獸肉店の主人は何度も〳〵羊の身體を叩いて見て、

『さうですね。あまり强くないのでどうかと思ひますが……』と云つて考へ込みましたが、

『どうです、千五百文位では……』と云ひました。定伯は大喜びで、

それでいゝです。』と云ひました。そして、すぐペロリと舌を出して、

『全もうけだい。』とつぶやいて羊の方を見て嘲笑ひました。

主人がお金を出しに行つた間に、定伯は、何かまた外のものに化けるかも知れないと思ひましたので、羊に唾をうんと塗りつけておきました。が、お化はうんともすうとも云ひませんでした。定伯はお金を千五百文貰つて、

『こいつはとんだ大儲けをしたわい。』と云ひ云ひ、飛んだりはねたりして喜びながら、家の方へ歸つて行きました。

そのうち、定伯はお化が溺んで祟りやしないかと心配しましたが、何事もありませんでした。（をはり）

人倭し無首

（きゞつ）

蝶孤場馬

一

それから一二週間經つてのことでしたが、牧師さんは近くの市へ、小兒の洗禮に呼ばれました。牧師さんは、其所で、ハンズに伴をしろと言ひつけたのですが、その市は牧師さんの家から馬で二三時間で行けるところであつたのですのに、何うした譯なのだか、ハンズが食物の一杯入つた袋を擔いで、牧師さんの伴に立たうとするので、牧師さんは實に驚いてしまひました。

『何だつて、そんな大業なことをするんだね。先方は暗くならぬうちに歸つて來られるところなんぢやァないか。』

と、牧師さんは云ひました。

『何うして、何んな事があるか、分るもんですか。途中で隨分いろ〳〵な事が出來て、先方へ着くのが後れるといふやうな事は得てあり易いものですぜ。お斷り申しときますがね、あなたとの始めつからのお約束通り、日が沒れば、私はあなたの家來としては働きませんよ。日のあるうちに先方の市へ行き着けなかつたら、私は何處でも構はず、あなたを捨てゝしまひますから、あなたは一人でご勝手になさらなきやァいけません』

ハンズはさう云ひました。

牧師さんは、道は二三時間しきやかゝらないことを知りきつて居るものですから、一日かゝつても行き着けないなどとは、ハンズの冗談だと思ひましたので、別に何も云ひませんでした。

所で、ハンズが橋の馭者を勤めながら、いよ〳〵村を離れて二里程行きますといふと前の晩降つた雪がひどかつたところへ、それが風のために吹かれて、方々に深い吹き溜りが出來て居るのでした。それで、道がなか〳〵捗どらないで、牧師さんの居村と先方の市との間にありました木の深く茂つた森へ入りました時分には、日がもう西の方の木の頂邊のあたりまで落ちかゝつて居るのでした。深い雪のなかを踏み分けて行くのですから、馬の足はのろ〳〵と少しづつ進んで行くのでしたが、ハンズは始終後を振り返り振り返りして居るのです。

『お前の後の方には何が見えるのかね？　何でお前は度々振り返つて後を見るんだね？』

と、牧師さんが尋ねますといふと、

『いや、私は後に目がないもんですから、かうやつて振り返るんです』

と、ハンズが云ひました。

『馬鹿なことを云ふなよ、夜にならぬうちに市に行き着けるやうに、本氣になつて急いでくれよ』

さう牧師さんは云ひました。

ハンズは何の返辭もせずに、どん〳〵馬を進めましたが、それでも、矢張り幾度も後を振り返りました。

二

森の眞中頃まで行きますといふと、日がすつかり落ちて、四邊が暗くなつてしまひました。すると、ハンズは手綱を引いて、馬を止め、食物の袋を取つて、橋から跳び降りました。

『これ、何うするんだ。お前氣でも違つたのか』

と、牧師さんが驚いて尋きました。

けれども、ハンズは平氣な顏で、

『日が沒つたんですから、私の仕事はこれでおしまひです。私は今夜は此所で野宿をしますから、あなたは何うにでもご勝手になすつてください』

と、云ひました。

牧師さんは、全く困り果てました。ハンズに頼んだり、ハンズを威したり、いろ〳〵にしゝ、伴をさせようとしたのですが、ハンズは何うしても承知しませんのです。たうとう牧師さんは、太した褒美をやるから、市まで橋を馭して行けと云つたのですが、それでもハンズは、嫌だと云つて、動きませんでした。

『日が沒れば、働かないといふのが、始めからの約束ぢやアありませんか。その約束を私に是非破らせようとなさるのは怪しからんですね。あなたはそんな事をするのは自分で恥だとは思ひなさらんですかね。いゝや、何といつてもいけません。今夜ぢうに市へ着く積りならば、あなたお一人でおいでなさい。私はあなたの用をしないですむ時間になつたんですから、何したつても、あなたのお伴をする譯には參りません』

と、ハンズは云ふのでした。

『これ、これ、ハンズや。わしは何うしてもお前一人をこゝへ置いて行つてしまうことはできないんだよ。此所が何れだけ危ない恐い所だか、よく考へてみなさい。それ、彼所を見ろ、あの通り、絞首臺があつて、あの上には惡黨の死骸が二つぶら下つてゐるぢやアないか。あんな恐しいものゝ近くで何うして眠ることなんぞできるものかね』

と、牧師さんは、威しつ、すかしつといふ調子で、ハンズに云ひました。

『へえ、そんな事が何だといふんですね？　あの惡黨等は空にぶら下がつてゐるんだし、私の方は地べたで眠ようといふんです。あいつらが何うだらうとも、一向かゝり合ひなしといふものですぜ』

と、ハンズは云ひながら主人の牧師さんへ背中を向けて、ゾン〳〵行つてしまひました。

もうさうなつては何うにもし方がありませんでしたので、牧師さんは、まだ洗禮に間に合ひでもするかのやうに、一人で橋を進めて、市の方へと急ぎました。やつとのことで、市へ行き着きますと、牧師さんの知り人たちは、牧師が馭者なしで一人で橋でやつて來たのを見て、ひどく驚きまして、これは、途中で何事かあつたに違ひないと思つたのです。けれども、途中で雇人のハンズに置てきぼりにされた始末を皆なに話しますと、人々は、主人と雇人と何つちを馬鹿だと云つて宜いか分りませんでした。

三

ところで、ハンズの方は、市の人々が自分のことを何と云つて居やうとも、何と思つて居やうとも、それを知ることができたにしたところで、彼に取つては一向構うことではなかつたのです。背負ひ袋の中には十分食ひ物を仕込んで來てゐたのですから、それですつかり腹をこしらへ、烟草を大きいパイプでポカリ〳〵吹かしながら、木の枝の下の雪の少し少ないところを見付けて、其所へ天幕を建て、毛皮の外套や何かでよく身體をくるんでから、ぐつすりと眠込んでしまひました。が、それから何時間經つてからだか分りませんが、不意に何だか騷がしい聲がするので、ハンズはハッと眼を覺まして、起き上つて、四邊を見廻しました。

その時、月は丁度ハンズの頭の眞上のところへ來てゐたので周圍は晝のやうに明るかつたのですが、見ると、二人の首のない一寸法師がハンズの直ぐ傍に立つて、何か怒つた聲でガヤガヤ云つて居るのでしたが、ハンズが起きたのを見ますといふとその首無しの一寸法師どもは、

『やア、此奴だ、此奴だ、確に此奴だ』と、大聲で喚き、そのうちの一人はハンズの傍へともつと歩み寄つて、かう怒鳴つたのです。

『おい、何時かの兄い。首尾好く旨くこんなところで廻り合つたものだな。貴樣に塔の階段から蹴落されたお陰で身體ちうの骨がいまだに痛くつてし方がないんだ。貴樣はまさかあの晩のことを忘れてしまひはしめえな。さア、此度こさア貴樣の骨をぶつ挫いてやる番なんだぞ。おい、兄弟。さア、急

いで皆なを呼び集めろ』

やがて、雲蚊の群のやうに、何百人とも知れぬ首無しの一寸法師がまるで地の中から涌き出したかの樣に、何處からともなく駈け集まつて來たのですが、彼等は手に手に棒を持つて居ました。で、それが皆なハンズを取りまいて、八方からハンズの身體を所きらはずさん〳〵に殴りつけるのでしたが皆な一人一人にすれば極く少さい一寸法師ではあつたのですが、何しろその數といふのが非常なものな！でしたし、それに、皆な氣を揃へて、一生懸命力一杯殴りつけるのでしたから、幾ら強い人間でも、とてもかなうものではなかつたのです。ハンズはいよいよ最期だと覺悟してしまつたのですが、丁度戰烈しさの絶頂に達して居る時分に、一人の一寸法師が戰場へ飛び込んで來ました。

『おい、待つた、待つた。皆な待て』

と、攻撃してゐる一寸法師たちを止めて置いて、後から來た一寸法師はかう云つたのです。

『此の人は俺の生命を助けてくれたんだ。俺は此の人に恩が有んだ。俺が此の人に捉まつて、此の人は俺を何にでもすることができた時に、俺の生命を取らずに、無事に歸してくれたんだ。お前達は、成る程、此人の爲に塔の階段から蹴落されたにやァ違ひないんだが、でも、湯に入ると、直ぐ骨の痛みはなほつて了つたぢやァないか。まァ此度だけは堪へて、何にも云はずに、皆な歸つてくれ』

大勢の首無しの一寸法師たちは、それをじつと聞いて居ましたが、承知したと見えて、やがて、出て來た時と同なじやうに、不意に何處へか見えなくなつてしまひました。それまでは面食ひきつて居たハンズは、少し落ち着くや否や、自分を助けてくれた一寸法師を見ますといふと、それは確に何時かの晩塔の頂邊の鐘の中に坐つてゐた一寸法師であることが分りました。

四

その首無しの一寸法師は、悠々と木の下に坐りまして、かう云つたのです。

『えゝ、何うです。私が何時かあなたに恩返しをする時があるだらうと云つた時に、あなたは笑ひましたね。だが私の云つた通りになつたぢやァありませんか。これからは、あなたは何んな少さいものでも決して馬鹿にするものでないといふことがお分りになるでせうね』

『いや、何うも實に有りがたう』

と、ハンズは答へまして、

『いや、さん〳〵殴られたんで、身體ぢうの骨々が痛くつて堪まらない。お前が來て呉れなかつたら、俺は何うなつたか分らなかつたんだ』

すると、一寸法師は又かう云ひました。

『これで私は大抵恩返しができた積りなんです。だが、あなたも此所でさん〳〵な目にお會ひだつたんですから、その埋め合せに、あなたに一ついゝ事を教へてあげませう。あなたはもうあの吝嗇漢の牧師のところに奉公することは罷めておしまひなさい。で、明日家へ歸つたら、教會堂の北の隅へ行つてごらんなさい。さうすると、其所の壁の石のうちで、一つセメントで止めてない大きい石があります。あなたは、それをよく覺えて置いて、明後日は丁度滿月なんですからね、その眞夜半になつたら、鶴嘴を持つて行つて、その石を外してごらんなさい。石の下には澤山な寶が隱してあります。それは皆な昔々戰爭ばかしあつてし方がなかつた時分に誰かゞ其所へ隱して置いたものなんです。教會で使う金銀の皿の外に、金貨の入つた袋が幾つも其所にあるんです。けれども、それはもう何百年もそこへ隱されたきりになつてゐて、今ではもう皆な持主のないものなんですから、殘らずあなたのも

のにして宜しいんです。で、そのうちの三分の一だけを貧乏人たちに施してから、後をすつかりあなたが取つておしまひなさい』

一寸法師がさう云つてしまうといふと、何處か近くの村で鳥が鳴きました。それと共に、一寸法師の姿はパッと何處へか見えなくなつてしまつたのです。

ハンズは、もう身體の節々の痛みもなくなつてしまつたので、横になつて、少時の間その隱してあるといふ澤山の寶のことを思つてゐました。が、そのうちに、朝近くなりますと何時の間にか眠込んでしまひました。

五

牧師さんが市から引つ返して來た時分には、もう日が天へ高く昇つてゐました。

牧師さんはハンズが矢張り森のなかに居るのを見まして、かう云ひました。

『おい、ハンズ、お前は昨夜俺と一緒に來ないなんて、何といふ馬鹿なんだらう。俺は非常なもてなしで、さん〳〵ご馳走になつたんだよ。その上に貰つた禮の金錢をこれ此の通り衣囊へ入れてゐるんだ』

牧師さんはさう云ひながら、ハンズを口惜しがらせる積りで、衣囊のなかで、ヂャラ〳〵と金錢の音をさせました。

『へえ、さうなんですかい。それつぽつちの金錢を儲けやうつて、あなたは夜通し起きて居なすつたんだね。ところが、私の方は此所でぐつすり眠込んで居ながら、あなたの何百倍といふ金錢儲けをしたんですが、何んなものですね』

さうハンズは平氣で答へたのです。

『そりやァ一體お前何うしてそんな旨い事をやつたんだい』

と、慾張りの牧師さんは急き込んで尋ねました。

『いや、馬鹿といふものは兎角僅ばかしの金錢を持つてることを自慢するものですが、悧巧な者は何千兩持つてゝも、持つてるやうな顏さへしないものですよ』

と、ハンズは答へました。

で、もう晝間のことなのだから、約束の通りにするのだと云つて、ハンズは直ぐ樵の馭者になつて、牧師さんを家へ連れて歸りました。家へ歸つても、ハンズは自分の勤めを投げやりにはしませんでした。先づ馬を橋から解き放して、厩へ

つれて行つて、其所で飼料を與へてから、一寸法師のいつた通り教會堂の北の隅へ行つて見ました。

成る程確に一寸法師がいつた通り、壁に一つ外すことのできる石がありました。

ハンズはそれをしつかり見定めて置て、牧師の家へ歸つて、その日の主人の用を動めました。

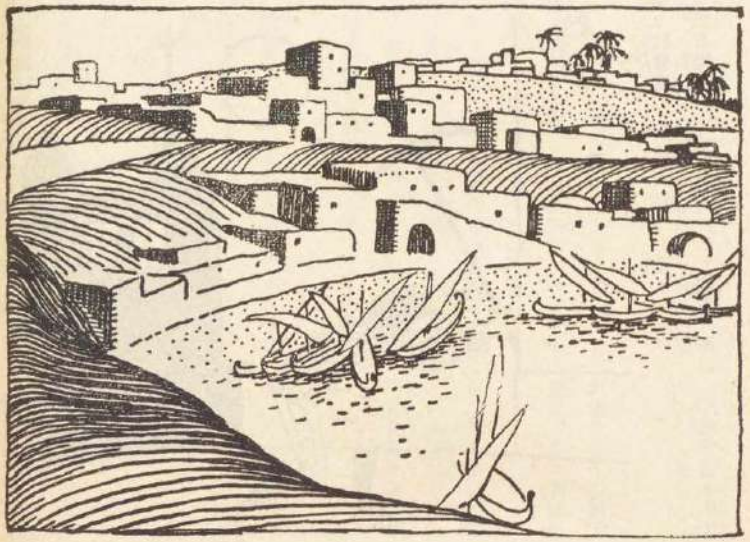
いよ〳〵滿月の夜が來ますといふと、村ぢうが眠てしまうのを待つて、ハンズは鶴嘴を持つて、教會堂へと入つて行きました。

壁の石を外しにかゝつて、いろ〳〵と骨折つた末に、たうとう石を首尾好く外してしまひましたが、成る程、石の下には穴があつて、穴のなかには、一寸法師が云つた通りの財寶が入つてをりました。

ハンズはそれを殘らず自分の部屋へ運んで置て、次の日曜になると、その財寶の三分の一を貧乏人たちに渡し、それから直ぐ牧師さんのところへ行つて、暇を貰ひ度いと云つたのです。

それまでの給金を欲しいとは云はなかつたので、牧師さんの方では、何にも云はずに直ぐ暇をくれました。

それで、ハンズは大きい家を買ひ、若い妻を娶つて、一生幸福な繁昌な暮しをしました。（をはり）



ハンニバルの話

楠山正雄

一

今から三千年の昔、まだエジプトの王國が榮えてゐた時分、ヨーロッパとアフリカの大陸をへだてゝ地中海の海岸にフエニキアといふ國がありました。國の中でも一ばん繁昌したタイアといふ市は當時では世界第一の商業地として有名なものでした。エジプトは勿論、地中海の島々、アラビアの内地にまでたくさんの船や駱駝隊を送つて盛んに貿易をいとなみました。

やがて彼等は諸處方々に植民地を創り初めました。そしてそれがまた追々母國にも劣らないほどの繁華な町になりました。するうちにアフリカの海岸にはカルタゴといふ町が出來ました。

はじめはディデオといふほんの一人の婦人が建てたものだと云ひ傳へられてゐますが、段々と美しい大きな町となり、つひにはシシリー島、イスパニヤ、サルヂニア等に植民地を創るほどになりました。

彼等は貿易を盛んにすると同時に、それでせつかく儲けた富を安全にするために強い軍隊を持つ必要がありました。彼等にとつてある時代には、ヨーロッパの古代に文化の一ばん進んでゐたギリシャの列國が、油斷することの出來ない強敵であつたこともありました。しかし紀元前第三世紀の末に、たうとう戰はその時ギリシャに代つてヨーロッパの最強國となつたローマとの間に開かれることになりました。

二

當時イタリヤの半島は、南の方には大ギリシャと呼ばれるギリシャ各國の植民地があり、北の方のポー河のあたりにはその時北方の野蠻人とよばれたゴール族が住ひ、中央には種種雜多の人種がローマ市の勢力に敵對するために聯盟を結んでゐたのです。しかし紀元前第三世紀にローマ市がいよ〳〵統一の事業に手をつけ出すと、この聯盟は忽ち破られ、ゴール人ギリシャ人は追ひ拂はれて、ルビコン河から南の全半島はすべてローマ市のチベル河にのぞむ七つの丘に貢ぎ物を捧げることとなつたのです。

國がさかんになるにつれて、ローマの貪慾も增して行きました。そしてまつ先にその眼に映つたものがその頃イスパニヤやシシリー島へ盛んに發展してゐるカルタゴでありました。この二つの國民はいやでも一いくさ戰はなければならない狀態におかれてあつたのです。で、ローマは陸軍にかけては天下に恐れるものはなかつたのですが、海の民であるカルタゴ人を征服するためにはぜひとも海軍の力を十分に養はなければなりませんでした。がそのためにといつて、船首の反り返つた大きな軍船も初めてつくり出されました。

いよ〳〵紀元前の二百六十三年に、ローマとカルタゴの兩市はシシリー島で戰ふことになりました。そしてローマは陸でも海でもカルタゴに勝ちました。ローマはそれにもあきたらないでレギュラスにヴルソーといふ二人の大將をやつて、アフリカ大陸におし渡り、カルタゴ本國を包圍してしまふやうにいひつけました。この時の軍隊は四萬人、それにアフリカの土地に着くと一しよに多くの屬國の援兵を加へることが出來て、なかなかの優勢になりました。カルタゴの市民は全くどうすることも出來ません。早速使節をやつて、ローマ軍に和睦を申出でましたが、きゝ入れられません。そしてつひ

にカルタゴは、全くローマ軍の手中のものとなつてしまひました。

ところがこのとき、ローマ本國からの命令によつてヴルソーは二萬四千の兵士をつれて歸り、あとにレギュラスがたゞ一萬六千の兵と共に殘つてゐましたが、カルタゴはザンチッパスといふ將軍をやつてレギュラスの油斷をつき、レギュラス初めローマ軍の大部分を捕虜にしてしまひました。

この勝利でカルタゴ人は急に心強くなりました。その上又シシリー島からもローマ軍は撃退されたといふ報せが來ると彼等の喜びは頂上に達しました。しかし惜しいことに、カルタゴにはもうこの上、國外にまで行つて戰ふ資力がなかつたのです。

三

その後十六年ほどしてカルタゴに一人の名將が現れました。ハミルカルといふまだ三十歳そこそこの若者でした。カルタゴの名家の一つに數へられる立派な家柄の出であつたにも拘らず、生來華美なことを好まないまじめな氣質の若者でした。

初めてのローマとの戰爭のとき、ハミルカルはまだ十四歳にすぎない子供でしたが、ローマを憎み、自分の國が受けた辱めに報いようとする熱情が燃え立つてゐました。ハミルカルにとつては船の數の少ないこと、兵士が訓練されてゐないことなどは問題ではありませんでした。たゞ不正な敵國の支配を受けることが重大な問題であつたのです。

ハミルカルは希望に充ちく〳〵た心で仕事をし始めました。そしておしまひには苦心の結果が現れて、無教育だつた傭兵も立派に訓練された兵隊となりました。

ハミルカルが初めてシシリー島で戰つたとき、ローマ軍は彼の巧妙な兵術でうまく〳〵包圍されてしまひました。もしこのとき相當の數の船さへあつたらイタリアに上陸し尚ほ進んでローマに攻入ることも恐らく出來たであらうと思ひますがカルタゴの人はそれだけの援助をしようとはしなかつたのです。そのうちにローマは擧國一致で、新しく二百艘からの艦隊を作り上げました。そして或日いきなりシシリー島の西海岸に現れて、カルタゴ軍を襲ひました。カルタゴ軍は破られて海軍は全滅しました。ハミルカルも仕方なく和睦しなければなりませんでした。そして過去四百年の間も持つてゐたシ

シリー島もローマに讓り、その上巨額の賠償金を支拂はねばなりませんでした。

この敗戰の結果失望しきつてゐるところにハミルカルは本國に起つた謀叛のために呼返されました。それからやつと三年目に鎭定することが出來たのです。

内亂が治まると、ハミルカルはイスパニヤに出かけました。それはローマのために蒙つた損害をこの方で補はうと考へたためでした。このときハミルカルは三人の子供をつれて行きました。一ばん上の子はハンニバルといつて、まだ九歳でした。出立するとき、ハミルカルはハンニバルを神殿の前につれて行つて、一つの誓を立てさせました。

『お前はまだ幼い子供ではあるが、今この父がいふことをよくお聽き。ローマは實に、にくんでもあまりのある國だ。われ〳〵の生れたカルタゴの國に、何のうらみもないのに二度三度と損害を與へ恥をかかした。お前はこの事をよく覺えてゐて、きつと成長してローマに復讐しなければならないぞ。』

その時少年は父の言葉を聞き終ると、ぢつと顏を見上げながら云ひました。

『おとうさま、私はきつと復讐します。』

その當時イスパニヤはまだ大半野蠻人の國でしたが、だんだんとハミルカルは討ち從へて行つて、八年の後にはその大半を平定しました。ハミルカルは忙しい中にも子供達を敎育する事は忘れませんでした。子供たちもよく父親のいふことを聞いて、一心に武力を練りました。槍を投げること、石を投げること、弓を射ること、すべてにずんずん上達して行きました。ところがハミルカルはその後土人と戰つて、斃れました。これはハンニバルの十九歲のときでありました。

ハンニバルは幼少の時から父親に從つて陣中にあつたから戰場の艱難には慣れてゐました。それに機會を見ることが巧みで、その戰術は智謀百出といふ風でしたし、大膽である一方常に細心でありました。彼は又政治上にも識見が高く、又文學にも嗜みが深かつたといふことです。人にむかつては至つて寬大で德望は行きわたつてゐました。父の死後彼はイスパニヤの總司令官になりましたが、その心には瞬時も、ローマ復讐のことは忘れることが出來ませんでした。兵力も軍資もほゞでき上がりました。ハンニバルは時機の來るのを心待ちに待あぐんでゐました。

勢力も領土も日々加つてゆくローマを不意に北の方から七萬のコール人が襲て來ました。擊退するために非常なる苦戰をした結果ローマはよほど弱つてゐた上に、油斷もあつたのでせう。ハンニバルにとつてこんな好機會はありませんでした。いよ〳〵復讐戰の火蓋は切られました。紀元前二百十八年カルタゴ軍は先づイスパニヤの地中海沿岸にあるローマの同盟市サグンツはを陷れました。

ハンニバルは數年來祕かに計畫をめぐらし、ローマ人が夢にも知らぬうちにローマへ進む途中の多くの野蠻族たちと同盟をむすんでおきました。さて歩兵九萬餘、騎兵一萬二千、象三十七頭からできてゐる遠征軍は四ヶ月の後、ピレネー山脈の麓につきました。彼はこゝで、新たに征服したこの地方を鎭めるため部將に一萬人を與へて殘し、また傭兵中の不熱心なもの二萬人を解雇して歸國させました。

ハンニバルの軍はピレネー山脈を難なく越してローヌ河に近づきました。その頃ローマの執政官スキピオはスペイン征討の途中でしたが、ハンニバルの軍勢がローヌ河に向つて進んでゐるといふしらせを受取りましたが、半分信ずる事が出來ませんでした。どうしてピレネーの山脈をやす〳〵越せるものではないと疑つてゐました。そして第二回の報道が第一回のことをいよ〳〵確かにしても、スキピオは尙信じきれませんでした。あたかもその時大雨があつて河は洪水になつてゐたので、この幅の廣い流れの急な河は、いかなる軍隊も越すことは出來なささうに思ひました。萬一それが出來てゐるとしても、その東の岸にはローマ方のガリヤ人が守つてゐるはずであるからと、スキピオはゆる〳〵と軍隊を上陸させ、それから斥候をやりました。萬一カルタゴ軍が本當に來てゐるとすると、それはどこに陣取つてゐるかをさぐらせました。

ローヌ河の岸についたハンニバルは、ちやうど渡らうとするその時、岸に無數のガリヤ人が集つてゐることを知つて、すぐ外の手段を考へました。

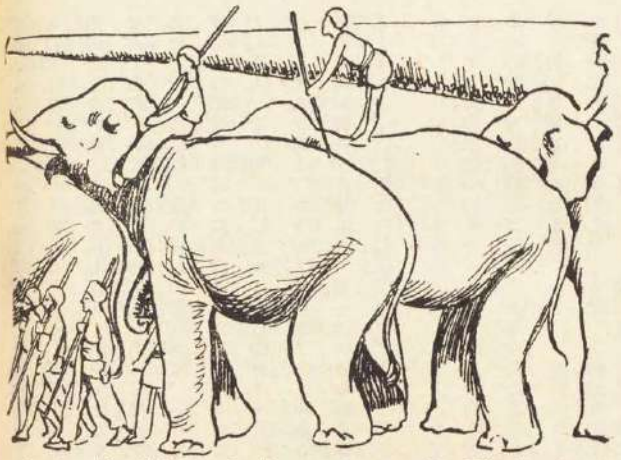
第一にハンニバルのしたことは、その地方の土民たちが貨物をつんで川下に下るときの獨木舟や小舟を全部高く買取つたことでした。が、初め土民たちはこの見馴れない軍隊を信じないで、なか〳〵承知しませんでしたが、後にはだん〳〵助力するやうになりました。その上もし必要なら案内役にならうかとさへ申出でました。自分たちの親切さを見せるためには、附近の森から木を切つて來て兵士一人一人に獨木舟を造つてやりなどしました。

河岸について三日目の夜、ハンニバルは部將ハンノに命じて一隊を率ゐてガリヤ人にさとられないやうに河を上らせ、ある案内者に敎つた渡し道のところにやつて來ました。その地方は淋しいところで、誰一人河を渡る兵隊を見とがめるものもありませんでした。翌朝にはもう全部對岸に渡つてゐました。ハンノたちはハンニバルが特に命じたやうにそこで休んで寢ました。ハンニバルはその部下の疲れてゐるときには決して戰はせなかつたのです。

夜明け前に、彼等は河岸を下へ下へと下つて行きました。その手には各々松明をもち、その一列の烟がハンニバル自身河を渡つてよいといふ合圖になつてゐたのです。

ハンニバル軍は全部準備をととのへました。急がずあわてず、てん〴〵の仕事をいひつけられたとほりやつてゐました。青銅の甲冑を着、長い槍をもつた重騎兵は、一番大きな舟に

乘りました。舟ごとに二人の者が艫のところに立つてゐて、舟のあとから泳いで來る三匹乃至四匹の馬の手綱を握つてゐました。かやうに多數の舟が一時に河を渡ちには餘程熟練した漕手でなくてはなりませんが、何一つ故障なく河を渡つたのでした。



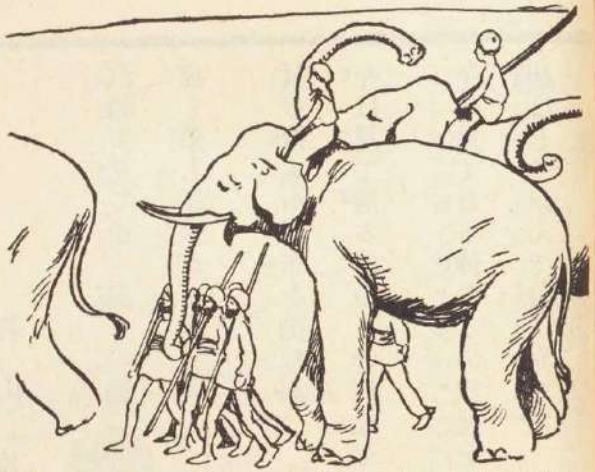
ガリヤ人はこれを見て、列を亂し爭ふて河岸に走りつけて來ましたが、カルタゴ人の河を渡つてくる勢に辟易して、一人として手出しするものがありませんでした。そこに背後からはまた突然ハンノ軍が現れたので、彼等は狼狽して逃去つてしまひました。

むかふ岸に無事上陸したハンニバルは軍營を作り、翌日の命令を與へました。ハンニバルの一ばん心配したことは、殘しておいた象をどうして河を渡すかといふことでした。象はたいへん水を恐ろしがる動物です。しかしハンニバルはしまひに考へつきました。五百のヌミヂア輕騎兵に河を下らせ、スキピオがどの位の軍勢を率ゐてゐるか、又乘つて來た船の大きさはどの位か、尙ほ出來ればスキピオの今後の計畫まで探つてくるやうに云ひつけました。

それから一方では特に象の取扱ひに馴れたものを招んで、ある命令を與へて今一度河を元の岸に渡らせました。象と共に殘つてゐた人々は、命令を受けて出來るだけ大急ぎで木を切つて丸太に造りました。そしてそれで幅五十尺からもある大筏をつくりました。それが出來上がるとそれらを岸につないでその上には芝土をおきました。それで恰かもその筏が陸地のやうに見えたのでした。そしてその筏は皆一列に水の中

に長くさし出されて岸から一番遠い筏だけがほんのちよつと結いであつただけでした。

かうして象をこの筏に乘せて綱が切れるとそのまゝ筏はだんだん岸を離れる



象は驚いて水の中に飛び込む、そして筏の横側で泳ぐ、それが象乘りの印度人に導かせようとしたのでした。

用意は出來ました。しかしハンニバルの本營から合圖が見えるまでは、渡り始めることは出來なかつたのです。

河を下つて行つたヌミヂア兵はローマ軍の先頭を見るところまで來ました。そのときスキピオの方からも偵察隊を出してゐましたが、つひにこの二隊は會合してはげしい戰を始めました。このときヌミヂア兵は、ハンニバルに命令されてゐた通り退却し始めました。スキピオの偵察隊はその後を追つて來る。たうとうカルタゴ軍の本隊の見えるところまで來ました。そこで偵察隊は引上げて行きました。そしてスキピオに、あの名高いヌミヂア騎兵を打破つたハンニバルが河を上つて進んでゐるといふことを復命しました。そこでスキピオはすぐと出發して、北へ北へと進み始めました。それはハンニバルの狙ひどおりになつたのです。

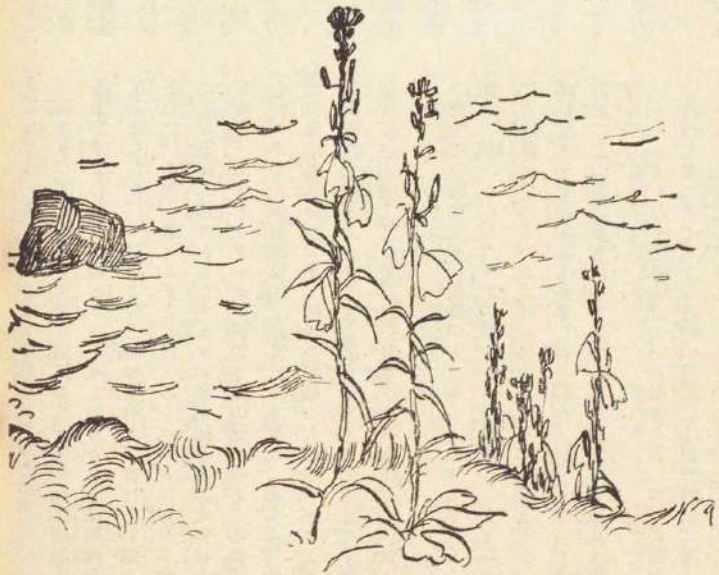
夜明頃合圖は對岸の象隊の方に爽へられました。そして皆揃つた時、よノ〳〵アルプス山の方へ出發することとなりました。計畫はすべてハンニバルの思ふ通りに運びました。氣遣はれた三十七頭の象も無事に渡り終へて、今ハンニバルの目の前にその長い鼻で空中をのたうちしながら鼻息荒く進軍を促すやうでした。

ハンニバルの遠征隊はいよいよ出發しました。必勝を期して追つて來たスキピオが目的の場所についた時は、もうカルタゴ軍は三日間の行軍をしたあとのことでした（つゞく）

向うの磯に

若山牧水

汽船で見てゆく向うの磯に
姉と弟と子供がゐるよ
貝を拾ふか若布を摘むか
今は見て居る沖のこの汽船を
今は見てゐる沖のこの汽船を
姉はしやがんで弟は立つて



ちいつと見てゐる沖のこの汽船を

土佐より（第二信）

講師　沖野岩三郎

沖野先生の四國の講演旅行は大成功で、高知市などではこれまでにこんな盛んな會はなかつたといはれました。この通信は前號の『土佐より』のつゞきです。

□廿四日に高知市の第三小學と土佐女學校で話したのがお名殘りに、直ちに神戸大阪へ來る筈でありましたが、赤岡町から是非と申されたので、廿五日は宿に引籠つて『金の星』へ送る原稿を書いて、同日の午後五時から自動車で赤岡町へ行く事にしました。これは武田徹意といふ可愛い子供さんの御手紙が私を主として引張つて行つたのでした。

□廿五日の午後七時から赤岡町の公會堂で童話についての講演を三時間に亘つて話しました。一里の遠き所から來られた方もありました。

□廿六日午前十時から、赤岡町と井本町との兩小學の上級生六百名にお話しをしました。武田徹意といふお子さんに逢つて見ると、尋常三年の女生でした。

午後一時から、城山高等小學、女子實業學校富家小學德王子小學、赤岡小學五校の生徒千餘名を集めて話しましたが、尋常科の初級生があつたので、最後の五分間を一寸縮がれましたが、それも直ぐ納まつて、無事に演了しました。それから豆自動車に乘つて高知市へ歸りました。

□十四日に幡多郡中村町へ着いてから十二間に十四回の講演をして壹萬五千三百人の大小人に話します間に病氣にかゝらず無事であつた事を喜びながら、廿七日には高知市から自動車で高知縣、德島縣、香川縣の三縣を横斷して、高松市に出ました大歩危小歩危の難所、猪の鼻峠の險路を幾度か險な冷しながら自動車で走つた事も、吉野川の急流に沿うて、驚嘆の眞盛りを眺めながら走つた事も、一生忘られない面白い事でした。

（高知市講演會場塀詰座に於ける沖野先生と出演の諸氏）

□廿八日は岡山市の山長旅館に一泊して岡山公園を見て、それから歸京の途につきました。今度の旅行は季候もよし、景色もよし、萬事が愉快でした。殊に高知市での集會が、同市空前の好集會であつた事は最も嬉しい事でした。

□到る處好意を以て歓迎された人々に厚く御禮を申上げます。

（みはり）

童謡

野口雨情選

〈大人篇〉

夜更けの櫻

千葉縣東金校　栗原　登

夜更けにチラチラ
散る花は
學校の
お庭の櫻花
夜更けにチラチラ
出る星は
學校の
お屋根の七つ星
チラチラ小さな櫻花
夜更けのお庭で
星見てる
チラチラ小さなお星樣
夜更のお空で
花見てる。

風鈴

長野縣平根村　糊澤　粹花

風に搖られて風鈴が
チンチロリンと
なつて居る
庭を掃いてる和尚さんは
箒を立て、
聞いて居た
風に搖られて風鈴が
チンチロリンと
なつて居た。

螢

仙臺市大町　北野　牧夫

螢のうちでは
豆ランプつけた
螢のおうちは
お池のほとり。
螢の
子供も
豆ランプさけて
よつゆを
さがしに
でかけていつた。

さよなら

東京市北山伏町　金原　五郎

私は遠くへまゐります
さよならさよならさようなら
村のはづれに來た時に
紅色けんけがきいてゐた
山の麓に日がくれて
村には白い煙が立つ
父と母とにつれられて
私はさよならさようなら

螢さん

靜岡縣東濃名村　石原　半次

ピーカリピカリ螢さん
月のない夜鬼ごつこ
ピカリと光つて逃げ廻る
ピカリと光つて追つかける
それ〳〵あぶない大螢さん
急いで私の影にこい。

一輪車

奈良縣中畠校天　宇野　雄二

ギイ〳〵　ギイ〳〵
一輪車
れんがを積んで
どこへ行く
一すぢ道を
押して行く
ギイ〳〵　ギイ〳〵
一輪車。

馬と雀

山梨縣大月町　梅本　竹子

馬がわらをたべてゐる
わらはをけから
こぼれ出た
村の小雀
おひる前

お馬はやさしい
おこらない
小雀早くよつといで
みんなで仲よく
たべようよ。

菜の花

東京市 稚乳山校　長田　六郎

なん〳〵菜の花
菜畠に
黄色い小供の蝶々が
二人でコソ〳〵話してる
お花見に行く
相談よ。

日向ぼつこ

和歌山縣 馬ヶ谷町　津村　正雄

柚の小枝に
兵隊蜘蛛が
日向ぼつこをしてしまつた。

おけら

仙臺市 立町　明戸　聡

おみやけどつさり
もつてごぜ
お國はどこだね
行つてごぜ
夕日の畑だ
もつくりしよ
おけらおばさま
もつくりしよ。

ブンブン藪蚊

群馬縣 館川村　青柳　花明

お春戸の藪の
暗からブンブ
ブンブン藪蚊が
飛んで來る。

小山羊

仙臺市北 目町通　西街　赫四

小山羊が堤で
遊んでた
草ばがゆれたら
草ばをみてた
おひけがゆれたら
おひけをみてた

（小供篇）

朝

岐阜縣 本庄校　杉本　藤一

てか〳〵てつかり
黒かべに
てか〳〵てつかり
お日樣が
てか〳〵てつかり
うつてる。

いたち

京都府 三重校　糸井　保之

あられ降る夜に
啼くいたち
せどの方で
啼くいたち
きた〳〵〳〵
啼くいたち
何が來たのか
啼くいたち。

すまうとり草

廣島縣 宇村小學校　神宮　司明

すまうとり草の
かみのけむすんで
ひつかけてやつて
エンヤラヤット
ひいたれば
あひての頭が
飛んだよ飛んだよ。

雀

青森縣 八戸町　西川　良三

うらの竹やぶやけたとて
雀がたくさん鳴いてゐる
ちゆん〳〵〳〵鳴いてゐた
赤い夕日の日がくれる。

山のふもとの木

香川縣 赤田校　十河クニエ

山のふもとの
葉のない林
林は
霞の樣に見える。

松の木

山の上の松の木は
さびし淋しと風を呼ぶ
小さな山へ風を呼ぶ。

にはか雨

滋賀縣 長野町　神崎みのる

にはか雨が
やつて來た！
蛙啼けく〳〵
きのこが
伸びる。

小馬

山形縣 袖崎校　大泉みん子

燕は早いが
風なほ早い
けれども稲妻
まだ早い
燕とぶより風よりも
稲妻よりもなほ早く
かけ〳〵小馬よ
學校まで。

荒川で

東京市 尾張町　津久井　圓

五色の櫻荒川で
花のとんねる
くぐります
くぐりぬけては
うへをみて
花のとんねる
くぐります。

電信柱

千葉縣 手賀校　須藤　薫

電信柱は
さむいだろ
雨の降る日も
まるはだか
朝からばんまで
たちどうし
雀と遊んで
日が暮れる。

シャボン玉

實踐市 ケ谷　伊藤登良男

まーるいまーるい
シャボン玉
十五夜お月さんより
まーるいよ
おホきいおホきい
シャボン玉
十五夜お月さんより
おホきいよ。

花曇り

茨城縣 立高校　樋下　嘉七

今日はお曇り
花曇り
お花の中で
お日樣が
お酒上つて
アカイ顔。

鳥のけんくわ

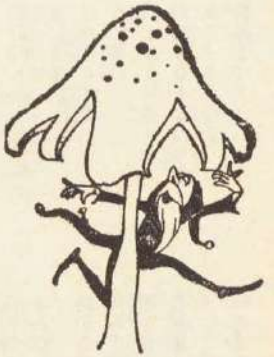
岡島縣 郡山校　今泉　仁藏

チッチヤイ
とつとはかはいさう
とつとはにくらしい
とつとととつとが
けんくわした
羽をたいて
けんくわした。

ほとゝぎす

石川縣 堀川町　小田しけゆき

青葉の山の
ほとゝぎす
こつそり鳴いたが
きゝました
何里あるやら
峠道
石ころけりけり
ゆきませう
峠こえたら白かべの
家の土藏も
見えませう
青葉の山の
ほとゝぎす
こつそり鳴いたが
きゝました。



幼年詩

若山牧水選

父さん待つ夜（賞）

新潟縣中頸城郡妙高校尋六　平塚テイ

母ちやんもうねようぢやないか
父さんのかへりはまだとうぶん
きつと父さんはとまるでしよ
母ちやん早くねようぢやないか。

評、さうともく、おやすみなさい、可愛いゝおていさん。（牧水）

魚つり（賞）

愛知縣海部郡西郡校尋六　鳥居賢二

靜まつた木の間から
魚つりが二三人
話しながら
出て來た。

評、夕暮の靜かな景色がよく寫生出來ました。（牧水）

心（賞）

山形縣山邊校尋四　笠原イシ

木や鳥にも
花にも
にんげんと
おなじに
心があるでせう。

評、ありますともく、よく可愛がつておあげなさい。（牧水）

おん鳥

東京小石川金富校尋二　小田晫

おん鳥が
足でめゝすをふみつけて
めんどりこいと

綴方

編輯部選

川に流された櫻（賞）

千葉縣東金校尋四　玉井美緒

或夕方庭をはいてゐますと、ちらく〜とさくらがちつて來ました。私はぢつと見て居ましたが、ふと思ひついて家の中へ急いで入つて、糸と針を持つて來て櫻をとうしました。櫻の花はあひかはらずちつて來ました。とうしきれたのでそれをもつておもてへ行きますと、名取さんのふみちやんがゐたので一しよにあそんでゐました。私は何だか川にながしたくなりましたので『ながして見ませうか』と言ふと、ふみちやんは私にちやうだいと言つたのであげましたら、ふみちやんは何を思つたか、櫻の花を取つてひらひらと川におとしました。すると櫻はひらひらと川におちました。そして靜かにながれて行きました。私もしたくなつたので家の入口のよこちよまで行きますと、どぶに小さな板ぎれが落てゐました。私は又かんがへました。櫻の花を水へ入れるとつめたいだらうと思つたから、その板の上にのせてながしてやらうと思つて、板をひろつて庭の所まで行きますと、ちやうどふねのかつかうをしたはつぱがおちて居ましたから、ちやうどいゝと思つてひろひました。花もひろつてゐましたが、何だか櫻の花が私にも乘て下さいと言つてゐるやうな氣持ちがしましたから、私は心で又いつかのせて上げますと言つてゐました。みんな持つて又おもてへ行きますと、もうふみちやんは居ませんでした。私はひとりで靜に板を下しました。すると又櫻たちはさやうならと首をさけるやうな氣がしました。私もしらずく〜さやうならと首がさがりました。もう船はゐんりよなくうごきだしました。すると佐久間ゆきちやんが何をしてゐるのと言つて出て來ましたから、そのことを話しましたら、ゆきちやんは『私今日櫻をたもとに入れたと思ふ。』といつてたもとに手を入れましたら、四りんぐらゐついて出て來ました。ゆきちやんはすぐそばにあつた小さい板を取つてその櫻をのせた。板はしづかにながれました。どうしたのか、くつ屋のはしの下まで來たら、ゆきちやんの板はながれて來ません。どうしたのでせう。だけれど私のはあひ變らず靜かにながれてゐました。あくる日おきて見ますと、雨が降つてゐました。私は思ひました。『あゝもうあの櫻は雨にうたれてしづんだでせう。』と心ほそくなりましたが、あの板はぶじに海についたと思ひます。

植木鉢（賞）

小石川區内江戸町九　湊守一

別れた友に（賞）

三葉縣安房郡平郡校高二　若林芳雄

君はもう中學生になつたのですね。あのかーき色の洋服を着る中學生に。僕はほんたうに羨しいのです。『君は中學生……俺は小學生。』僕が時々こんな事を考へると、自分が一人捨てにされた樣な氣がするのです。大きくなつた頃、君が洋服でも着て髭をはやし、ステッキを杖いてゐる有樣と、僕が眞黑な手拭で頬冠りをし、どろだらけの着物を着て田を耕してゐる有樣とを想像すると、自分がなさけなく思はれて君が羨しいのです。君が行つてからと云ふものは、僕はほんとに淋しいのです。皆の者の樣に面白く遊べないのです。櫻の花は咲いても、白楊の若葉が銀色に光つても、し

よんでゐる。

評、ナントととくいなおんどりさん。（牧水）

長い道

東京市淺草淺草田原校　山下好一

長い〳〵道が
遠くの方までいつてゐる
どこまで達足するのか。

評、山下君、君は少々勞れたナ。（牧水）

空

長野縣飯田追手町　山田照華

見渡すかぎり青々とした大空は
一點の曇りも無くすんでゐる
西の方がくらくなつて來て雨が
晴れると太陽が西の山にしづむ時がくる
西の空は明るくて東の空はくらい
西の空もくらくなつて來た
やがて宵の明星がかがやく。

評、北原白秋白島省吾だつてかう堂々とは作れない。（牧水）

雀

香川縣木田郡水田校尋五　和田龜太郎

雀が木の枝で
友達くるのを
まつてゐた。

評、來うないのでとんでつた。（牧水）

つくゑ

香川縣木田郡水田校尋五　佐藤清子

たつ子さんの
つくゑの上が
あをじろく
光つてゐる。

くぬぎの木

香川縣木田郡水田校尋五　武田達子

學校えんの中の
一本のくぬぎ
二年の宝に
かげがうつつてゐる。

白い紙

香川縣木田郡水田校尋五　一宮ヒサエ

どみや、海棠が赤い花を咲かせても、やつぱり淋しいのです。君が懐しいのです。僕は毎日々々別れた君を思ひながら長い長いそしてたいくつな晝の遊歩時間をすごさねばならぬのです。君が合格だと聞いて僕は大そう喜びました。しかし、その喜びは一寸の間でした。『もう君と一しよに遊んだり勉強したりする事は出來ない。』かう思つた時、僕の胸は一つぱいでした。その夜は悲しい空想に耽り時々眼を拭ひました。あくる日は日曜でした。『山に行け。』と云ふ父の云ひつけに何となく氣がむかなかつたけれども　のそのそと出て行つた。路の兩端の田は水が一つぱいで、瓦屋根の樣な波が立つてゐた。その中にちらちらとうつる自分の顏を見つめながら、君の事を思ひ出した。又自分を中學校へやつてくれない父を腹立たしく思つた。それからそれへと考へこむうち、いつか山路に差しかゝつてゐた。兩側には、いちごや、やまぶきの花が咲いて綺麗でした。えんや〳〵と坂路を上つて行つた時、すみれや、たんぽぽの花から、蝶々が飛出した時など、ほんとに疲など忘れてしまひました。やうやく小高い所へ上りつめた時、何んとも云へない愉快さを感じました。今まで自分が何故百姓をいやに思つたのかとさへ思はれました。僕は百姓になるのです。君は立派な學者になつてくれ給へ。さやうなら。

お辨當

千葉縣山武郡東金校尋六　安田栄子

友だちといつしよに話をしながら、家へ來た。店へ來たら、お客樣が澤山ゐた。お母さんは頬を赤くしながら店の事をしてた。兄さん達も店へ來てすけてた。門を通つて行かうとしたら馬が四匹頭をならべてゐた。私はおつかんなくてしようがない。もぢ〳〵してたが、おそくなるといけないと思つたので、ドン〳〵〳〵とかけて、玄關へ行かうとした。そのはずみにすべくつて下駄を庭へふつとばしてしまつて、たびはだしになつてしまつた。すばやく下駄をはいて、家の中へはひつた。そしたら、どこかの人が三人むき合つて、話をしてた。麵を買ひに來た人でせう。一人の年とつた人が、酒どつくりを、下げてきて『すみませんが、ちよつと、とつくりをかして下さい。』と言つた。『はい今すぐに、あげます。』とお家さんが言つた。戸棚の中から出して四人の前へ出した。さつそく、お酒を、つぎはじめた。西の方にゐた人が、一番の人だ。それでも、頬を赤くしなかつた。『あの今におさいを、上げますから。』『は、どうも、ありがたう。ござんす。』と四人が聲そろへて、調子よく言つた。その内に目ざしが燒けた。大きなお皿へ目ざしを、澤山出した。『すゐぶん、いゝ味ですな。いくらでしたかい。』『これは、ばまから、もらつたですよ。』『目ざしは、どの位でせうかね。』『すゐぶん、下げたさうですよ。』『私は目ざしは、大すきでがすよ』などと、色々な話をしてた。私は、御飯をすまして、どん〳〵かけて、玄關の所で、下駄をはいて行かうとした。馬がゐた。私は、さも東京の人の樣にして行けば、行かれるのにわざ〳〵店へまはつた。そして、鶴澤さんを、さそつて學校へ行つた。

家と木（賞）　千葉縣東金校尋四　三浦美根子

大根

岐阜縣稻葉郡本莊校尋六　小川新市

俺がおつ母あと、骨折つてはさにかけておいた大根めが、この三四日のひどいかんじで凍て、ぼやぼやになりやがつた。俺とおつ母あはこら凍てやがるぞと思つたので、むしろをかぶしておいた。けれどもやつぱりあかなんだ。風めが入つて來ていかなんだ。おつ母あは『今年はうまい大根がくへないやつになつてしまふ。』といつた。それで俺は『たわけらしい、

尋等二年の教室から
白い紙がばらく〳〵おちて
下でまつてゐた。

ひばり

香山縣木田郡
氷上校尋五　鈴木薫

青い空から
小さなひばりが
石の樣に落ちてくる。

すみれ

香川縣木田郡
氷上校尋五　高橋德義

石がけの上に
紫色の
すみれ一つ
さいてゐる。

鷗

東京　秋葉かね子

鷗、鷗が遊びに
來たよ
母さんに
連れられて
大川　ばた
越して
鷗、鷗が遊びに
來たよ。

かれた木

愛知縣海部郡
西部校尋六　安井初清

かれた木の中
虫がなく。

馬車

山梨縣多
麻校尋六　清水五郎

夜中に
馬車が來た
がたく〳〵と
村中に音がする。

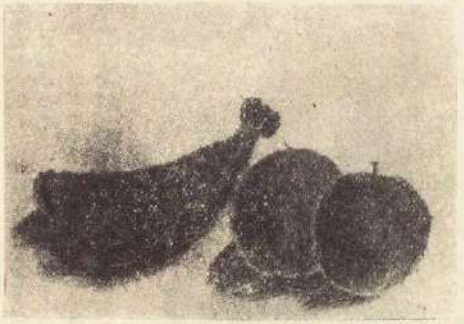
春の景色

不明　川上ふさ子

山も綠　空も綠
山につづく空の綠

リンゴとバナナ

七種カネヲ



そうおこつて、大根に穴をあけると食べられせんやうになつてしまふわい馬鹿。』と叱つたら弟めは『今でも食べられぜんに。』と又二つ三つ突きさいた。俺はいま〳〵しいから話してやつた。おつ母あはは、うまく怒つた。弟めをびしやん〳〵とほうきでぶつた。その時俺は一寸かはいさうだなんと思つたが、弟めが白い眼で俺をにらむのを見たら又ど鬪ちやと思つた。ところがたうとう泣き出した。俺はかはいさうになつて『あんならだまつておつたればよかつたに。』と後悔した。

四月一日のだまかし日

朝鮮釜山室水町釜
山第二公立校尋五　鈴木てるヒ

四月一日はどんなにうそをついてもよい日だとだれとはなしに聞きつたへたので、私は早く四月一日が來ればいゝがとまつてゐた。三月の月末から明日はお姉さんをだまかしてやらう、お父さんもだましてやらうと思ひながら何かいゝことはないかしらと考へたけれどいゝ材料がないのでお母さんに聞きにいつた。お母さんもだれかをだまさうとしてゐたのかすぐに教へて下さつた。母『お姉さんにはお晝になつてから川崎さんところで御ちそうをするから是非おいで下さいといひなさい。私『それから、父さんには。』母『伊藤さんとこへどなたからか電話ですと。』私『ありがたう。明日はうまくだましてやりませう。』

いよ〳〵四月一日がきた。さあお姉さんをだまかしてやらうと思つてお姉さんの所へ行くと、お姉さんはちやんと知つてゐるのでしくぢつた。お父さんはお晝になつてからだましてやらうと思つて朝のうちはだまつてゐた。教會がすんでおざしきへかへつていらつしやつたので、私『お父さん伊東さんとこへどなたからか電話ですよ。』と言ひますとお父さんはしらんふりしていくのでなほこゝぞと出して、私『お父さん電話ですよ。』父『こまつたれ、今東京からお客さんだからだれか、かはつていつてくれ。』私『今日は四月一日のだまかし日よ。』父『ハヽヽヽヽほんたうにだまされつてしまつたよ。』母『照ちやんがもすこしだまつてゐるとよかつたのに。』私『それでもほんたうにいきなさるとお氣の毒よ。』お客さんもお母さんもお姉さんもうち中大笑ひでした。

栗原先生　千葉縣夏
金尋校五　鈴木一郎

逢つた人

東京市牛込區
東榎町二〇　南須原靜也
（十歳）

向ふから來た人の顏が何だか見覺えのあるやうな氣がする。『誰だつたかしら？　何だか見た事があるやうだが。』と思ひながらすれちがつてからやう〳〵思ひ出した。それは小學校の時の唱歌の先生だつた。思ひ出すと同時に、僕は何んだか非常にすまないやうな氣がした。先生は何とお思ひになつだらう。學校にゐる時は教はつておきながら卒業してしまふとあつても知

空につゞく山の緑。

ひけ時

東京市牛込區東榎町　南須原靜也

學校の生徒が
門からあふれる樣に
出て來る。

隣りの鶏

東京淀橋柏木一一一九　宮岡雅秀

隣りの鶏をかしいな
何んにもいはずにやつて來て
右みて左みてちよいとにげた。

狐火

德島　南秋夫

裏の榎に狐火が
風の吹く晩
飛んで出た
誰も出て來て見ないので
つまらなさうに
消えちやつた。

ひばり

東京市外杉並村天沼龍音寺　鈴木正二

青空をあがりおりするひばり
毎日そんなにとびたいか
おまへが空にゐるうちは
おまへの子供がどんなにさびしかろ。

田舍道

横濱市北方町四〇一　久保廣一

牛車が行つて
自轉車が行つて
百姓が行つて
田舍の道は
日が暮れた。

からす

千葉縣東金校尋二　片岡美津江

山のおくが
大かぜで
からすが一びき
とびだした

リンゴ

横濱市東神奈川横濱校尋六　金子多代子

お湯屋で

神奈川縣横濱市本町校尋六　松井清松

昨日の夜『お湯に行つておいで。』と言はれたので、光ちやんと二人で前のお湯屋に行つた。お金をはらつてお湯の中にそうつと入つて手ぬぐいで顔を一べん流してうんとあつたまつて板の間に出た。足や手から湯氣がほつほと出てゐた。不意に『がら〳〵〳〵。』と音がしたのでひよつと見ると四十五六の人が入つて來て、をけ見つけて、からだをながしお湯の中に入つて、いい氣持になつたのだらう歌をうたひだした。番頭さんが來た。まだうたつてゐる。僕等は顔を見合せてにつこり笑つて出た。その人も出て家に歸つた。僕ばその人が居なくなると、何だかさびしくなつてだまつてゐた。又かすかにうたが聞えてだんだんきえるやうに聞えなくなつた。

犬

東京瀧野川富士前校　泉澤マサエ

私の内にはろびといふ犬がゐた。四月四日にしんでしまつた。まだいきてゐたじぶんは毎朝ふん〳〵とはなをならして外へ出たがつた。今でもさびしくなるとろびのなきごゑがきこえるのでいつて見るときもたび〳〵あるがろびのすがたは見えない。私はこのごろではろびの事をあまりおもはないが、四月四日ごろはろびの事が思ひだされてならない。ろびは私のだいすきな犬である。もうこのよではろびにあはれないかと思ふとかなしくなることもある。こんどは赤といふ犬が又ゐるかもしれないだと思つてかはいがつてやつてゐる。

けんくわ

東京府下蒲田町御園十九尋四　八ッ代春雄

私は兄さんとけんくわをするとぢきに泣かされてしまひます。今日も私が火鉢であたつて居たら、兄さんが來て私の事をからかつて行かうとしました。私は口惜しく成つて兄さんの足をくひつきました。すると兄さんが私の事を足でけ飛ばしました。その時、倒れるひやうしに火鉢のかどへぶつかりました。いたくてたうとう泣いてしまひました。其處へお母さんが來て私をほつぺたを打たれてしまひました。兄さんも一つ背中を打たれた樣でした。

魚釣り

栃木縣栃木第一校尋五　君島八智郎

暖い春の日を浴びて魚釣をした。釣針にゑさをつけて糸をたれた。間もなくうきがピクピク動き出したので、僕はうきの方を一心に見守りながら『浩ちやん〳〵うきが動き出したよ。』といふと『魚なんてものはゐさうもない所に居るものだなあ。』といつたので僕は苦笑ひをした。こんなことが五六度あつたが一尾も釣れなかつた。

お父さん

小石川區高田老松町　タカギクニコ

自由畫選評

山本鼎

藤の花も、つゝじの花も散りつくして、やたらに眠むたい初夏となりました。

一年中で緑の一番美しい季節です。澄んでそのくせ居ねむりでもして居るやうにどんよりとした空は、其空よりも明るい杜頭が見える、あれは椎の木の新芽です。――新芽は花のやうです。花よりも時に美しく見える。そして實は千差萬別です。

諸君は、此緑の季節なのがさないやうにおしなさい。緑の美しさを思ふさま描いて見なさい。

×

△鈴木一郎君の『栗原先生』しつかりした運筆がよろしい。姿のくせもよくつかんでゐるらしいけれど、蛙の干物のやうだ。

△金子多代子さんの『帯物』木炭紙の肌目が目立つて、調子が落つかない。それからパッタに用ゐてある紫色が不調和だ。果物はそれぞれよく描けて居ました。かういふ描き方の繪ほもつと肌目の細い紙を用ゐた方がよい。

△七種カネチさんの『りんごとバナナ』程當で可愛い繪だ。

△タカキクニコさんの『お父さん』のびゝとかけて居ていゝ。かういふすべつこい紙よりも藁判紙を用ゐた方がよいでせう。其方が墨色がよいだらうし、安くもある。

△湊守一君の『植木鉢』てゐねいに見て描いた佳い繪だ。形もよく見てあるし色も美しい。ただ緑側のあたりがぼんやりして居る。樹木鉢がしつかりかけて居ないからだ。

△三浦美枝子さんの『家と子』こせつかない佳い繪だ。色のトオンも美しい。(五月十一日)

幼年詩選評

若山牧水

▲今度は佳い寫生の歌がたくさんあつた。たとへば入賞になつた鳥居賢二君、香川縣水田校と氷上校の佐藤清子、武田達子、一宮ヒサさんたちや鈴木薫、高橋懋義君たちのがみなさうだ。

▲見たまゝのことを歌にしたのだが、それがいかにも繪も及ばないほどの美しい歌になつてゐる。

▲幼年詩はいつも云ふ通り子供のうたふ歌である。だから子供らしいみづゝしさ柔かさ自由さがなくてはならぬ。右にあげた寫生の歌にしろいかにも子供らしい柔かさを持つた寫生となつてゐる。それと同じに調ほゝ『ころもちの寫生』ともいふべき自分の心持をそのまゝに畝つたものにも同じくその柔かさ自由さの出てゐるのは誠に心地よく眺められる。今月號の平塚チイさんや笹原イシさん小田晩君たちのが卽ちそれである。かういふ調子のものは子供自身でなくてはなか〳〵出來ないものである。形だけは出來てもその調子の中に聲いてゐる『自然さ』が出て來ないのだ。さういふ意味に於て私はこれらの歌をまことに尊くおもふ。

▲六月號八十八頁に誤植があつた。『山の小鳥』といふのゝ眞先さの一行、

雨が水になりました

とあるのは、

雨が氷になりました

がほんたうで、そしてすぐ

お山が氷になりました

に續くのでした。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

△毎月二篇か三篇は必ずすぐれた作がありまして、それを見出した時選する者にとつては實にうれしいです。あゝ今月もよかつたと何ともいへない喜びにうたれます。この月も澤山の佳作の中から『川に流された櫻』『別れた友に』の二篇を見出すことが出來てうれしかつたのです。

▽千葉東金校の生徒さん達の作品はいづれものび〳〵と思ふさま自由に書いてあるところが、氣持ちよく讀ませます。ちつともイヂケタところがなくしかも大膽にぐん〳〵書いて行くところが本當にいゝと思はせます。中でも賞に入つた玉井美緒さんの『川に流された櫻』は目をひきました。詩人らしい感じ方には深味があつて讀む者に感動を與へます。櫻の花ビラが命あるものゝやうに、水に入れたらさぞめたいだらうと思つたり、川に流して貰ひたいと言つてあるやうだと感じたりするその心持ちは實に尊いものです。かういふ心持ちを無くさずにゐたら、いつでも立派な綴方が出來るに相違ありません。いゝ綴方が出來るのには、たゞ巧く書かうとしたつてなか〳〵出來るものぢやありません。先づ第一には物を見たり聞いたりしてそれに深く感じる事の出來る心をつくる事が第一なのです。

玉井さんの『川に流された櫻』など其のいい例です。尙、同じ學校の葛岡はるゑさんの『うれしい』飯田富枝さんの『花見に行つた時』北村房江さんの『初雪』市來千代子さんの『雪』中田ダイさんの『神樣づばき』などいづれもいゝ作でした。

▽若林芳雄さんの『別れた友に』はいゝ文でした。感激にみちたものでした。作者がある大きな機會にふれて受けた感じだけに强い力を持つてゐるはずです。しかも、その感じた事をかざらずに投出すやうに書いてゐる君の如く丘に上がらうではありませんか。そして、遠く廣い世界を眺めようではありませんか。

▽安田來子さんの『お辨當』はよく正午頃の家の有樣をうつしてゐます。大層上手にかけてゐます。

▽小川新市さんの『大根』はふき出させるやうな面白いところがあります。方言で書いてあるだけに東京者の私などにはわからない處もあるが、しかし、日常の言葉だけに其の時の氣持ちがよく出てゐます。弟が大根に穴をあけてお母さんにはうきでたゝかれるところが最も大出來でした。

▽鈴木てるよさんの『四月一日のだまかし日』は上手な作ですが、さら〳〵と樂に書き過ぎてゐるせいか、少しあつけない樣にも思はれました。姉さんをだますところはもう少し、しつかり書くと面白くなります。しかし、お父さんをだます處は上出來です。

▽南須原静也さんの『迷つた人』は昔の先生に途中で行合つた時の心持ちを書いたものですが、その時の心持ちはこみ入つたものだけに言ひつくせてゐないやうに思ひます。作者の『金の星』誌友の創作募集

『金の星』は毎月童謠、童話、及兒童創作の研究と誌友の機關とを兼ね毎月『小馬』を發行いたして居ります。就ては下記の規定に從ひ、特に『金の星』誌友の方々の創作研究を募集いたしてゐます。どうぞ苦心のお作を御投稿下さい。

□規定……ば凡て『金の星』の創作募集と同樣です。但し原稿には必ず『小馬』原稿とお記し下さい。

□童謠
□幼年詩……野口雨情選
□自由畫……岡本歸一選
□童話
□綴方……齋藤佐次郎選
□兒童の研究、論說、隨筆……編輯部選
□締切……毎月廿五日

も恐らくさう思ふでせう。

▽杉井清松さんの『お湯屋で』と泉澤アサエさんの『犬』は共にすなほな作ですが、もう一層努力してもつといゝものを書いて下さい。八ッ代奈雄さんの『けんくわ』は無邪氣で大變に面白いものです。しかし奈雄さんにお願ひしますが、どうか兄さんに食ひつかないやうにして下さいね。また兄さんにケトバサレたり、お母さんにほつぺたをたゝかれるといけませんからね。

▽君島八智郎さんの『猫』など平凡ではあるが、中にちよい〳〵面白いところがあります。

▽この外に大層いゝ作ですが、誌面がなくてのせられなかつたものに野村蝶さんの『四月馬鹿』山田さんの『毛虫』東野禮喜さんの『我が學校』などがあります。

『魚釣り』や橋川フヂさで行くので、讀者にとつてはいゝ氣持ちに聞いてゐることが出來ます。材料のためもありませうが、荒〳〵ほくてしんみりした味が乏しいだけ、藝術味が足りないやうな感も與へますが、しかし、藝術々々といつてわけのわからない妙チキリンなもの（本當は非藝術的なもの）より遙かに氣持ちがいゝです。輕爽してゐる落語や講談の中に、却つて豐かな藝術がひそんでゐる事を感じさせられた場合がたびたびあります。

◇土橋力さんの『花咲か』も目をひきました。

◇今月は優れた作の少い月でした。先づ八ッ代奈村さんの『彦四郎狐』が目につきました。話のタネは何か講談にでもあるものなのでせうが、面白い話を樂々と書いて筋をはこんで行くので、讀者にとつてはいゝ氣持ちに聞いてゐることが出來ます。材料のためもありませうが、荒〳〵ほくてしんみりした味が乏しいだけ、藝術味が足りないやうな感も與へますが、しかし、藝術々々といつてわけのわからない妙チキリンなもの（本當は非藝術的なもの）より遙かに氣持ちがいゝです。輕爽してゐる落語や講談の中に、却つて豐かな藝術がひそんでゐる事を感じさせられた場合がたびたびあります。

◇土橋力さんの『花咲か』も目をひきました。

◇久米元一さんの『鐘撞き三平』は面白いもので、よく書けてもゐます。しびて難ないへばお話に新味がなく、よくある話だと思ほせるのが損なことです。

◇原素穂さんの『泥棒除け〳〵念佛』これもよくある話だと思ほせるものです。有名なお話であるだけ、しかも、そのお話程構想が到つてゐないだけ損です。

◇新井青一さんの作ほどれも靜かなしんみりとしたものばかりで、傾向もよく、作者の態度も非常にいゝものだと思ほます。その代り〳〵話しにちつともヤマがなく、おとなし過ぎることがどうも物足りないのです。この處御一考をねがひたい。

◇少年少女の自作童話の方では山本秀夫さんの『肉泥棒』關地禮子さんの『娘の言葉』若柳小學校生徒さん達の作などが最も興味をひきました。

中でも若柳校の生徒さん達の作ほ、何れも本當の自作童話で、在來のお話から材料をちつともとつてゐないだけ、小供の無邪氣な生活がよく出てゐて、讀む者に非常に深い興味を與へました。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典がございますが、先づ第一に童謠童話及兒童創作の研究雜誌『小馬』に毎月投稿の特權があります。尚この外にもいろ〳〵の御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り申上げます。

しかし、この作を讀んで感じたことは土橋さんは創作をするのに苦んでゐるのだといふことを思ひました。以前の土橋さんは書かうと思ふことを氣輕に樂々と書いてゐました。それだけにどれも仲々鮮明に印象深く書けてゐました。しかし、土橋さんはそれから尙一歩進んだ爲に自分の進む足許がわからなくつて來たのぢやないでせうか。今書かれるものは、いゝくらひ處を持つてゐながら、ほやけてゐるのです。これは足許が暗くなつた爲めでせう。しかし、どん〳〵お進みなさいまし。今後ほ是よりも一層ひろ〳〵とした世界へ出られるでせうから。

◇新井青一さんの作ほどれも靜かなしんみりとしたものばかりで、傾向もよく、作者の態度も非常にいゝものだと思ほます。その代り〳〵話しにちつともヤマがなく、おとなし過ぎることがどうも物足りないのです。この處御一考をねがひたい。

◇少年少女の自作童話の方では山本秀夫さんの『肉泥棒』關地禮子さんの『娘の言葉』若柳小學校生徒さん達の作などが最も興味をひきました。

中でも若柳校の生徒さん達の作ほ、何れも本當の自作童話で、在來のお話から材料をちつともとつてゐないだけ、小供の無邪氣な生活がよく出てゐて、讀む者に非常に深い興味

童話の選後に

齋藤佐次郎

編輯室より

▽皆樣から大好評をもつて迎へられてゐります沖野先生の傑作『鉢栗山』は毎號附錄として添へてなりましたが、愛讀者の一部の方からどうもなくなりやすくて困るといふお話を聞いてなります。

また本屋でお買ひになる時、時々なくなつてゐることがあるさうです。そこで本屋の番頭さんにききたゞして見ますと、『いえ、來る時には確かに本にはさまつて來るのですがどうも大勢の子供さん達が店頭で見てゐるものですから、その時にぴよいと落してしまつて見えなくしたり、また中にはあんまり可愛らしいので、そつと持つて行つてしまふやうな者もありますよ。』

との話です。これにはまゝことに困つたものです。

▽そこで本社でもいろ〳〵と研究して見ましたが、どうにも工夫のしやうもございませんから、今月號から止むなく本文の中にくり入れることゝいたしました。どうぞ惡からず御諒解下さい。

▽愛讀者の皆樣から毎號たくさんの御批評や御希望をいつて來て下さいますので記者一同大層喜んでなります。一々『讀者だより』の欄にのせたいのでございますが、いかんとも澤山でありまして到底のせきれませんので、その中のほんの一部だけしか掲載してなりません。

しかし、記者ちは一々皆樣さんの御通信を隅から隅までていねいに拜見いたして一々編輯の參考といたしてなります。どうか今後もどし〳〵御通信を下さいまし。その月の讀物や畫の中で何が最も面白かつたか、また何がつまらなかつたか、どうぞ遠慮のない御感想をどし〳〵と送り下さいまし。記者たちはそれを拜見することが何よりも有難いことでございます

▽それから今月は前月號の募集童話中佳作を一篇、推薦或は入選作として掲げるはずでありましたが、原稿が澤山すぎて紙面に餘白がありませんでしたので、止むなく次號に廻しました。

▽『金の星』の合本を作つてくれといふ御希望が皆さんから參りますので、近く總クロースの美しい合本を作ることといたしました。第五卷七號から十二號までの六册を一つゞり、それから第六卷一號から六號まで一つゞり、都合二册を近い内にこしらへます、いづれも出來次第お知らせ申上げますから御希望の方はお申込み下さい。

▽たえず美しい面白い雜誌を作るといふことが編輯者のねがひであります。これまでも、相當な苦心し毎號の編輯をやつて來たつもりではございますが、これから尙一層の努力をして愛讀者の皆樣に御滿足をあたへたいと思ひまして、記者一同智慧をしぼつて次號からは一層面白い〳〵美しい雜誌をこしらへます。どうぞ次號からの編輯ぶりを御覽下さいませ。（佐次郎生）

金の星新誌友名簿

辰口　和夫樣（廣島）　脇山しくを樣（北海道）
太田　香子樣（東京）　飯島孝太　樣（茨城）
山村サチ子樣（栃木）　吉田　米夫樣（東京）
湊　守　一樣（東京）　大井田正衛樣（高知）
楊　潤澤樣（群馬）　前田　要樣（北海道）
伊藤三千夫樣（山口）　利岡　富次樣（高知）
秋山儀兵衛樣（靜岡）　稗方　敏郎樣（栃木）
片桐　護介樣（長野）　鈴江　誠一樣（福島）
山木つれを樣（東京）　岡田憲太郎樣（石川）
黒坂小學校樣（宮崎）　木村陽二郎樣（東京）
君島八智郎樣（栃木）　中島　洋治樣（長野）
富岡登久四郎樣（東京）　松尾　登志樣（千葉）
宍戸　功夫樣（朝鮮）　木村喜美子樣（橫浜）
西岡　竹子樣（朝鮮）
脇山久次郎樣（宮城）　山口伊三郎樣（岐阜）
丹治　彦一樣（高知）　村越　三治樣（東京）
吉川　し子樣（北海道）　廣田たか子樣（東京）
小谷　愛子樣（石川）　穂田　勇　樣（愛知）
木田　勇　樣（愛知）　犬崎すみ子樣（山口）
大橋　精子樣（岩手）　日下部善一樣（大阪）
大内　浦三樣（和歌山）　松崎やえ子樣（山形）
相川安太郎樣（岩手）　大野　堅治樣（福島）
布川　房子樣（山形）　大野　宰子樣（茨城）
蝉山ツル子樣（茨城）　羽根田寡子樣（東京）
乾　十郎樣（秋田）　大木　平彌樣（群馬）
岡崎　猛夫樣（群馬）　矢田　青枝樣（京都）
松本　朝子樣（佐賀）　酒田との子樣（大阪）
藥川　丑郎樣（仙臺）

新しく出た本

◆二つの幻影（路谷虹兒先生著）抒情畫家の第一人者として名聲の高い路谷先生の抒情詩畫集であります。其裝幀の麗しさと匂ひ高い各篇の詩とは、なやましいまでに少女のこゝろをひきつけずにはおかないでせう。詩一篇ごとに一頁大の挿畫が入つてゐますが、それは同先生の傑作ぞろひともいふべきものばかりを選んでであり、しかも大部分は新に書かれたものなので、讀者には一層興味の深いものばかりです。最近にあらはれた此の種類の詩畫集中最も注目すべきものであるばかりでなく、定價の壹圓五十錢といふも無類の安價です。（新形版二二二頁　定價壹圓五十錢　神田通神保町三穂社　振替東京三三〇八一）

◆井上ハンディ英和辭典（井上十吉氏著）本書は最新式のHB式印刷法を用ゐて印刷した掌中辭典で、印刷が頗る鮮明で、製本が堅牢で、裝幀が高雅で手ざはりがよい。語數が豐富で最近の新語も數多く收められてゐるばかりでなく、熟語、成句、慣用句、他國語、略語、重要な固有名詞は勿論動詞、形容詞の不規則變化も綿密に出てゐますから大層使用に便利です。（縦四寸三分横二寸四分九百五十五頁總革美本、定價二圓六十錢　日本橋區本石町至誠堂發行　振替東京一七四四）

◆鄉土童謠集夢くばり（森田菱の秋氏著）野口雨情先生が『本書の著者は茨城縣唯一の鄉土童謠の研究者であり、土の上の詩人である』と本書の序文中に述べてゐます。鄉土童謠の價値が漸く認められて來た時に當つて本書の如き鄉土童謠集の出た事は、實に喜ぶべきことであります。（菊半截二七五頁　定價壹圓　水戸上市裏南町三九二鄉土藝術社發賣　振替東京四七八一二番）

◆母子童話集（三宅安子氏、三宅艷子氏共著）これは三宅安子女史と今年琴常四年生になる長女の艷子さんと二人でお作りになつた童話集でありまして、安子さんの童話が六ツと、つや子さんの童話が五ツと外につや子さんの『蝶と蛾』といふ童話劇一つとから出來てゐます。皆子供の興味で、子供の想像を自由に働かせた創作であります。少女の方々の一讀をおすゝめ致します。（四六判一一〇頁　定價一圓　京橋區南鍋町二丁目實業之日本社發行　振替東京三二六）

◆お嚏の卵（武井武雄氏著）畫家として知られてゐる武井氏の童話集です。上品で面白い童話が十七集つてゐます。文章も練つた綺のやうに美くしく裝幀も、挿畫も著者が畫家だけに非常な苦心に成つた美しいものであります。（四六判二九二頁　定價二圓　東京市外高田町目白書房發行　振替東京三二六）

◆明月珠（岩井信實氏著）國學士にして童話創作に熟心な岩井氏の童話が七ツ收められてゐます。材料を佛教のお經から取つたものばかりでありますが、歴史や、傳說や、教訓ではなく、著者の純然たる立派な創作藝術品であります。（四六判一四六頁　定價一圓　京都市東山中外日報社內中外出版株式會社發行　振替大阪六四六一七）

―自由畫選外佳作―

高木しげ子（東京）　鈴木繁泰（千葉）
赤澤尙枝（福島）　佐藤カリ子（宮城）
森原英彦（福岡）　林田三男（熊本）
林田陽夫（熊本）　藤田信三（千葉）
鈴木一郎（千葉）　加藤今三（岐阜）
湊守一（東京）　吉岡タツヲ（不明）
高木要（東京）　布施英男（千葉）
山村トメノ（兵庫）　山田明（長野）
仲野喜美江（岡山）　河島精一（京都）
川地一郎（愛知）　加藤正五（岐阜）
桑原達郎（長野）　杉井清松（神奈川）
吉岡タツキ（不明）　南部原靜也（東京）
草野健治（宮城）　東野輝一（群馬）
八ツ代春村（東京）　關地禮子（朝鮮）
中澤幸江（長野）　七種シノ（不明）
七種カネヲ（不明）　栗林せつ子（熊本）
竹川久子（宮城）　大島シヅ（東京）
木下政夫（不明）　横田猪之助（滿洲）
平山幸子（東京）　井上みよ子（和歌山）

―幼年詩選外佳作―

橫山祐彦（香川）　辻與惣二（滋賀）
杉本藤一（岐阜）　鵜殿多味男（靜岡）
佐藤清一（香川）　白井巖（香川）
若林芳雄（千葉）　北田利子（東京）
西村喜美子（橫濱）　河島清（京都）
西野亨（愛知）　伊藤政一（愛知）
小河モヽエ（香川）　溝淵トミエ（香川）
藤井ミドリ（香川）　田井竹一（香川）
木村榮吉（香川）　佐野勝美（香川）
高橋德義（香川）　久保武市（香川）
藤澤ミツエ（香川）　松本宮子（香川）
荒木克代（東京）　村口ミナエ（東京）
小山啓（千葉）　中島セツ（不明）
齋藤與助（山形）　大谷壽三郎（岐阜）
和田英雄（京都）　谷滿（滋賀）
八卷ミユキ（山梨）　古村與四郎（滋賀）
吉岡與惠門（京都）　吉村かほる（山梨）
片岡美穗（千葉）　宮崎みつ（滋賀）
加藤政一（愛知）　小堀義久（愛知）
早川正議（愛知）　吉田定雄（愛知）
恩部丑松（愛知）　安井定志（愛知）
和田武志（徳島）　篠田昇司（岐阜）
新津マサエ（東京）　糸井象助（京都）
篠田武雄（岐阜）　大野幾藏（山梨）
森川きよ子（山梨）　白砂君子（山梨）
伏見友子（山梨）　中ごゆき子（山梨）
原田一郎（長野）　杉井清松（神奈川）
湊守一（東京）　和田勉（兵庫）
高木しげ子（東京）　赤羽庸一（長野）
橫手百都（札幌）　山口豐子（山梨）
菊地盛（東京）

―綴方選外佳作―

野村蝶（京都）　葛岡はるゑ（千葉）
中田ケイ（千葉）　市東千代子（千葉）
飯田富枝（千葉）　北村房江（千葉）
山田明（長野）　東野麗壽（靜岡）
糸井一郎（京都）　椎橋美壽（東京）
河島清（京都）　下村武男（宮城）
大島鶴聲（東京）　竹川久子（宮城）

―童話選外佳作―

（大人篇）

土橋力（山梨）　新井青一（東京）
原赤穗（東京）　和田莊三郎（千葉）
八ツ代春村（東京）　富岡登久四郎（東京）
松村淑郎（不明）　井深清見（東京）
西村喜代子（橫濱）　岩田信治（愛知）
伊藤登良男（東京）　山口通憲（東京）
久米元一（水戸）　山田明（長野）
奥村光夫（京）　宇野雄二（愛知）

（小供篇）

山本秀夫（大阪）　本田和夫（長野）
栗野武政（茨城）　吉原うめ（茨城）
赤萩きよみ（茨城）　栗野タケ（茨城）
栗野直一（茨城）　栗野久一（茨城）
栗原喜久代（茨城）　栗野キヨノ（茨城）
栗野ツル（茨城）　渡邊常四郎（新潟）
關地禮子（朝鮮）　成屋幸次（熊本）
尾島草一（高知）　杉山キヨ子（大阪）
草野健次（宮城）　糸井義宣（京都）
東野輝屋（群馬）　大田黑龍太（岐阜）
花岡精（宮城）　湯川由太郎（高知）
淺見圓覺（高知）　矢部田鈴子（高知）
伊勢菊枝（滋賀）　濱野由之（秋田）
白井伊三郎（熊本）　西村岡子（奈良）
石川賢月（東京）　春山勇治（福島）
菅野靜（栃木）　東一之（和歌山）
日野みさを（愛知）　阪西陸子（朝鮮）
青野エイ子（高知）　鈴川丑三（山形）
沼弘（山口）　伊藤市太郎（佐賀）

（大人篇）

岩田信治（大阪）　木下政男（北海道）
吉田よしを（東京）　柿沼まさを（東京）
藤見久次（長崎）　有岡肇（東京）
橫平幕路（札幌）　田所梅市（香川）
安藤源吾（岡山）　菅野善一（福島）
山本ちゑ子（東京）　赤澤尙枝（千葉）
仲村多治見（千葉）　糸井一郎（京都）
芦田ハツエ（兵庫）　島明（和歌山）
林吉之助（大阪）　北田明子（東京）
矢下喜謠詠（長野）　千葉清子（宮城）
窪田正重（長野）　八ツ代春村（東京）
安島理作（石川）　黑木正人（鹿兒島）
梶谷千代吉（北海道）　合田重正（大阪）
引地益太郎（京都）　洞地シマ子（和歌山）
岡田義祐（橫濱）　本城定子（京都）
樋口福次郎（茨城）　渡邊常四郎（新潟）
石川成文（福岡）　草野健次（宮城）
坪田繁樹（青森）　中原松藏（橫濱）
北原秀夫（宮城）　河本和夫（兵庫）
松村淑郎（東京）　本田松枝（千葉）
山上正穗（廣島）　中田洸（東京）
小野弘紀（長崎）　竹原美津子（長野）
鐵山齊美榮（愛媛）　富岡雅秀（東京）
羽島精一（千葉）　佐野勝美（香川）
木下光彦（長野）　下村武男（宮城）
吉田米子（鳥取）　柳氏原英作（神奈川）
平井濱雄（愛知）　大井廣子（東京）
加藤正雄（愛知）　井上勝十郎（和歌山）

讀者だより

▼先生、御無沙汰いたしました。ふと病氣になつてしまつたものですから、美しい賞品を頂いた時にもお禮も差し上げませず今日まで延引しました。美くしい賞品を頂きましたのは私の卒業式の日で御座いました。美くしい繪葉書は妹のクラスに記念として教室の壁にはつて頂くことにしました。妹も『姉さんには負けませんよ、私だつてしつかりしますわ』と云つてます。妹は御誌の發行を毎日待ちかねて、自分で讀んでしまふとすぐに先生にお見せするやうにしてゐます。御誌のおかげで妹の創作力がつき、先生との間に親しみが增しました。先生までまだ『金の星』が來ないでせうか〳〵とお待ちになつてゐます。女學校の卒業した私にだつて『金の星』を愛讀することをやめられません。この月からどし〳〵投書するつもりです。（武藤つれ子）

▼櫻の花が散つたといふ都の便りをきかされても熊の住む北海道ではまだ峯々には白雪が寒さうな姿を見せてゐます。海近き里邊に落葉松が漸やく碧玉の樣な若芽を見せた位のものです。こんな寂しい國に住む可憐な小供達が、四五人『金の星』の誌友になりてお互に淋しい生活を慰め合ひたいとこふのです。一手數でも誌友規則書を一部御分け下さい。（北海道　觀月未知路）

▼編輯部の諸先生。久しい間ごぶさたを申しまして、誠に申し譯がございません。仙臺にも桜から各方面にいろ〳〵と越きは逆つてをりますが、子供の會合があつて、大變いそがしく暮してゐます。十三日は兒童倶樂部の第二回童謠童話大會があります。五日には市内全幼稚園の聯合の集りがあつて、大變うれしく子供と一緒にあそびました。童謠が一つ出來ましたからお送りいたします。（仙臺　睦子　英二）

▼『金の星』五月號は大そう早く來ましたね。早速開いて見た所「小馬」が出ました。目次に「小さな庭……若林芳雄」とあつた時胸をどきどきさせながら、見つけたけれども見つからなかつた。なぜでせうか。お答へ下さい。

なほ次の問にお答へ下さい。

一、幼年詩及び童謠は一枚の紙に何題出しても差支なきか。又半分に切つた紙でもよいでせうか

二、童話は毎月推奬又は特選がないのですか。

三、童謠は入賞は無いのですか。

四、幼年詩その他の兒童創作の推奬の場合は賞品をどうするか、

右五問是非お答へ下さい。

（千葉縣　若林芳夫）

◇ホントに申譯ありません。「小馬」は初めて出すのでいろ〳〵ゴタゴタした上、活版所などの都合もあつて、目次の通りに南春をみたす事が出來なかつたのです。さう云ふわけですから何卒おゆるしください。五つの御質問に對する御答へ（一）幼年詩、童謠は一枚に一題書いて下さい。半分に切つた紙でもよろしい。（二）よいのがあれば何時でも推奬します。（三）童謠は大人（一般讀者）の作ですから子供の賞品は差上げないことにしてゐます。併しよいのがあれば賞金を送る事になつてゐます。（四）幼年詩、自由畫、編方の（賞）に對しては『金の星』特製の賞品を差上げることになつてをります。（記者）

▼一昨日『金の星』を手に致しました。表紙の「夢の國」と口繪の「悲しい約束」は美しいよい繪だと思ひます。「西班牙の山賊」はいつもながら冒險をするジェラール中尉に驚きました。弟もこのお話が一番すきだといつて居ます。他によい讀物は、「勇しい王子」「首なし騎人」「物草太郎」「狐の裁判」でした。水滸傳のお話は虎を殺したりするのが大變勇しく思はれます。どうぞ何時もこの樣なお話しなお書き下さい。名所めぐり童謠は今度は「阿彌陀池」ですね。「ぢくり」はよくおぼえていつも歌つて居ます。それから今度投書致しましたから一つでも誌上におのせ下さい。これからせい〳〵投書しますからどうぞ宜しく。（東京　立石百合子）

◇一つでも二つでも三つでも、よいのであれば載せます。（記者）

▼五月號は大變早く出ましたね。嬉しくてなりません。それに愛らしい「小馬」も一しよでしたから尚ほさら。うれしう御座いました。本居先生の回譚に伴奏をお付け下さつたのも嬉れしい事の一つ。ただ僕の投書が出てゐないので一寸悲感しました。毎月々々しつこく投書して、さぞうるさくお思ひになるでせうね。（東京　南須原靜也）

◇少しもうるさく思ひません。記者は皆樣の投書を見るのが非常に樂しみです。（記者）

▼一筆申し上げます。私はこの五月から、『金の星』愛讀者になりました。いつでしたか學校の先生が『金の星』と『赤い鳥』は繪からして美術的ですし、お話も無邪氣で、私たち大人でさへ、面白いと思ふのですから、たつてとは申しませんが、讀んでごらんなさい、とおつしやいましたから讀んで見たわけなのです。さうすると大そう面白いので、お母さまにおねがひして、本屋から取ることにしたのです。記者殿、私は綴方と、童謠を出したいのですがだしてらよろしう御座いますか、おたづねいたします。（東京　百代）

◇どうぞ澤山御投書下さい。綴方も童謠も一人で一度出してもかまひません。たゞ、原稿にはキツト住所と姓名をハツキリ書いてください。（記者）

▼なはがきとなつかしいなかもとせんせいのうつくしい「きんのほしエハガキ」をうれしくいたゞきました。なかもときいちせんせいがざつしのうえでわたくしになたよりくださつたことをほんとにうれしくなもつています。せんせいがえをかいていらつしやるあひだわわすれてもよすまいとなもつています。そしてほかのせんせいがたのなはなしにしたしめることよろこんでいます。なとうとたちもきんのほしでどれだけよろこんでいるかわかりません。よりいじようごべんきようください。（とうきよう　くにい　しんいち）

▼記者先生、お丈夫ですか。岐阜に雨が降つてばかりゐて何もせれません。僕は毎日『金の星』ばかり見て暮してゐます。岡本先生にお手紙を頂いて嬉しくてなりませんよくおれい申しておいて下さいませ。それから野口、沖野、本居先生お手紙を下さい。（岐阜　柴田美樹）

▼野口雨情先生、濱田廣介先生の二人を贊助員として今度、童話童謠誌「摘籃」が生れます。「摘籃」は皆樣から童話童謠童話劇及び口語和歌を募集します。又大人のそれ等に關する研究講話なつのりますそしてそれにはそれぞれの賞金を差上げます。何卒皆さん友達などおさそひの上、澤山應募して下さい。そして愛讀者となつてやつて下さい。創刊は六月一日、毎月發行します。作品は〆切は毎月末日です。くはしい其他の事は御申込になればお知らせします。（岡山縣御津郡、野々口、安藤桑服店内、摘籃發行所）

▼『金の星』の皆樣、今度私達少數の者が純な童話童謠を始として文藝總てを研究せんがため、小さな雜誌「春潮」を發行してゐます。郵券十二錢送つていただくと一部早速送ります。宛名は（福岡縣山門郡柳河町瀬高町　川口勇吉）

▼皆さん。私共は童話童謠を眞面目に研究するために「とんぼ會」といふものを作つて毎月一回活版刷りの美しい雜誌を發行して會員諸君の作を載せて居ります。もし皆樣方の中でこの小さい集ひに御賛成の方がありましたらば二錢切手八枚御送り下さい。見本御送りします。宛名は（横濱市西戸部町九七八竹内義男）

▼僕が『金の星』に童話の投書を致しましてから、一年斗りたちました。其間僕の下手な童話をしばしば佳作表の所にお出し下つて僕を大層喜ばしてくださいました。しかも齋藤先生の御批評は一回もたまはりませんでしたが、今度六月號で「金貨になつた硝子」と云ふ童話に對して先生からの貴い批評を下さつた事を僕は大いに御禮を申上げます。長所を言つて下さる事もうれしくはありますが、それよりもその短所を注意下さつて、より善き作品を作るやうに注意下さる事は私にとつて何よりもうれしいのであります。（東京　松村淑郎）

▼『金の星』がだん〳〵に生長して行くのを見て喜びに堪えません。

▼童話を書いて見ました。それから此間野口先生がおいでになりました。さんれんながら病氣でねて居てあふ事が出來ませんでした。（長野縣　AY生）

▼記者先生、しばらくですネエ。今年の四月から私は高等三年になりました。月日のたつのは早いものと昔からきまつてゐるが特別に私には早いやうに感じられます。私等のクラスで取つた『金の星』も今年で恰度二十册たまりました。書だながにぎやかになりました。それでも私に少しこまることが出來ました。高等一年や二年頃迄は名前の上の高一、高二も品がよかつた位だが高三と書くのがチトはづかしい　がします。（京都　糸井一郎）

◇まづ皆さん、通信が載ぜきれないで深山に殘つて居ますが、私面がありませんから次號に讀ります。（記者）

山栗鈍

（回六第）

沖野岩三郎

前號までの梗概。與兵衛爺さんの家に飼はれてゐた猿のチョンが、馬屋の屋根でひなたぼつこをしてゐると、裏山の樫林へ山猿が澤山出て來ました。その猿達と話をして見ると、中にはチョンの死んだお母さんを知つてゐる猿もゐるので、チョンはすつかり仲よしになつてしまつて、毎日この樫林へ來ては、面白い話をしてやると約束しました。その翌日から山猿たちは必ず樫林へ集つて來ました。チョンは人間社會のないろ〳〵聞かせました。山猿たちは一々あきれたり、たまげたりして聞いてゐます。チョンは或日、『定九郎先生』と『赤頭巾』の話をしました。これは二匹の猿の名ですが、この二匹は四國へ渡らうとして誤つて軍艦に乘込んでしまひ途に英國まで連れて來られて了ひました。この艦には大山兵曹といつて『赤頭巾』の昔の御主人の息子が乘組んでゐました。

歡迎會

法性院と吉水院と二疋の猿の大將は、十七疋づつの家來を引つれてまたチョンの話を聽きに來ました。三十四疋の猿は、定九郎先生や紅頭巾先生がどうなつたか、一時もはやくそれを聽きたいといふ風に、大將の命令をようく守りました。

『さア、皆さん、この前の續きをお話し致しませう。』

チョンは鈍栗の樹の一の枝に胡坐をかきながら言ひました

『定九郎先生と紅頭巾君とが、外國の大きな町で狒々といふものと話をしたと事だつたネ。』

法性院は、前の話を覺えてゐて、さう言ひました。

『さうです。それから面白い事があつたのですよ』と言つてチョンは笑ひました。

『どんな事があつたのです？』

吉水院は尋ねました。

『その翌る日、日本の軍艦に乘つてゐる士官といふ大將達や兵士といふ家來達が、町の大きな家へ招かれて御馳走になつたのです。』とチョンが言つた時、高い枝の上にゐた小猿が、

『御馳走は栗の實だつたのですか。』と問ひました。

『い、え、違ひます。その時定九郎先生も紅頭巾君も一緒に行つて御馳走の席に並んだのだッて……。さうするこそ、變な御馳走が出て、人間は皆なそれを旨さうに食べたが、定九郎先生にも紅頭巾君にも、ちッとも食べられさうなものは無かつたさうな。』

『栃の實や鈍栗の實ばつかりだつたのだらう。』と岩の上にゐたお腹の大きな猿が言ひました。

『そんなものは無かつたさうだが、二疋は大山兵曹の傍で御馳走を、ぢろ〳〵見てゐますと、紅頭巾君が、《おい、定九郎先生、今日はこの國のお彼岸らしいぞ。》と囁きました。

《どうして、それを知つた？》

《あのお皿の上に載つかつてゐるおハギを見給へ、旨しさうだなア。》

《うん、大豆の黃粉をまぶしたおハギだよ。》

二疋がさう言つてゐると、大山兵曹は小い刀のやうなもので、其のおハギを切つて食べ始めたさうだ。さうすると、お隣にゐた兵隊さんが、

《それをお猿に食べさせて見ろ！》と言つたので、大山兵曹

はおハギを半分づつ二疋に吳れたので、喜んで食べてみたが、ちつとも甘くないのだつて。』

『何だッたのかい？』と法性院は尋ねました。

『それはネ、其國の人達の食べるコロッケといふものだッて。』

『コロッケ？　ごろつき見たいな名だネ。』と吉水院は笑ひました。

『それからネ、二疋は、コロッケといふものにはお砂糖を塗してないから駄目だとお猿の言葉で話してゐると、紅頭巾君が、

《おい〳〵、お蕷があるぞ、燒蕷が……》と云ふので、机の眞中を見ると、燒蕷のやうなものがあつたのです。二疋は何とかして其のお蕷を食べたいと思つてゐると、今度は大山兵曹が、

《お猿にバナヽを食べさせたら食べるだらうか。》と云つたのです。此國では燒蕷をバナヽと云ふのだなァと、思つて待つてゐると、大山兵曹がバナヽを一つづつ二疋に吳れたので、大喜びで、いきなり二つに折つて食べようとすると、これはまア、どうした事です。其のお蕷はぐにやりと、二つに折れて中から白いものが出て來たのですつて。』

『お蕷の皮が堅かつたのですか？』と法性院は尋ねました。

『それはお蕷では無くつて、あの芭蕉の實ださうです。』

『芭蕉にそんな大きな實がなるのかなァ。』

『ところがね、紅頭巾君はそのバナヽの皮だけ食べて中の實を捨てたのだッて。そして、澁い澁いと言つて吃いたさうです。』

『その他に何を食べたかい。』

『バナヽの皮に閉口した紅頭巾君は、定丸郎先生の刀の鞘を引張りながら、

《あの向ふに梨の實があるぞ、あいつを欲しいなァ》と云つてゐると、大山兵曹の右側にゐた士官が、

《お猿にシュークリームを食べさせて見ようぢやないか。》と言つて、その梨の實のやうなものを一つづつ二疋に吳れたのだつて。定丸郎先生は梨が大好きだつたので、士官のくれた梨を撮ん、がぶり！と喰むとさァ大變です。梨だと思つたのはお菓子だつたから　中から白いお味噌のやうなものが、

ぬや〳〵と出て來て、眼も鼻も口もべた〳〵になつちやつたのだつて。』

『そいつは面白かつたらう。』と法性院も笑ひました。

『それを見た紅頭巾君は、シュークリームが、お菓子だといふ事を知らないので、

《こらッ！　失敬千萬な。僕達を誰だと思ふ？　僕達は大日本帝國の山猿だぞ。このやうな腐つた梨を食べるやうな獸ではない！》と云つて、其のシュークリームを士官の顏へ投げつけたのです。

『二疋はひどい眼に合はなかつたかい？』

『皆なは大笑ひで、あつちこつちからお菓子だの果物だのを澤山貰つたさうです。』

『人間といふものは、顏へ物を投げつけると、旨しいものを吳れるんですか。』

法性院は不思議さうにたづねました。

『さァ、そんな事は無いでせう？』と言つて考へてゐたチョンは、

『あ、さう〳〵　僕は今思ひ出した。其の國の名はイギリスと云ふので、日本の兵隊さんが御馳走になつた所はロンドンといふ町でした。』と云ひました。

『イギリスのロンドンといふのは此村よりも大きいでせうか。』と法性院が訊くと、チョンは頭掉をふつて、

『此村の二倍はありませう。』と云ひました。

『その兵隊さん達は御馳走を食べて、それからどうしたのです？』

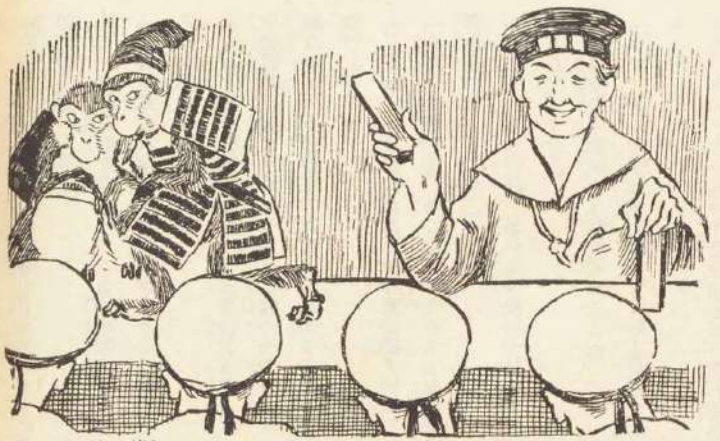
吉水院は尋ねました。

『日本の兵隊さん達は御馳走を食べて、お腹を一杯にしてゐますと、イギリスの兵隊さん達は面白い音樂に調子を合せてダンスといふ踊りをし始めたのだつて……所が日本の兵隊さんは盆踊りといふ踊りしか知らないので、皆なぼんやり眺めてゐたのです。』

『僕だつたら旨く踊つてやるんだがなァ。』

とチョンの傍にゐた顏の圓い猿は腕を拱き乍ら言ひました。

『日本の兵隊さんはイギリスの兵隊さんに御馳走になつたので、その翌る日はイギリスの兵隊さんを、お船へ招いて御馳走のあとで餘興に何をするかと云ふ事でした。淨瑠璃を語つ



てもイギリスの兵隊さんには解らないし、浪花節をやつても解らないし、尺八を吹いても三味線をひいてもとても、イギリスの樂隊にはかなはないし、どうすればいゝだらと云つて、皆な有りつたけの智慧を絞つて考へてゐると、大山兵曹は、大將の前に出て行つて、

《恐れながら申上げます。今日の餘興は一切私にお任せ下さいますやうお願ひ致します》と言ひました。大將は大山兵曹を平生から可愛がつてゐましたから、

《では面白い事を考へて置け、餘興の事は一切、君に任せるから》と言つて安心したやうに、につこり笑ひました。さて大山兵曹は何とかしてイギリスの兵隊をあッと言はせてやりたいと思ひましたので、定九郎先生と、紅頭巾君とのために、紙の烏帽子と紙の鎧とを造つてそれを着せました。それから三時間ばかり一生懸命に教へ込んで、

《さア、定九郎先生、紅頭巾君、今日こそお前達二人は、大日本帝國のために働くのだぞ。この芝居がうまく出來たならその褒美としてバナヽでもシュークリームでもコロッケでも何でも食べさせてあげる…》と云ひました。けれども二疋はそんなものを食べたいとは思つてゐませんでした。栗が食べたいなア、日本の栗が……と二疋は泣き出したいやうな聲で言ひましたが、大山兵曹には解らないやうでした。

食堂ではもう御馳走が濟んだと見え、多勢が餘興場へ集つて、小い床机に腰をかけました。すると左の方から正行卿が出て來まして、頻りに泣く眞似をしました。大山兵曹は一々説明をしながら上手に二疋を使ひましたので、イギリスの兵隊さん達は皆な感心してしまひました。

《日本といふ國は忠義な人間ばかりでなく、獣まで忠義を知つてゐるんだ。これは感心な國だ……》と云つて、皆な一度に手を拍きました。所が丁度此のお芝居をしてゐる二疋のお猿の前にゐたイギリスの兵隊さんが、ポケットから圓い小いチョコレートを出して、ぼり〳〵食べ始めたのです。それを見た定九郎先生の楠正成は、

《おい〳〵紅頭巾：　見ろ〳〵あの男は栗を食べてゐぢやないか》と云ひました。

《さうだ〳〵、けしからぬ奴だ、忌々しいネ、變なバナヽやシュークリームを吾々に食べさせやがつて、自分で栗を食べてゐるッて……》

言ふや吾や紅頭巾の正行卿は側にあつた小い腰掛を攝んで其の兵隊さんに投げつけました。

きやーッ：　と言つて兵隊さんが額を押へて立上るのを見て、

《日本の兵隊さんはダンスが出來るだらうか》

《ダンスも駄目だらうも駄目だらう》

よ。お一、二の體操でもして見せるんだらう》

イギリスの兵隊さんは、そんな事を言つて少し輕蔑したやうに笑つてゐました。すると正面の一段高い所へ現はれた大山兵曹は、小い拍子木をかちん〳〵と打いて、

一座高うナござりまするが、御免ナ蒙りまして申上げます。こゝもと演じまする藝題の儀、大日本帝國の忠臣、楠正成父子櫻井驛訣別の場でござります。なにさまこれを演じまする俳優は山奥深く棲みまするマンキイ君の事にございますれば、仕損じる程は幾重にも御免ナ蒙りたく存じまする……

と申しました。そして右の方から楠正成卿が靜かに出て來

た定九郎先生は、ひらりと壇の上から飛び降りて、兵隊さんのポケットへ手をさし入れて其所にあつたチョコレートを掴んで、壇の上に駈け返つて其の半分を紅頭巾君に與りました。

《おい〳〵此の栗は妙に甘いぞ！》と紅頭巾が言ふと《これが所謂甘栗だ！》と言つて定九郎先生はそれを皆なむしやむしや食べました。

弱つたのは大山兵曹です。イギリスの兵隊さんに怪我をさせたのですから、何とか云つてお詫を申さねばなりません。で、拍子木をカチン〳〵と打つて、

唯今日本の猿が、貴國の水兵さんに對して亂暴を働きましたる次第、誠に以て恐縮至極に存じ奉ります。併しながらこれには理由がございまするから、一通り御聞き下さいまするよう……抑も大日本帝國は忠孝の國でございます る故、楠公父子訣別の芝居を觀ます節は、皆な涙ながらに見物致します。其時お菓子を食べたり、菓物を食べたりする者は一人もございません。若しありましたなら、直ちに警官が其のお菓子を取上げる事になつて居ります。それ故唯今水兵さんがチョコレートを召上つた時、定九郎先生の正成卿は警官代理として、それを取り上げたのでございます。何さま畜生の事でございますれば、特別のお情を以つて御用捨下さいまするやう、伏して懇願奉ります。

と申しました。それを聞いたイギリスの士官は、非常に感心して、イギリスの兵隊さんに向つて、《礼を付け！》と號令をかけて、《大日本帝國の忠臣楠正成卿父子に對して敬禮！》と申しました。そこで何百人の兵隊さんは、皆な右の手を耳の所へ持つて來て、その掌を定九郎先生と紅頭巾君とに見せました。それを見た定九郎先生は、

《宜しい、君達が、さうして掌を僕達に見せて、栗を一つも持つてゐないから、宥して呉れと謝罪るなら赦してあげよう皆な坐つて宜しい、僕達は綱渡りの輕業をして見せます！》

と言つて、正成父子は張り渡した細い紐の上を日傘をさして右に左に渡りました。

日本の兵隊さんは太鼓を打きながら、大きな調子外れな聲で、

嗚呼正成よ、正成よ、公の逝去のこの方は、
黑雲四方にふさがりて、月日は爲に光りなく、

と呶鳴りました。

『定九郎先生も紅頭巾君も調子に乘つて綱に縋つて宙返りをやつたり、さしてゐた日傘を見物の中へ投げたり、隨分悪戯を致しました。

お芝居がすむと、イギリスの兵隊さん達は皆な、面白かつた面白かつた、面白かつたと言つて、大喜びで歸りました。

大山兵曹は大將の所へ呼び出されて、お褒美を貰ひ、定九郎先生と紅頭巾君とは大山兵曹からチョコレートを三つづつ當座の褒美として貰ひました。

イギリスの大臣樣がその事を聞いて、是非一度日本の猿芝居を觀たいものだと仰せられましたが、丁度軍艦が港へ出る日が來たので、残念ながら御覽に入れる時間がありませんでした。

そこで大臣樣は、せめてもにお猿に面會だけでも許して欲しいと言つて、わざ〳〵軍艦までお出でになつて、綱渡りを一つ御覽になつて歸りました。その時大臣樣は、日本へ近いうちに櫻の花を觀に行くが、お猿の芝居をする所は何所かとお尋ねになりましたので、それは東京の淺草にある花屋敷だと、大山兵曹がお答へすると、大臣樣は手帳を取出して、ハナヤシキと片假名で書きつけたといふ事です。』

チョンは長い話に少々疲れたらしく小い欠伸をしました。

（つゞく）

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕題題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、**姓名は學校や學年**(または住所と年齢)とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の**賞品**を差上げます。**次號締切**は六月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は九月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謠……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹册　參拾錢　送料壹錢
三ヶ月分三册(送料共)九　拾　錢
半年分六册(送料共)壹圓八拾錢
壹ヶ年分十二册(送料共)參圓六十錢
但し四月號九月號は特別號で卅五錢新年號は四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい
振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
〔注意〕▽切手代用は(壹錢切手)一割增しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名にはつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年六月六日印刷納本(毎月一回)
大正十二年七月一日發行(一日ノ行)

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

新懸賞

◆うたかた……中原綾子
◆窓……？……
◆海のかなたへ……荒江啓
◆傳書鳩……久方弘
◆流れ星……邦枝完二

この五つは令女界の七月號に出てゐる大評判の小說です。さてこの中「窓」といふのだけはお書きになつた先生のお名が書いてありません。どなたでせう？。
本誌の七月號をごらんになつてお答へ下さいませ。

お答へは少女にかぎる。

皆さんの『金の星』が我が國童話雜誌中の一番立派な雜誌であると同じく、この令女界は少女雜誌中の權威として高級な少女方に愛讀されてをります。皆さんのお姉樣やお友達の方で他の少女雜誌を物足りなく思つていらつしやる方にぜひ本誌をおすゝめ下さいませ。

この新懸賞は少女でさへあればどなたがお答へ下すつてもかまひません。

△正解者へくじ引で五十名へ令女メダルを、五百名へ繪封筒十枚づつを、其の他全部へ本誌壹部をさしあげます。
△〆切大正十二年六月三十日。
△賞品發送七月中。
△宛名　東京市外大森不入斗四五五令女界編輯部。

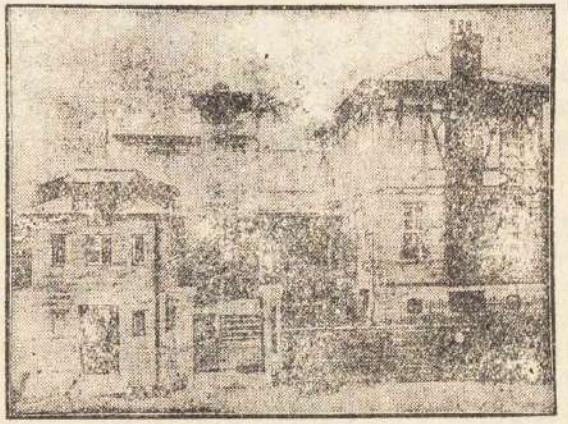
天下の青年は何故に爭ふて

大日本國民中學會に入會する乎

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
理學博士 山内繁雄
顧問 新渡戸博士 三宅博士
井上博士 浮田博士
岡田前文務大臣

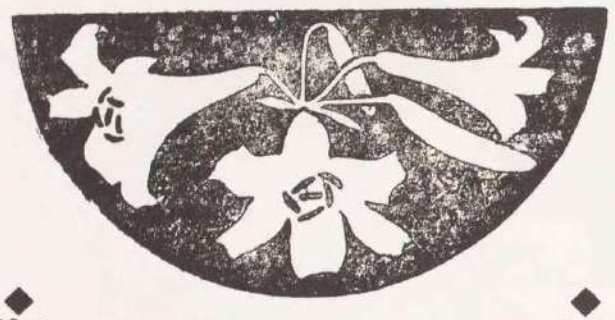


一人前の男となるには
どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

⊙創立以來二十一年記念大特典提供
目下新學期開講 入會の絶好機

講義錄見本つき
規則書無料進呈



◆坊ちやまや孃ちやまへ

暑い眞夏が參ります、お召物の御用意は如何で御座いますか、三越の四階の小兒部には涼しくて着心地の好い夏の可愛らしい子供洋服が澤山にあります

梅雨はれて百合咲く頃となりました

また趣味と實用よりして御家庭でお作りになる方が增して來ましたので三階の洋服部には舶來の洋服生地が澤山に取揃へてあります、何卒御來店下されば

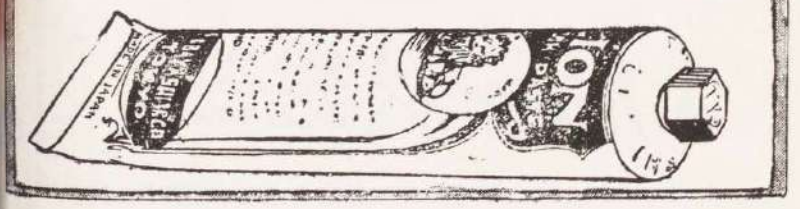
◆御用命の程願上げます

三越呉服店

東京市 駿河町

「姉ちゃん、あたし、あまくって、おいしいはみがきがほしいわ。」

「さう！ではねえ、

ライオンねりはみがきを

おつかひなさい。ライオンねりはみがきは、ほんとに、おいしい、すずしいはみがきですから。」